

---

# すま村のすまさん家。

秋空藤乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

すま村のすまさん家。

### 【Nコード】

N0322E

### 【作者名】

秋空藤乃

### 【あらすじ】

スマブラのキャラクター達が住む、すま村。ここにある「すま家」を中心に、彼らの平凡じゃない日常のサプライズをどうぞお楽しみ下さい。

## 人物紹介 すま家の家族&その他のお宅

### 《すま村のすま家》

ファルコン

すま家の父親的存在。なので皆から

「父さん」

「パパ」と呼ばれている。

超前向きの熱血野郎だが、それゆえに失敗が多い。また、サムスに頭が上がらない。スネークと仲が良い。

サムス

すま家の母親的存在。なので皆から

「母さん」

「ママ」と呼ばれている。

主に家事全般担当で料理が得意。怠けるときはとことん怠ける。皆に優しいが怒るとかなり怖い。

リンク

家事ではおやつ係。

温厚な性格のしっかり者で、よくサムスを手伝っている。そのため料理も少しは出来る。ゼルダとは友達以上の仲。ちみっこ達にサムスの次に懐かれている。

シーク

家事では裁縫係（意外に手先が器用）。

物静かで落ち着いた性格となかなかの根性の持ち主。意外に黒い一面も。

ゼルダ

かなり天然入ってるお姫様。リンクと友達以上の仲。家事では掃除係で、彼女がモップを持って通った箇所は塵1つ落ちていないという。近所のピーチと仲が良かったため、よくお茶や買い物したりする。

マルス

甘いマスクの下に黒さを持つ王子様。

扱いやすいため本作では一番登場が多くなる主人公的存在。寝惚けている時が一番最強。しかしその間の記憶がない。

調理の経験は0で、塩と砂糖の区別どころか人参と大根の違いすら分らない。ピーマンが大嫌い。

ロイ

すま家の愛され系直径型純粹青年。

リンクを

「先輩」と呼んで尊敬している。何かと振り回されやすい性格。人参とトマトが苦手。

アイク

口数が少ないため無愛想に見られる青年。年齢より老けて見られるのが悩み。何かと面倒見がいい兄貴的存在。

いつの間にかガノンドロフの肩もみ係にされているが小遣いが貰えるので不満はない。

カービィ

すま家の元気なやんちゃちみっこ。食欲旺盛で好き嫌い無しだが、他の皆の分までおやつやご飯を食べてしまうという問題がある。

ポポ&ナナ

すま家のやんちゃな二人組。頑張り屋だがたまに頑張り過ぎて怒られる事も。

ネス

すま家ちみつこの中でもしっかり者のお兄さん。自分から進んで家事を手伝うとてもいい子。何気に大人っぽい一面も。

リユカ

ネスに憧れるピュアナ子。近所のトレーナーと仲がよく、しょっちゅう遊んでいる。

ピット

好奇心旺盛の元気少年。勝ち気な性格だが一部寂しがりやな所も。

《マリオさん家》

マリオ

スマッシュブラザーズのリーダー・Mr・Nintendo。すま家によく遊びにくる面倒見のいい人。

ルイージ

マリオの弟。

気さくな兄と違って弱気な一面がある。たまに変な雄叫びを上げる。

ピーチ

マリオさん家の紅一点。

穏やかだが見上げた根性の持ち主。ゼルダとは友達。

ヨッシー

マリオさん家のペット。よく食べよく眠る只今育ち盛り。

ワリオ

マリオさん家のトラブルメーカーにしてすま村のお騒がせ者。以前夜中にバイクで村を爆走していた所、その騒音に怒った寝起きのマルスに沢山のボム兵を投げつけられた事がある。以来マルスを恐れ少しは大人しくなり、気さくな親父になった。

《スネークさん家》

スネーク

ファルコンと仲の良い不思議なおっさん。

よくすま家に遊びに来て、たまに段ボールを被ってすま家の前にいる。それをゴミと勘違いしたアイクに蹴られる悲惨な人。同居している子供達の面倒を見るいい人。

ポケモントレーナー

スネークさん家のしつかりした息子の一人。すま家のリユカと仲が良く、よく一緒に遊ぶ。

フォックス

スネークさん家のしつかりした息子の一人。毎回変な行動をするスネークをよく注意している。そっけないが優しい所もある、属に言うツンデレ。ファルコとウルフもいるが作者が性格が分からないということで省略。

ピカチュウ

スネークさん家のペット的存在。

放電が得意で、トレーナーとすま家のサムスによく懐いている。

## 《ガノンさん家》

ガノンドロフ

悪役顔が恐いおっさん。

オヤジだらけの家に不満があり、構ってほしいがためにすま家によくお裾分けや差し入れを持ってきて遊びにくる。サムスの料理とリンクのおやつとアイクの肩もみが好き。たまに泊まることも。

クッパ

オヤジ3人で暮らすデデデ城の住人。

むさいオヤジ達から一時抜け出すため、マリオさん家によく遊びにくる。

デデデ大王

デデデ城の主。

むさいオヤジだらけの所から避難するため、よくすま家に遊びにくる。ちみっ子達のいい遊び相手。

## 《その他》

ルカリオ

たまにすま村にいる不思議な人。性格はいたって温厚。

メタナイト

たまにすま村にいる剣術使い。マルス達とよく手合わせをする。

ソニック

超速急でランニングをしている人。あまりに速いため声をかけられない。

ドンキーコング&ディディーコング

すま村の森に住んでいる二匹のゴリラ。機嫌のいい時はバナナ

を分けてくれる。



## 人物紹介 すま家の家族&その他のお宅（後書き）

多分まだ沢山いるんだろうけど、とりあえずこんな形で話を進めていこうと思います。 よろしくお願いします。

## 覆水は盆に返らない

すま家のリビング。

テーブルに裁縫道具と沢山の衣類を広げたシークが何やら緑色の物を縫っていた。

「やあシーク、励んでるね。」

と、リビングの入り口からマントを持ったマルスが現れた。

「何を縫ってるんだい？」

「リンクの帽子だ。昨日の乱闘で誤って破いてしまったらしい。」

シークは糸を切ると帽子を床に置いた。衣類を踏まないように近くに座ったマルスがそれを見ると、破れた箇所は綺麗に直っているのが分かった。

「さすがシークだねえ……じゃあ次はこれを頼むよ。」

そう言つてマルスは持っていたマントをシークに渡した。見てみると裾がボロボロになっている。

「長いこと使つてたから大変なことになってね、直してくれないかい？」

「…分かった、じゃあ後でやるから」

「今すぐにやつて。」

「……………は？」

「この僕を誰だと思つてるんだい？アリティア国の王子・マルス様を待たせるだなんて…王子の命令なんだから、早く直してくれよ。」

マルスの偉そうな口ぶりにシークは怒ると思いきや、相変わらずの無表情でボソリと言った。

「マルス、君は分かっているのかい？」

「……分かってはいるかって何をだ？」

するとシークは覆面で隠れたその顔に、ニヤリと黒い笑みを浮かべた。

「君の大事なマントの運命は今、僕の手によって委ねられている……君の態度次第でこれは再びマントととして生まれ変わるか、それとも……父さんの新しいトランクスとなるか。」

「……！」

マルスの頭に朝日を浴びて輝いている青いトランクスをはいたファルコンの姿が浮かび、彼の顔は髪の色と同様青くなった。

「この生地だったら大きさもちょうどいいし……なんだったら禪にでもしようか？」

「ふ、ふんど……っ!？」

マルスの頭に、朝日を浴びて輝いている青い禪を着けたファルコンの姿が浮かび、顔面は蒼白になっていた。

「今ならまだ間に合うけど……どうする？」

「ぐう……仕方ない……。」

マルスは姿勢を正すとシークの方に向き直し、頭を下げた。

「お願いします……マント直してください。」

「よろしい。じゃあハイこれ。」

そう言つてシークが渡した物は、布を裁つための大きなハサミだった。

「……何これ？」

「それでマントの裾を切っておけ。僕は先にこちらを仕上げたい。」  
シークはそれだけ説明するとまた作業に戻り、今度はネスの服にボタンを着けていた。

マルスはテーブルにマントを置き、慣れない手つきで裾を切り始めた。

「……それにしても、こんなに仕事があるんじゃないや君も大変だろ？」

「いや…僕は趣味の一環としてやっているからね。案外楽しいものだよ。」

「ふうーん…そういえば、この間のゼルダの誕生日にリンクがボロボロのデイベアを彼女にプレゼントしていたよね。あれってもしかして、君が裁縫を教えたのかい？」

「ああ、リンクが『ゼルダに何か手作りの物をあげたい』と言っていたから……あの時に彼が作った巨大ケーキで充分だと思うんだけどね。」

「……それだけゼルダの事が好きなんだよね。ああ、青春だねえ。」  
「ジョキン、という音を合図にマルスはマントを切り終えた。」

「ほら、これでどう？」

「……かなり曲がってるな。君、今までハサミを使った事があるのかい？」

「切れただけでも上等だと思ってくれよ。」

「まあいい、後で僕が少し整えて                      ん？」

マルスがマントを寄せたその下に、ゼルダのドレスが姿を現した。

「……！」

そのドレスを見た途端、無表情だったシークの顔色が変わった。

「あれ？これってゼルダのドレス                      ん？」

後から見たマルスも、何かおかしいということに気付いた。

そのドレスは、ザックリと縦に大きく切れていた。

「ねえシーク、これも直すように頼まれたやつなのかい？」

「………取れた装飾のつけ直しだけな………」

「え……じゃあ、この切れ目は………」

「……何で一緒に切ったんだ……？」

「だ、だって、こんな所に置くから間違っ……！！君だって、何でこんな所に置いたんだ？」

「それは……もう直したからたたんでおこうと思って……。」

『……………。』

「と、とにかくこれを直さなくちゃ！シーク、ミシンとか無いの？」

「忘れたのか？前に父さんがズボンを直すって言って針に糸が通らないって理由で、キレて壊したじゃないか……。」

「ああ、んでその後母さんにフライパンで殴られて、『慣れないことするなら最初からするんじゃないわよ！！』って怒鳴られてたっけ。あの時の母さん怖かった……じゃなくて、とりあえず応急処置しておいてくれ！」

「何とかやってみるよ。」シークが光の速さでドレスを縫う傍らで、マルスは頭を抱えていた。

「……出来た！」

その声と共にマルスがドレスを見ると、切れ目は見た感じは目立たなくなっていた。

「すごいじゃないか、シーク！これならミシンなんて無くても

「

「いや、いくら完璧とはいえ手縫いだ。いつほつれるか分からない。

」

「えええっ!!じゃあどうすれば……!!?」

「……三日後に、注文したミシンが家に届く。それまでドレスに何か起きないようにしなければ……。」

「あれ?ゼルダに謝るんじゃないのか?」

「………ついでに、ばれた時の言い訳も考えよう。」

続く。

## 覆水は盆に返らない（後書き）

続きます。この物語はスマブラのキャラクターはDX・Xを問わず出てきます。作者は皆好きなので……。次の話もよろしく願います。

## 勇者の憂鬱（前書き）

前回書き忘れましたが、この物語では、シークとゼルダは別人物と  
なっています。ご了承ください。



## 勇者の憂鬱

翌日（ミシンがくるまであと2日）。

ゼルダは早速あのドレスを着て、朝食後庭に出ていた。

「まあ……今日はいい天気ですね……。」

「ああ、そうだな……。」

シークと二人で庭を歩いていたゼルダは、日の光を浴びながら穏やかに微笑んだ。

「あ、見てくださいシーク！つぼみだったこの花、咲いてます！」

ゼルダは花壇に近付くと、その場にしゃがんだ。

「……こんな所につぼみなんてあったんだな。」

「ええ……この子、最近までずっとつぼみだったんです。他の子達は皆綺麗に咲いていくのに……でもこの子も、ようやく立派に咲くことが出来たんですね……。」

「……………」

シークも彼女の隣にしゃがみ、その花を慈しむように見つめた。

そこから少し離れたテラスで、マルスは何か起きた時の為に待機していた。

（何も起こらなければいいんだけど……。）

「よーマルス！」

不意に、バシンツ！と背中を叩かれた。

「痛っ！！……………何だ、ロイか。」

「何だって何だよ。何してんだ？こんな所で。」

「君には関係ない。ちょっとあっち行つててくれる？」

マルスはロイに向かって野良犬を払うようにシッシツと手を振った。

「なっ……！何なんだよ……!?」

ロイが腕を振り上げたその時、テラスの扉が開いた。  
二人がその方向を見ると、台所を片付け終わったリンクが入ってきた。

「あ、先輩！」

「ロイ……それにどうしたのマルス、怖い顔して。」

「え……いや、何でもないよ。」

アハハ、と笑って誤魔化していると、リンクが何かに気付いたようにある一点を見た。

「あ……………！」

その先には、二人並んで花壇の花を愛でるゼルダとシークの姿があった。

「……………。」

リンクの表情に徐々に陰がさし、顔を俯かせた。

「……………先輩？どうしたんですか？」

リンクの落ち込んだ原因が分からないロイとは反対にマルスには瞬時に分かった。

（そうだ……………リンクはゼルダの事が……………。）

「……………やっぱり……………」

「え？」

ようやく上げられたリンクの顔は、今にも泣き出しそうだった。

「やっぱりゼルダは、シークが好きなのかな？」

「……………え？」

「だってあの二人、あんなに仲良くして、き、距離も近くて……………」

「

「いやリンク、彼は今ゼルダのド」

「

マルスはあることに気付き言いかけた言葉を飲み込んだ。

（リンクはゼルダのことが……………もしドレスを切ったことが知られたら……………殺されるかも……!）

「ド……………何？」

「ド……ど……どう思ってるのかなあ？」

マルスが何とか誤魔化すと、リンクは盛大に溜め息をついた。

「……シークはカッコいいし、強いし、それに……ハープも弾けるし、縫い物だって得意だ。この間のゼルダの誕生日だって、綺麗なドレスをあげてた……その時ゼルダは凄く喜んでた……俺のボロボロのテイベアなんかより、ずっとマシなもの……。」

段々小さくなっていく声と共に、リンクも俯いていった。

「今だって、楽しそうにして」

「ねえリンク、君は何故ゼルダにテイベアを作ってあげたの？」

「……え？」

マルスの突然の質問に、リンクはキョトンとした。

「それは……ゼルダに欲しいものはあるかって聞いたら、そう答えたから……。でも、シークのなんかに比べると……。」

「でもそれを渡したとき、ゼルダは喜んでいたんだろ？」

「う……うん。」

「だったらそれでいいじゃないか。」

「……え。」

「君はゼルダに喜んでもらいたくて一生懸命テイベアを作った。それを受け取った凄く喜んだ。それだけで良かったんだよ。」

「……………」

「リンクだってカッコいいよ。まあ僕には少々負けるけどね。」

隣で『ぶふっ！』と吹き出したロイの頬をつねりながらマルスは言葉が続けた。

「君はハープは弾けないけどオカリナは吹ける。縫い物は得意じゃないけど、毎日美味しいおやつを作ってくれているじゃないか。」

「そうっすよ！イテテテ……それがシークには無い先輩の魅力なんですから！」

「俺の……魅力……？」

トン、とマルスの拳がリンクの胸を軽く叩いた。

「シークのことは多分違うと思うけど……ま、こういうのにライバル

はつきものだからさ……頑張れ！」

ニコリと微笑んだマルスに釣られ、ロイもニカツと笑った。

「……うん、ありがとう！」

すっかり元気を取り戻したリンクは明るい笑顔を見せた。

（ふゝ何とかなった……でももしゼルダのドレスの事がリンクにバレたら……真っ先に怒られるのはシークだね。まあ僕は気楽に考えよう）

その時、テラスの隣の窓からサムスが顔を出した。

「シーク！ちよつと来てくれなゝい？聞きたいことがあるのよ！」

「……ああ、分かった。」

シークは立ち上がると、サムスのいる窓へと向かっていった。  
と、その時、

『ゼルダお姉ちゃん！』庭に活発な声が響き、向こうからカービイとピット、ポポとナナの4人のちみっ子達がゼルダの元へ駆け寄ってきた。

「あら、どうしたんです？」

「ゼルダお姉ちゃん、一緒に遊ぼうよ！」

「ぽよ！遊ば遊ば！」

「いいですよ。」

ゼルダは立ち上がり、ちみっ子達の方を向いた。

「ゼルダお姉ちゃん、早く遊ぼう！」

その時、ポポとナナがゼルダのドレスをつかんで急かした。

（……マズイ！！あのまま引つ張ると……裂ける……！）

そう察したマルスはテラスの柵を飛び越え、物凄い勢いで走っていった。

「うらあああああつ……！」

マルスは急ブレーキをかけ、ゼルダとちみっ子の前に立ちはだかった。

「……マルスさん？」

「……マルス兄ちゃん、どうしたの？」

哑然とする一同に構わずにマルスは爽やか笑顔を浮かべた。

「君達、遊ぶなら僕と遊ばないか？」

「ええ〜！ゼルダお姉ちゃんは〜！？」

「マルスさん、遊び相手なら私がやつても……。」

「いえ、リンクがあなたとお茶をしたいと言っていたので、どうぞ  
ごゆっくり。」

マルスがリンクの方を向くと、彼は顔を真っ赤にしてマルスに目で  
何かを訴えていた（後ろでロイが『頑張ってください』と笑顔で  
言っていた。

「そうですか…ではお願いします。」

「じゃあマルス兄ちゃんでもいいや！早く遊ぼ〜よ〜！」

ちみつ子達に手を引く張られ、マルスはどこかへと連れていかれた。  
「……………」

その様子を見ていたシークは溜め息をひとつ吐くと、雲一つない空  
を見上げた。

（ミシン、早く来ないかな……。）

続く。

## 勇者の憂鬱（後書き）

また続きます。おそろく次で終わります。頑張ります。

悪いことをしたらとりあえず謝ろう

翌日（ミシンが来るまであと1日）。

「いいかい？明日の朝9時にミシンが家に届く。ゼルダのドレスは今日入浴の後に適当に言い訳をして預かる予定だ。」

「つまり、その時までドレス何も起こらなければいいんだね？」

「そう。でもゼルダは普段激しく動くわけじゃないし、大丈夫だとは思うが……。」

その時、

「おい」と二人の後ろから声が聞こえた。

振り向くと、ピットが片手に紙を持ってこちらに走ってきた。

「ピット、どうしたの？」

「『どうしたの？』じゃないよ！二人共準備もしないで何やってるの？」

「準備……？何の？」

「あゝやっぱり忘れてる！今日乱闘あるだろ！」

「あつ！！すっかり忘れてた……。」

「ったくも……はいこれ、今日の対戦表。早く準備するんだよ！」

ピットはそう言うて来た方向をまた戻っていった。

「あゝ今日だったのか……どうしたの？」

対戦表を見るなり黙りこくったシークにマルスは問いかけた。するとシークはそれをこちらに見せるように向けた。

「そつえば今日は誰が戦うのかな」

そこに書かれていた名前は ・リンク

・マルス

・ルイージ

そして……

「…………ゼルダ？」

「まさかよりによって今日とは…………。」

「…………どうする？しかもリンクまで一緒だよ。ルイーダどうでもいいけど。」

「とりあえず、ゼルダには僕で戦うように言っておくよ。」

「うん、そうだね…………と時間がない、急いで行こう。」

そう言っ走り出した二人の心にあつたのは『不安』の二文字だった。

今日の乱闘場・ハイラル城。

控え室では今日戦う4人の選手達が待機していた。

「あれ？今日はシークが戦うんだ。」

「そうだよ。これで君も本気で戦えるね。」

「え？」

「もしゼルダだったら、君は手加減どころか攻撃すらしてこないじゃないか。」

「それはだって…………ゼルダに怪我させたくないしさ…………。」

リンクは顔を少し赤らめながら小さく呟いた。

「うっ……緊張するね！マルス君、今日はお互い頑張ろう！」

「はい、そうですね。」

（厄介なことにならないように、まず最初にコイツを片付けよう…………。）

ルイーダに笑顔を返しつつも、心の中ではひどいことを考えているマルスだった。

その時、試合開始5分前の鐘が鳴った。

「あ、そろそろ行かなきゃ。」



4人は早速乱闘場へと向かった。

『3、2、1、GO!!』

試合開始の合図と共にマルスはまずルイージの元へ勢いよく走り、隠し持っていたボム兵を彼に投げつけた。

「アウチッ!!」

その爆発でいくらかダメージを受けたルイージを、マルスはバツのように構えた剣で勢いよく打った。

「おるああああっ!!」

「わあああああ……。」

吹っ飛ばされたルイージは遙か彼方に飛んでいき、やがて星になった。

「よし、邪魔者は消えた!」

マルスは清々しい笑顔でルイージの消えていった方向を見ていた。

一方、リンクとシークそして乱闘を見ていた観客達は、スマッシュブラザーズ始まって以来の開始3秒の瞬殺に呆然としていた。

「マ、マルス……すご……。」

(馬鹿王子も本気をだせば……といった所か。)

シークが苦笑いをしていたその時、

『シーク、聞こえますか?』

「ゼルダ? どうしたんだ?」

『あの……やはり私も試合に出たいんです。』

「……………え?」

予想外のことにシークはしばしポカンとしていた。

『貴方は争い事を嫌う私を気遣っていてくれるのでしょうか……? でも心配いりません。私ちゃんと戦えますから、見ていてください!』

「いやゼルダ、そういうことじゃなく」

シークが反論する間も無く、ゼルダはシークと代わって乱闘場に現

れた。

「ぜ、ゼルダ!？」

リンクは突然現れたゼルダに驚き、マルスは予想外の事に困惑していた。

（何でゼルダが……!？まさかシークの奴、しくじったな!）

「ゼルダ!ここは危険だからシークと代わるんだ!」

「いいえ、その必要はありません。」

「何故!？」

「……私はもう守られてばかりの弱い姫ではない、貴方のおかげで強くなりました……その事を何よりも、貴方に一番知ってもらいたいです。」

「……ゼルダ……。」

「さあ、何処からでもおいでなさい!」

「……!」

リンクは剣を構えたが、心の中ではどうするべきか迷っていた。

（どうしよう……とりあえず、すぐよけられるように軽く……。）

「……じゃあ行くよ、はあっ!」

リンクはゼルダに当たらないように剣を振り下ろした。彼の思惑通り、ゼルダはその一撃をすぐによけた。

その瞬間、マルスは気付いた。

彼の剣の先端が、あの縫い目の箇所を一直線に降下していくのを。

（あ~~~~~っ!）

普通の服はその程度では切れない。しかし、破れた箇所は手縫いであると共に、この2日間で糸がほつれている。

そこにとどめの一撃、リンクの剣によって糸が切れてしまった。

糸という繋がりを無くした布は左右に分かれ

「~~~~~！！（声にならない叫び）」

リンクの顔は茹で蛸のように真っ赤になり、頭から湯気を出した。

「！どうしたのです？リンク。」

突然様子が変わったリンクにゼルダは不思議そうに問いかけた。

「あ……あえ……あああ……！！」

慌てふためきながらも、リンクはもう一度ゼルダを見た。

先程剣をかすめた箇所は大きく切れ目が入り、ゼルダが歩くとそこから彼女の細い足がチラチラと見え、まるでチャイナドレスのようになっていた。

（やつちゃった……お、俺……！！）

自分がやったと思ったリンクは、突如ゼルダに背を向けた。そして、

「うわあああああああごめんなさあああああいつ！！」

リンクは泣きながら叫び、真っ直ぐに崖へと突っ走っていくと、そのままそこから自ら飛び降りた。

「……………」

しばらく呆然としていたゼルダはふとマルスの方を見た。すると彼は剣を鞘に収め、すたすたと崖の方へと歩いていった。

そしてゼルダの方を向くと、ニッコリと笑った。

「え〜と……ごめんなさい」

そう言つと彼もまた、そこから飛び降りた。

勝者      ゼルダ

その日の夜。

シークはテーブル裁縫道具を広げて作業をしていた。

「シーク、これもお願い出来ますか？」

そこに来たゼルダが渡した物は、今日破れたあのドレスだった。

「今日誤って破いてしまつて……戦いというのはやはり難しいですね。」

「慣れないことをするからだろう。そこに置いておけ。」

「はい……そういえば、今日の試合が終わってから、リンクとマルスが私から逃げているような気がして……私何かしたでしょうか？」

ゼルダが首を傾げると、シークは心の中で苦笑いをした。  
(マルス……君もいくらか責任を感じてるんだね……。)

終わり。

## 悪いことをしたらとりあえず謝ろう（後書き）

終わりました……念のために言っておきますが、作者は決してルイ  
ージの事は嫌いじゃありません。むしろ好きです。あの愛されるち  
よっとおバカな性格が好きです。

さて、次か

らは短編で進んでいきます。たまに続きものになるかもしれませんが  
頑張ります。では。

## 王子様のカレーの作り方

すま家のリビング。

マルスとアイクがくつろいでいると、ロイが入ってきて二人に言った。

「今日の夕飯、何にしようか？」

「夕飯？何でさ。」

「……忘れたのか、お前。」

「今日は皆が夕方遅くまで帰ってこないから、僕達が作るよう母さんに頼まれたじゃないか。」

「あゝそうだったね。」

「だからホラ起きて、台所に行くよ。」

「……仕方ない。」

アイクが立ち上がりロイは早速台所に向かおうとした。が、マルスが寝そべったままでいることに気付き足を止めた。

「……マルス、何をしている？」

「えゝだって、王子の僕が何で夕飯作りなんてしなきゃならないわけ？君達二人でせいぜい頑張りなよ。」

偉そうな口ぶりでそう言うと、マルスは二人に背を向けた。

アイクは変わらざる無表情で、ロイはムツとして反論しようとしたが、あることを思い付き、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「……そうだよねえゝ。じゃあアイク、二人で頑張ろうか……包丁も持ったこと無い王子様は放つといてさゝ。」

その言葉にマルスの体がピクリと反応したのにロイは気付いた。

「（かかった……!!）王子様は何もかも人任せだったからさゝ、料理なんて出来ないんだろ？だから僕達に押し付けて」

「失礼な……料理くらい簡単だよ……!!」

マルスは起き上がると怒った顔でロイと向かい合った。

「下々の者である君達に、僕の腕を見せてやるよ！」

「ほ？そいつは楽しみだ！」

「……………」

険悪な二人の間に見える火花を、アイクはただ黙って見ていた。

すま家、台所。

「あれ？母さんもう材料用意してるや。」

エプロンをつけた3人が台所の前に立つと、コンロに水の入った鍋がセットしてあり、まな板の上に人参・じゃがいも・玉ねぎ・レタス・きゅうり・ミニトマトが置いてあり、それらの近くにメモがあった。

「『カレーとサラダをお願いします。ご飯はといであるので炊飯器のスイッチを押すだけです。お肉は冷蔵庫です。3人で協力して頑張ってね ママ』……………」

「サラダは野菜洗っただけだからいいとして、問題はカレーか……………」

「…………炊飯器のスイッチ、いれてくる。」

アイクがその場を離れるとロイは先程の不敵な顔でマルスの方を向いた。

「さしてマルス君、君の実力見せてもらおうか？」

「あ……ああ！目を開いてしっかり見ておきなよ！」

気合い十分のマルスは早速包丁を構えた。が、

「…………まずは材料を洗え。」

「あ…………そ、そうだったねえ！」

戻ってきたアイクに指摘され、マルスは慌てて包丁を置いた。その横でロイがニヤニヤと笑っていた。

「なっ！何笑ってるんだよ！？ちょっと度忘れしただけだからね！」

「ほゝお？」

「……もおゝ！アイク、野菜洗うからその大根貸してー！」

『……………は？』

二人はマルスの言葉に耳を疑った。

「聞こえなかった！？『大根』貸してよ！！　　どうしたの？」

二回目の言葉を聞いた途端、二人は空いた口が塞がらなかった。

彼が『大根』と言って指差したのは、人参だったからだ。

「…マルス、わざと言っているわけではないのか？」

「え？何を？」

「……………。」

するとアイクは戸棚から小麦粉と砂糖を取り出すと、それをこちらに見せないように中身を少量皿に乗せ、マルスの前に差し出した。

「……何？」

「……どちらが砂糖分かるか？」

「え……………」

「おいアイク、いくら何でもそれは馬鹿にしすぎ」

チラリと横目でマルスを見たロイは、その言葉を飲み込んだ。

マルスが、頭を抱えて本気で考えていたからだ。

「…マ、マルス…………？」

「…ブロッコリーとカリフラワーの違いは？」

「え…えと…」

「苺は畑になる？木になる？」

「……………」

すっかり黙りこくってしまったマルスが段々哀れに思え、ロイには



いつしか同情心が芽生えてきた。

「マルス……無理しなくていいぞ、僕も言い過ぎたよ……本当は、料理なんてしたこと無いんだろ……？」

ロイが優しく言うと、マルスは涙目になった顔を上げロイ……を通りすぎてアイクに抱きついた。

「……意地張ってごめんなさいでした。」

マルスはアイクのエプロンに顔をつけたまま謝ると、アイクはよしよしと頭を撫でた。

「謝るときは人の顔見て謝れよ。てか今のは僕にも謝ったことになるのかな？」

「よし！調理を再開しよう！」

「立ち直り早っ……まあとにかくこれで作業が進むね。じゃあ僕冷蔵庫から肉を取ってく」

「待て、ロイ……」

アイクに呼び止められると、ロイはギクリと反応して振り返った。

「な、何……？」

「……その人参は持つていく必要はないだろう……置いていけ。」

「え……でも僕人参嫌いだから……」

「……カレーの具材にされたいのか……？」

「あひいっ……分かりましたあっ……」

包丁を構えたアイクの剣幕に圧倒され、ロイはすぐに人参を置いた。

「ふう……やっとここまで出来たな。」

グツグツと煮える鍋を見てロイは満足げに言った。

「サラダも出来たし、後は仕上げに」

「あ。」

突然、冷蔵庫の中を見ていたアイクが声を上げた。

「どうした？」

「……昨日でドレッシングを切らしていたのを忘れていた……。」

「ありや、どうしよう。」

「……買ってくる。後は頼んだ。」

アイクはエプロンを外すと、台所を後にした。

「いつてらっしゃい……っと、僕ちよつとトイレ行ってくるから、鍋頼んだよ。」

ロイはそう言うのと急々とトイレへ向かった。

「……………」

一人残されたマルスは鍋の中をしばらく見ていた。  
と、彼の頭にある疑問が浮かんだ。

「（この状態からカレーって……どうやって作るんだろう……？）」

カレー粉の存在を知らないマルスは首を傾げた。

「（ロイの奴まだ来ないし、アイクはしばらくかかるだろうし……  
そうだ！僕がやってしまおう！）」

マルスはさっそく様々な調味料や具材を手当たりしだい引っ張りだした。

「あつ！しまった……！」

その時うつかり手を滑らせ、煮干しを鍋の中に落としてしまった。  
慌てて菜箸で取ろうとしたが、全て取り終えた時にはすっかり煮干しのだしが鍋いっぱいに広がっていた。

「（何か煮干し臭くなっただけ……まあいいや。さて何をいれよう……カレーは茶色だから……）」

ふとマルスの目に、味噌と醤油が映った。

「これかな？」

マルスはまず味噌をつかむと、それを大さじ3杯鍋にいれ、次に醤油を小瓶半分入れた。

「（初めてだし、味見しながら試していこう……）」

小皿を取りだし、おたまで鍋の汁を少し乗せると、それに口をつけた。

「（…何か、味噌汁みたいな味がする…しかもしょっぱい…。）」「やはりカレーとは違う味にマルスは顔をしかめた。

「（うゝん、何を入れればカレーになるのかな…？）」

そう思ったマルスは、用意した調味料と具材を次々に鍋に入れていった。

塩、砂糖、めんつゆ、蜂蜜、林檎、唐辛子、からし、わさび、胡椒、酢、チョコレート、にんにく、きのこ、きな粉、ワイン、アミノ酸、プロテイン、歯磨き粉、ファイヤフラワー、ボム兵……………など。

様々な物が混ざりあつた鍋を、マルスは鼻唄交じりにおたまでかき混ぜた。

「…ただいま…。」

「ゴメンゴメン！」

買い物から帰ってきたアイクと同時にロイもようやくトイレから戻ってきた。

「おかえりアイク…ロイ、何してたんだい？腹でも壊した？」

「いや…トイレの鍵が壊れてさ、今の今までずっと閉じ込められてたんだよ。参ったね、アハハ。」

「全く…それより出来たよ、カレー。」

「え？あ、本当だ！」

二人が鍋を見ると、見事なカレーが出来上がっていた。

「ちよつと味見……おお！うめえ！」

「初めての割にはよく出来ているな……。」

「そうだろ！なんせ僕は王子にして天才美男子だからね。」

「最後の言葉が勘に障るけど、よくやったマルス！君は偉い！」

「はゝはつは！もつと僕を褒め称えるがいい！」

二人が盛り上がっていると、玄関から『ただいま』と声が聞こえた。

「あ、皆帰ってきた！おかえりなさい！」

マルスはバタバタと玄関へ走っていった。

「……………ん？」

ふとアイクが台所に目をやると、そこには未開封のカレールーがあった。

「……………！！！」

「どうしたアイク……………！？」

ロイもまたそのカレールーの存在に気付き、愕然とした。

「え……………これって……………でもカレー出来て……………ええっ！？」

「……………あいつ……………一体どうやって作ったんだ……………？」

その日のカレーは皆に大好評で、すぐに空っぽになりましたとさ。

終わり。

## 王子様のカレーの作り方（後書き）

さて突然ですが、今回から書いてほしいストーリーのリクエストを  
始めたいと思います。                      これは私のネタ切れ防止に

もなりますし、読者の皆さまの期待に答えられることが出来ます。

リクエストは評価・感想で感想と共に書いていただければ嬉しいです。  
（これは評価・感想を強制するものではありません）採用するかどうかは返信にてお答えします。

では。

## アイドルは皆の憧れ

すま家のリビング。

今日は珍しくちみつこ達が外で遊ばずに皆でテレビを見ていた。ロイも一緒になって見ているその後ろで、アイクは床に寝転んでいた。「あれ？皆珍しいね、外で遊んでないなんて。」

リビングに入ってきたマルスは普段あまり見ない光景に目を丸くした。

「あつ！マルス兄ちゃん。」

「今ね！皆でプリンちゃん見てたの。」

「プリンちゃん？」

マルスがテレビを見てみると、ピンクの丸い女の子が、輝くステージでマイクを持って歌いながら踊っていた。

「へえ！…アイドルなんだ。」

「そう！！可愛いだろ！！？」

「！？」

突然激しく反応したロイにマルスは驚いた。

「プリンちゃんね！このすま村のアイドルでもあり世界的超人気スターなんだよ！可愛いし歌も上手いし最高だよ！」

「は、はあ……。 (ロイって、こういう奴だったんだ……。 ) 」

熱く語るロイにマルスは引きつった笑みを浮かべながら少し引いた。

「はあ！プリンちゃん！一度でいいから本物に会ってみよう！！」

「ポポも！！」

「ナナも！！」

「ペポ！僕も！！」

熱くなるロイにポポとナナ、カービィも便乗した。

「ちよつと、うるさくてテレビ聞こえないじゃん静かにしてよ！！」

ピットが注意するものの、騒がしい4人が大人しく静かになるはずもなかった。

「……………はあ。」

マルスは呆れたように溜め息をつき、床に座った。

隣にいるアイクをチラリと見ると、この喧騒にも関わらず気持ちよさそうに眠っていた。

「ただいま。」

その時、買い物から帰ったサムスとリンクがリビングに顔を出した。

「あつ！ママとリンクだ〜！」

「おかえりなさい！」

「リンク！おやつ早く早く〜！」

カービィが急かすように言うと、リンクは『ハイハイ』と言って台所に向かった。

「あんた達、少し片付けなさい。今日はお客様が来てるんだから。」

「お客様？」

またガノンドロフかな？と思ったマルスは渋々立ち上がると、ちみっこ達に少し片付けるように促した。

リビングが大分片付くと、サムスの『入っていいわよ。』という声が聞こえた。

「ねえ、お客様って」

誰？と言おうとしたロイの言葉は、サムスの後ろから現れた人物の登場によって飲み込まれた。

それは先程テレビで歌っていた、世界的超人氣スター・プリンそのものだった。

「は、初めまして…プリンでしゅ。」

ペコリと丁寧にお辞儀をしたプリンに、マルスは思わず礼を返した。



一方ロイはというと、驚きが大きすぎたせいか放心状態で固まっていた。

アイクはというと、テーブルの影でまだ眠っていた。

「さっき家の前にいてね、どうしたの？って聞いたら、インターホーンに手が届かないっていうから。どうやら家に用事があるみたいだし、そのまま上がってもらったわ。」

「プリンちゃんだプリンちゃんだ〜！」

「わ〜いわ〜い！」

ポポとナナ、カービイがプリンの元に駆け寄り、握手をねだった。

「プリンちゃんさつきテレビで見てたの〜！」

「歌すつごく上手かったよ〜！」

「プリ！ありがとでしゅ！」

「ポヨ！プリンちゃん、今度僕に歌教えて〜！」

「いいでしゅよ、プリンでよければ。」

ちみつこ達がプリンと戯れる中、ロイはまだ呆然としていた。

「…おい！一度でいいから会ってみたいんじゃないかったのか？本物が目の前にいるぞ！」

ピットが背中をバシバシと叩くと、ロイは『ハッ！』と声を上げ覚醒した。

そして今の状況を確認すると、ボツ！！と顔を燃え上がらせた。

「あ、ああああ！？」

「こんにちはでしゅ。」

プリンがペコリと頭を下げるとロイも勢いよく礼をし、ガンツとデールブルに額をぶつけた。

顔を起こし、深呼吸を数回するところから色紙とペンを取りだし、プリンに差し出しながら叫ぶように言った。

「は、初めまして！！僕、ロイっていいいます！！プ、プリンちゃんの大ファンです！！サインください！！！」

『……………』

プリンだけでなく、その場にいた全員がしばらく呆然としていたが、

プリンの言葉で沈黙は破られた。

「ハイでしゅ。」

プリンは色紙にサラサラと書き込むと、それをペンと一緒にロイに差し出した。

色紙にはプリンのサインと『ロイさんへ』という文字が書いてあった。

「……いやったああゝ!!」

ロイは嬉しさのあまりピョンピョンと部屋を跳ね回った。

「お茶が入りましたよ……って、ロイ何やってるの?」

台所からお茶を盆に乗せて持ってきたリンクは、ロイのはしゃぎぶりに驚いた。

「はっ!先輩…それ貸して!!」

ロイは突然リンクから盆を取り上げるとプリンの元まで歩いていき、プリンの前にお茶を置いた。

「粗茶ですが、どうぞ……」

「プリ、ありがとうでしゅ。」

「(……こいつ、いつもとキャラが違う……!!)」

マルスは普段と違って暴走するロイに呆気にとられていた。

「全くロイったら……ごめんねプリンちゃん、騒がしくて。」

「プリ、面白い人でしゅ。」

「そういえばプリンちゃん、家に用って何?」

サムスが尋ねるとプリンは『そうでしゅ!』と思い出したように言った。

「プリン、運命の王子様を探しにきたんでしゅ!」

「……運命の?」

「王子様……?」

皆が頭の上に?マークをつけていたその時、『ただいまゝ!』と元気な声が聞こえた。

「あら、パパが帰ってきたみたい。」

ドスドスと足音が響き、入り口からファルコンが現れた。

「パパおかえり〜!」

「ただいま子供達〜!おや、可愛いお客さんが来てるじゃないか。」

「プリ、おじゃまちてましゅ。」

ファルコンはリビングに来るとサムスの隣に座った。

その時、マルスの後ろの物体が僅かに動いた。

驚いたマルスが振り返ると、寝ていたアイクがうつすらと目を開けていた。

「ん?後ろに誰がいるのか?」

「アイク兄ちゃんが寝てるよ〜。」

「まあ、お客様が来てるってのに……マルス、起こしてちょうだい。」

「サムスに言われ、マルスはアイクの体を揺さぶった。」

「アイク、母さんが起きろだって。お客さんが来てるのにだらしないよ〜。」

「……………分かった…。」

アイクは小さく唸ると、のっそりと体を起こしボリボリと頭を掻き、まだ眠たげな顔でプリンの方を向いた。

「……………!!」

その途端、プリンの顔色が変わった。

「……………プリンちゃん?」

ロイが声をかけても反応せず、プリンの目はある一点を見つめていた。

「……………見ちゆけた。」

「へ?」

「プリンの運命の王子様でしゅ〜〜〜〜〜!!」

突然プリンは勢いよくジャンプし、テーブルを越え突進していった。そしてアイクに抱きつき、その反動でアイクは後ろに倒れた。

「……………!?!」

突然のことにアイクは驚き、目を丸くした。

「……………アイクが……………」

「運命の……………王子様?」

『ええ〜〜〜〜〜っ!?!』

一同は驚いて一斉に声を上げた。ロイにいたっては、憧れのプリンがアイクに抱きついたことに嫉妬を感じていた。

「プリンちゃん!どっちゃかっていうと王子は僕だからそいつは団長だよ!」

「言うべきはそこなの!?!」

「じゃあ運命の団長様でしゅ!」

「言い直した!」

真剣な顔でどうでもいいことを言うマルスと彼の言うことを素直に受け止めたプリンに、リンクは連続で突っ込んだ。

「アイク貴様〜〜プリンちゃんから放れる〜〜〜!!」

ロイは頭を噴火させながらアイクに対して激しく激怒していた。

「…放して欲しいのは、むしろ俺なんだが……………」

アイクは静かに言ったが、それはロイには届いていなかった。

「あゝも〜うるさ〜い!」

「わーいケンカだー！」

「ちよつとロイ、落ち着きなさい！」

「はっはっはっ！若いと元気があつていいなあ！」

すま家のリビングはすっかり修羅場と化し、喧騒が溢れかえつていた。

洗濯物を取り込み、畳み終わった残りの4人は、リビングの様子を遠くから見ていた。

「ねえネス、皆は何してるんだろ？」

リユカが尋ねると、ネスは苦笑しながら答えた。

「……………とりあえず、今は近付かないようにしておこう。」

「皆さん、相変わらず賑やかですね。」

「…ゼルダ、賑やかとうるさいは随分違うよ？」

穏やかにボケるゼルダに、シークは冷静に突っ込んだ。

次に続く。

## アイドルは皆の憧れ（後書き）

国後さんのご期待に答え、プリンを出しました。      ロイのキャラ崩壊が書いてて何気楽しかったです。こんな違う！という方、ごめんなさいでした（泣）      話が進むにつれていろいろなキャラが登場します。ご期待ください。

## 恋する女の子って何かと積極的

「プリ！ケーキとってもおいしいでしゅ！」

リンクの焼いたシフォンケーキをプリンは笑顔で頬張っていた。

「そう？良かった。」

嬉しそうに笑ったリンクの横でシークはお茶を飲みながらプリンをチラリと見た。

彼女の空いた左腕は、隣のアイクの右腕にしっかりと回されている。  
「……で、プリンちゃん。何でアイクが君の運命の人なのか、教えてくれないかな？」

隣で火の玉を飛ばせて落ち込むロイを尻目にマルスが尋ねた。

「よくぞ聞いてくれました！」

するとプリンはアイクの腕をギュッと抱き締めると、うつとりした表情で語り始めた。

「そう、あれは5日前のことでした……………」

すま村の、とある道ばた。

「ふええ〜ん…痛いでしゅ……………」

そこで転んで足を怪我したプリンがぐずぐずと泣いていた。  
しかしこの時間帯は人は通らず、プリンは一人ひたすら泣き続けていた。

とその時、突然日の光が遮られ、プリンの体が影で覆われた。

「！」

驚いて振り返ると、そこには体の大きい青い髪の青年が買い物袋を片手にプリンを見下ろしていた。

「プ…プリン…？」

自分よりも遥かに大きい青年にプリンは少したじろいだ。

「……………」

青年は何も言わずにしゃがむと、ふとプリンの足を見た。

「……怪我を、したのか。」

「プリ……ちよつと転んじやつたんでしゅ…。」

ズズキと痛む傷口を見ると、プリンはまた泣きそうになった。すると青年は自分の買い物袋をあさり、ある物を取り出した。

「プリ……？」

プリンが確認すると、それは絆創膏の箱だった。

青年は箱を開け、中から絆創膏を一枚取り出した。それは花柄のついた可愛らしいものだった。

「……………」

青年は無言でプリンの傷口に絆創膏を貼ると、彼女の頭を優しく撫でた。

「プ、プリ……？」

プリンがきょんとしていると、青年はフツと穏やかな笑みを浮かべた。

「……気を付けて帰れよ……………」

「……………！！」

その瞬間プリンの小さなハートは激しく鼓動し始め、カアツと一気に顔が赤くなった。

「（カ……カ……カツコいいでしゅ……………っ！！）」

プリンがぼくっとしていると、青年は立ち上がりスタスタと歩いて



去ってしまった。

「あつ！……まだお礼も言っていないのに……でも、また会えるかな……？プリンの、運命の王子様……。」

プリンは絆創膏を見ると先程の青年の笑顔が頭に浮かび、嬉しさのあまり『キャ』と叫んだ。

「と、いう訳なんでしゅ。」

プリンが話し終えた時には、その場の全員が驚愕の表情でアイクを見ていた。本人はというと、相変わらずの無表情である。

「あら、ではあの時私が頼んだ絆創膏の箱が開いていたのは、そういうことだったのですね……。」

「……すまない。」

アイクが謝るとゼルダは特に怒りもせず、むしろニツコリと笑みを湛えた。

「いいえ。それより困っている人を助けるだなんて、アイクさんは素晴らしい方です。」

この時、ゼルダの隣にいたリンクはムツとした顔になったとか。

「しかしアイクもすみに置けないね。僕らの知らないうちにそんなことしてたなんて。」

マルスは肘でこつきながらからかうように言ったが、アイクは特に微動だにもせず、黙って茶をすすっている。そんな彼を隣のプリンは目をハートに見つめていた。

「それにしてもプリンちゃん、よくアイクがこの家にいるってことが分かったわね。」

「ハイでしゅ！村の皆に聞き込みしたら、この家にいるって聞いたんでしゅよ！……ハア、アイク様……名前も素敵でしゅ……。」

プリンはしばらくの間アイクを見つめていたが、突然『決めまちた！』と声を張り上げるとアイクの元から離れると、真剣な表情でそ

の場に正座すると、床に手をつきこちらに頭を下げた。

「アイク様……………！」

「……………？」

「どうかプリンを、アイク様のお嫁しやんにしてください！」

『ええ……………っ！？』

「いやああああ……………っ！！」

あまりの事態に一同はそろって声を上げ、ロイにいたっては衝撃の一言に悲鳴を上げ、その場に倒れた。

「……………。」

これにはさすがのアイクもポカンと口を開けて驚いていた。

プリンは立ち上がると、今度は向かい側のファルコンとサムスの所へと移動した。

「…お義父様、お義母様！」

「お、お義母様！？」

「ハッハッハッ！お義父様だなんて、どうしたんだい？」

「不束者でしゅが、よろしくお願いしましゅ。」

そう言うところ、プリンは深々と頭を下げた。

「わ…！アイク兄ちゃん結婚するの…！？」

「！？」

「わ…いおめでとおめでと…！」

ちみっこ達は無邪気に喜びプリンは恥ずかしそうに照れ笑いをする。一方、アイクは隣のマルスに助けを求めている。

「……頼む……何とかしてくれ……!!」

「えゝ、いいじゃないか別に。女の子に興味の無い君に好意を寄せ  
ている子がいるんだ。いつそのこと本当に結婚したら」

「頼む!!何とかわしてくれ……!!」

「……あゝもゝ、分かったよ。」

アイクの気迫に圧倒され、マルスは渋々頷いた。

「ただし、明日のおやつの苺大福を2個僕に譲るということはどう  
？」

「……分かった、頼んだぞ……!」

マルスはぐつと親指を立ててみせると、『プリンちゃん!』と大  
声を上げてプリンを呼んだ。

「?……何でしゅか?お義兄様。」

「お義兄……!!?まあいいや。プリンちゃん、ちょっと話が……。」

プリンを向かいに座らせ、マルスは真剣な表情になった。

「(マルス……しくじるなよ……!!)」

「(OK!苺大福の為に頑張るよ!)」

「(……出来れば俺の為に頑張ってくれないか……。)」

アイコンタクトをした後、マルスは正面を向いて話し始めた。

「実はねプリンちゃん……残念だが、君はアイクと結婚は出来な  
いんだ。」

「プリ!?何ででしゅか?」

「何故か、それはね……君はアイクの好みの女性ではないか  
らだよ!」

『……へ?』

プリンを除く全員、落ち込んでいたロイもが『アイクに好みなんて  
あったの?』と驚いた顔でマルスを見ていた。アイクはというと、  
予想外の発言に呆然としていた。

プリンはショックを受けながらも何とか気を取り直し立ち上がって  
マルスに詰め寄った。

「あの……アイク様のその好みのタイプって、どんな女性なんですか！？」

「フフ……知りたい？」

コクリとプリンが頷くとマルスの目が怪しく光り、それを見たアイクは嫌な予感がした。

「アイクの好みはねえ……」

身長が170cmのロングヘアーで肌の白いバストがEカップの美人な女性だよ！」

「……プ、プリン……………!!」

あまりのショックのあまりプリンはヘナヘナと座り込んだ。

「……身長170cmの。」

「……ロングヘアーの。」

「……白い肌の。」

「……Eカップの美人……」

特に最後の言葉を強調し、一同は軽蔑の眼差しでアイクを見ると、本人は首を振って必死に否定した。

「……う、う……プリン身長170cmなんてない……バストだって……う、う……」

「……プリンちゃん……」

泣き崩れるプリンに、ロイは心配そうに声をかけ自分のハンカチを渡した。

「プリンちゃん泣かないで！身長が高くなかったって、バストがなかったって……プリンちゃんはそのままだが一番可愛いんだから……！」

「……ロイしゃん。」

「……僕は、そう思ってるよ……」

ロイが顔を赤らめながら言うと、プリンはそのハンカチを受け取り

笑顔を浮かべた。

「……………ありがとう！プリン元気が出たでしゅ！」

「はうつー！……………どういたしまして……。 (あああゝっー！プリンちゃんか……………僕に笑ってくれたゝゝゝっー！) 」

「……………よし！プリン決めたでしゅ！」

するとプリンはアイクの方を向き、目を輝かせて言った。

「アイク様！プリン、アイク様の好みのタイプになるために今日から美しくなる特訓をしましゅー！」

「……………いや……………あいな……………」

「お義母様にお義父様！またアイク様に会いに来てもいいでしゅか！？」

「ええ、構わないわよ。」

「いつでも遊びに来なさい！皆大歓迎だよ！」

「ありがとうございましゅー！……………じゃあプリンお仕事あるからそろそろ行きましゅ。」

「プリンちゃん、また来てねー！」

「プリ！……………それじゃアイク様、皆しゃん、さよならでしゅー」

プリんが手を振って立ち去ると、ロイは千切れんばかりに手を振り返した。

「……………ふうー……………」

静かになったリビングに、アイクの溜め息が響く。

「何溜め息ついてるの？上手くいっただろー僕のおかげで……………」

「……………お前、とんでもない嘘を言って……………皆に誤解されただろ……………何だ？美人のEカップって……………」

「何かつい出任せで……………でもアイクってそういうの好きじゃないの？……………」

「好きではない……………！！いいか！？俺の好みは……………！！……………！！……………！！……………！！……………！！……………」

アイクはそこまで言いかけたが、自分に集中する皆の視線と今何を

言おうとしていたかに気付き、口を閉ざした。

「……え、何？何でやめたの？」

「……言う必要などないだろう。」

「えゝ自分が今言おうとしたじゃないかゝ！教えてよ気になるなゝゝ！！」

「はあゝプリンちゃん可愛かったなゝ！」

「お前はちよつと黙ってる！！」

ギヤーギヤーと騒ぐ声をBGMにネスはぬるくなった茶を一口飲むと、ボソリと呟いた。

「今日も平和だなあ……。」

終わり。

## 恋する女の子って何かと積極的（後書き）

やっと仕上がりました。 プリンを出したのは評価をしてくださった国後さんのリクエストなんですよ。 今後も登場させるつもりです。 かなり暴走した感じになりましたが。 評価だけでもメッセージでもOKです。 皆様のリクエストお待ちしております。

## 台所の黒いアレ

「くっ……何て手ごわい奴だ……!!」

「黒く禍々しい姿……恐ろしくてとても近寄れません……。」

「……まだだ……僕達はまだ、負けるわけにはいかないんだ!!」

「そうだ……ロイの言う通りだよ!」

ゼルダを除く3人はそれぞれの武器を構え直し、目の前にいる黒い魔物に再度立ち向かっていった。

事の起こりは、今から約30分前に遡る。

すま家の台所。

「さて、やるか。」

リンクはエプロンを着ると冷蔵庫へと歩いた。

早速材料を取りだそうと扉に手をかけたその時、

カサカサカサ……。

「ん………?」

微かな物音に反応し、下に目を落とすと………

「……!!ぎいやあああ~~~~~っ!!」

リンクの悲鳴が家中に響き渡り、それを聞いた数名が台所へと走っ



てきた。

「リンク、どうしました!？」

「どうしたのリンクさん!」

「先輩、冷蔵庫の角に足の小指ぶつけたんですか!？」

3人の目に飛び込んだのは、台所の出入り口の扉の影に隠れているリンクの姿だった。

「あ…ゼルダにピット、ロイも……。」

「先輩……?何かあったんスか?」

するとリンクは震える手で台所の床を指差した。

そこにいたのは、脂ぎった小さな体の黒い魔物

ゴキブリ。

「キャアッ!」

初めて見るゴキブリに驚いたゼルダは思わず隣にいたリンクに抱きつき、青白かったリンクの顔は真っ赤に変わった。

「うわっ!何だよあの黒いやつ、気持ち悪〜!」

「あれ?ピットはゴキブリ知らないのか?」

「てゆうか、ここに来るまで僕ずっと天界にいたからさ、虫すらも見たことないよ。」

「…あのような虫、ハイラルにはいませんでした……。」

「とにかくあいつを倒さないと俺は台所に入れないから、今日のおやつが作れない……。」

リンクの言葉にロイとピットは「え〜!」と声を上げた。

「ちなみに今日は何スか?」

「チーズケーキだよ。」

「チーズケーキ…マルスの大好物だな……ってか、いつもはゼリーとかホットケーキとか簡易な物なのに何で今日に限ってそんな大作

なんスか!？」

「ちよつと頑張つてみようと思つて……仕方ない、おやつを楽しみにしている皆のためにもやらなきゃ!」

リンクは立ち上がると棚をあさり、殺虫剤を3本取り出した。

「リンクさん……!」

「安心してピット、必ず倒してみせるから……。」

「リンク……気を付けて。」

心配そうなゼルダにリンクは頷いてみせると、台所を勢いよく走り出した。

「くらええっ!」

床上のゴキブリに狙いを定め、殺虫剤を噴射する。しかし、そこにゴキブリの姿はなかった。

「!……どこにいった!？」

「先輩!!後ろ!」

ロイに言われ振り返ると、ゴキブリがこちらに向かって真っ直ぐに飛んできていた。

「しまっ……!!」

「リンクさん!!」

ピットは咄嗟に殺虫剤をつかみ走り出すと、そのゴキブリめがけて噴射した。

ゴキブリは多少よろめいたものの、まだしぶとく羽を動かし空中を飛んでいた。

「くっそお……しぶといな……。」

「よおし!止めは僕が!」

ロイは殺虫剤をガシリとつかむと勢いよく駆け出し、そのゴキブリに殺虫剤を大量に噴射した。それにより台所は白い煙がもうもうと立ち込めた。

「ゲホッ……!ちよつとロイ、やりすぎだよ!」

「そうだよ……ゴホッ!何やってるんだよ馬鹿!」

「年上に馬鹿って言うな……ゲホガホゴホッ!!」

「まあ、大変！」

ゼルダは慌てて窓を開け、部屋を換気した。煙は晴れ視界が段々とハッキリしてくると、そこから現れたのはロイに向かって勢いよく飛んでくる先程のゴキブリだった。

「わっ！危ね……………！！！」

慌てて避けるとゴキブリは壁と衝突し、そのまま床に落ちる……………はずだった。

すぽ。

「あ……………っ！！！」

突然ロイが悲鳴を上げ、暴れたした。

「ど、どうしたの！？！」

「入った！！ゴキブリが服ん中に入った……………っ！！！」

服の中でゴソゴソと蠢く感覚にロイは鳥肌が立ち身悶える。

「取って！！誰か取って……………！！マジやだ気持ち悪いよ……………服ん中で動いてるよ……………誰か取ってよ……………！！うわああああ……………ん！！！」

ついにロイは耐えきれずに泣き出し、リンク達はどうすればいいの

かオロオロしていると、『どうしたの！？』と聞き慣れた声が聞こえドタドタと足音が響いた。

「……この声は……！」

見ると、買い物袋を抱えたサムスが血相を変えて台所に現れた。

「お母様！」

「ママ！」

「うわあぁ~~~~ん母さ~~~~ん！！！」

ロイはサムスを見るなり泣きながら飛び付いた。

「どうしたのよあんた達、喧嘩でもしたの？」

「母さん……実はゴキブリが出て皆で退治してたんだけど……そのゴキブリがロイの服の中に入っちゃって……。」

「……………」

するとサムスはロイの服に襟元から手をつ込み、中を掻き回すとゴキブリをつかんで引き出した。

それを床に投げ捨てると、何とサムスはそれをスリッパで踏み潰した。

「……！！！」

ブチ、と小さな音がした後サムスが足を上げると、そこには屍と化したゴキブリが見事に潰れていた。

「……………」

それをゴミ箱へと捨てる光景をリンク達はただ呆然と見ていた。

「ただいまー！」

その時、沈黙を破るかのように明るい声が台所に響いた。

乱闘を終えたマルスとカービーが開いた扉からヒョコリと顔を出した。

「ポヨ！ママも帰ってたんだ、おかえり〜！」

「ただいま。」

「あれ？リンク、おやつはもう作ったの？」

「え！？……ああ、ゴメン……まだこれから……。」

「ええ〜！今日は乱闘で疲れたから早く食べたいのに〜！」

「そう言わないで、今日はチーズケーキだから。」

「本当！？じゃあもう少し待とうかな……でもなるべく早く作ってよね！」

相変わらずの偉そうな物言いを残していき、二人はそこから立ち去った。

「じゃあお母さん洗濯物取り込んでくるわね。」

サムスは買い物袋をテーブルに置いて去っていった。

「（…何か疲れた…部屋帰ろ……。）」

「（おやつが出来るまで一眠り……。）」

二人が部屋に戻ろうとしたその時、ガシリと肩をつかまれた。

驚いて振り返ると、ニコニコと笑みを湛えたリンクが右手でロイの肩を、左手でピットの肩をつかんでいた。

「せ……先輩……？」

「リンクさん……？」

するとリンクはおもむろに時計を指差した。時刻は3時をとくに過ぎてゐる。

リンクはニツコリと笑顔で一言。

「逃げないでおやつ作るの手伝って」

その後、ゼルダを入れたその4人は、20分後何とか立派なチーズケーキを作ったそう。

終わり。

## 台所の黒いアレ（後書き）

マルスの好物は本当は何なのか分からないので、とりあえずチーズケーキにしておきました。      ストーリーのリクエスト、  
どんどんお願いします！      書ける限り頑張りますので。

## 旅って一度してみたいと思う

夕方のすま村。

辺りには買い物帰りの主婦や帰宅途中の人々がせわしなく歩いている。

その中に混じり、煮干しの入った買い物袋を下げたシークとカービイが家へと向かって歩いていた。

「ポヨ！これで味噌汁作れるね！」

「ああ…それにしても煮干しを買い忘れるなんて、母さんやっぱり疲れてるのかな。」

「疲れると忘れ物するの？」

「まあ何と言うか、いろいろ忙しいとすっかり忘れてしまうことがけっこうあったりするんだよ。」

「ペポ……じゃあ僕、今日からママのお手伝いいっぱいする！」

「うん、いい心掛けだ。」

話しているうちに二人は家の前に着いていた。

シークがポストの中を見ていたその時、『ポヨ！』とカービイが声を上げた。

「どうした？」

「見て、誰か倒れてる！」

カービイが指差すと、家の扉の数m手前に男がうつ伏せに倒れていた。男はボロボロのマントの下からコウモリのような羽根を生やしている。

カービイは男の所へ駆け寄るとその体を揺さぶった。

「ペポ！大丈夫！？」

すると男は微かな声でカービイに言った。

「うう…すまないが、何か…食べ物恵んでくれないか……もう、7日も何も口にしていない……。」



「ポヨッ！シーク来て、大変だよッ！」

シークは特に動じもせずツカツカと歩いてきた。

「この人ね、すっごくお腹空いてるんだって！お家にいれてあげようよッ！」

「ふうん…まあ、このまま放っておくと近所で変な噂がたつしね、ひとまずそうしよう。」

「ペポ！じゃあ僕運ぶ！」

そう言うとかービィは男を頭上に担ぎ、歩き出した。男の顔を見ると彼は仮面をつけていて、目以外の顔立ちが分からなかった。

「大丈夫ですか？」

シークが声を掛けると、男はコクリと小さく頷いた。

「私は旅をしていて…迂濶にも…道中で食料が全て尽きてしまったのだ……。」

「行き倒れか…それで家に助けを求めに？」

「ああ……道に迷ってしまい、偶然……そうだ、私の名はメタ

」

ガッツ！

「ポヨッ！」

その時、段差につまずいたかービィは前へと倒れ、その拍子に男は前方の扉に勢いよく頭を打った。

ゴン！と鈍い音がすると、男はかろうじて残っていた意識を失った。

「ポヨッ！！大丈夫ッ！？」

「……かービィ、とどめをさしてどうするの。」

「……………うう。」

男が目を開けて始めに見たのは、視界いっぱい広がるピンク色と心配そうに自分を見下ろす、顔。

「あっ！気が付いた〜！」

「ここは……………？」

「ペポ、僕ん家だよ。」

男は起き上がると辺りを見回し、ここは和室で自分が布団に寝かされていたことに気付いた。

「かたじけない…運んでくださったのか…………。」

その時『入りますよ〜』と声が聞こえ、襖が開くと土鍋を乗せた盆を持ったサムスと、男の物であるマントを持ったシークが部屋に入ってきた。

「あっ！ママ〜シーク〜、この人目え覚ましたよ。」

「ちょうど良かった、今ご飯が出来たところよ。」

二人は床に座り、サムスは男の布団の横に盆を置いた。

「よかつたらどうぞ。鍋焼きうどんなので消化にいいですよ。」

土鍋から漏れる旨そうな匂いに、男の腹はグウと盛大に鳴った。

「かたじけない…………。」

男は盆を手前に置くと鍋の蓋を取り、早速うどんを食べ始めた。

「……………うむ、旨い！」

男が満足げに言うのとサムスはニツコリと笑った。

「……………そう言えば旅人さん、貴方の名前は？」

「おお、失礼。助けていただいたのに名も名乗らず…………。」

「（と言うか、カービィが転んだせいで『メタ』までしか分からないからね…………。）」

「申し遅れた、私の名はメタナイトと申す。」

男、メタナイトは深々と頭を下げた。

「ポヨ！カービィだよ。」

「サムスです。で、この子がシーク。」

「よろしく……ところでメタナイトさん、このマントかなりひどかったんで、勝手に直しておきました。」

シークが差し出したマントを広げると、ボロボロだった箇所は綺麗に修復され、汚れも落ちている。

「おお……！何から何まで本当に申し訳ない……。」

メタナイトは土鍋をつかみぐいつと煽り残った汁を飲み干した。

「……ふう。サムス殿、馳走になった。」

「はい、お粗末様でした。後はごゆっくり休んでください……あなた達、退屈させないように何かお話でもしなさい。」

「ペポ……イ！」

サムスは空になった土鍋を盆に乗せて立ち上がり、部屋を後にした。その直後、サムスと入れ違いにロイが襖から顔を出した。

「あつ！シークこんな所にいた。」

「ロイ、何か用かい？」

「いやぁ実は、庭で剣で素振りやってたらうつかり干してあったマルスの服を切っちゃって……それでさ、マルスにバレル前に直してくれない？」

「……仕方がないなあ。メタナイトさん、ごゆつくり。」

そう言つとシークは立ち上がり、部屋から出ていった。

「ねえねえメタナイトさん、メタナイトさんって旅してるんだよね？」

「ん？ああ、そうだが……。」

メタナイトが答えるとカービィはキラキラと目を輝かせた。

「ポヨ……すごい！ねえ、何で旅してるの？」

「何故、か……特に理由など無い。」

「無いの？どうして？」

「……私はただ、旅をして宛てもなくさすらい、いろいろなものを見たり聞いたりしたいだけだ。」

「ふう……ん……そうだ！旅のお話聞かせて！」

「ああ……構わないぞ。」

それからメタナイトはいろいろな出来事をカービィに聞かせた。  
自分の身の丈より何十倍も大きな魚を釣ったことや、山奥に住む少数の民族と仲良くなったこと、ある村の住人達を苦しめている怪物を倒したこと。

いずれもカービィは興奮しながら話を聞いていた。

そんな彼に対しメタナイトは親近感のようなものを感じた。

「メタナイトさん」

「『メタナイト』でいいぞ、カービィ。」

「ポヨ……じゃあメタナイトって、いろんな所を旅できていいなあ。」

「カービィは旅が好きなのか？」

「うん！いつかしてみたいなあ。」

楽しそうに語るカービィにメタナイトはボソリ、と言った。

「……よかつたら、私と来ないか？」

「ペポ！本当！？」

「ああ、ここまで気が合うはお前が初めてだ。どうだ？」

メタナイトの言葉にカービィは顔を輝かせた。が、すぐに表情が曇り頭を横に振った。

「ごめんね……やっぱりダメペポ……。」

「何故だ？急に怖くなったのか？」

「ううん、そうじゃなくて……皆と離れるのが、嫌だから。」

エヘヘ、とカービィは申し訳無さそうに笑った。

「メタナイトと旅するの、すごく楽しいと思う……でも、パパやマ

マ、それに皆や友達と離れちゃうのが……すごく寂しいから。」

「……………」

メタナイトはしばらく黙っていたが、ボソリと呟くように言った。

「……この村に、ルカリオという知り合いがいる。私はしばらくそこに厄介になるつもりだ。」

「ポヨ……？」

「よかったら、そこに遊びに来るといい。」

「……………」

パアツと、暗かったカービィの表情が徐々に輝きを取り戻していった。

「ペポ！じゃあメタナイトも家に遊びにきてね！」

「ああ、是非そうさせてもらう。」

「あつ、でも今日は泊まってね！せつかくだから。」

「……そうさせてもらう。」

フツとメタナイトが笑うとカービィもエヘへと嬉しそうに笑った。

こうして、すま村に新しい住人が増えました。

おまけ。

「シーク急いで！マルスに見つかったらアウトだよ！」

「どうせアウトになるのは君だけだから、僕は急ぐことなんて無いよ。」

「冷たいこと言うなよ、お願い！じゃないと僕マルスに殺されるから……ってアレ？」

ロイが庭を見ると、物干し竿に掛っているはずの洗濯物は全て無く

なっていた。

「何で…洗濯物が無いんだ……？」

ふとシークは壁に貼ってある当番表を見ると、ロイに聞こえるようにポツリと言った。

「そういえば、今日の洗濯当番はマルスだったね。」

「……………え？」

ロイの顔が青ざめたその時、バァン！と隣の部屋の扉が勢いよく開いた。

「ひいっ！！」

そこに立っていたのは、ロイが誤って切った服を片手に持ったマルスとアイスクライマーの二人だった。

「……マ、マルス……。」

「やあ、ロイ。」

マルスはニコニコといつもと変わらない笑みを浮かべていたが、ロイの目にはその背後に憤怒の形相をした不動明王の姿が見えた。

「マルス兄ちゃんのお洋服破いたの、ロイ兄ちゃんだよ。」

「うん！僕達見てたもんね。」

いつもは天使に見えるこの二人も、今のロイには小鬼にしか見えなかった。

ロイはマルスに視線を移すと、彼は笑みを湛えたまま指をポキポキと鳴らしていた。

「あひいっ！！……………助けてよシーク　　っていない！！」

「シーク兄ちゃんだったらさつき出てっちゃったよ。」

「あの裏切り者……！！」

ロイはこの時ほどシークを恨んだことはなかった。

「…覚悟はいい？ロイ君……………」

「ああああ……………ごめんなさ……………いつ！！」

その後、ロイの悲鳴が家中に響きわたったとか。

終わり。

## 旅って一度してみたいと思う（後書き）

今の段階でいくつかのリクエストをいただきました！作品にするのは少し時間がかかりますが、必ずリクエストにお答えしますのでこれからよろしく願います。

P・S      ×

タナイトを出したのは、私の友人のリクエストなんです。



おっさんだって構って欲しい時もある

午後2時30分。

この中途半端な時間帯は気温も上がりポカポカ陽気の中、人々とっては絶好のお昼寝タイムである。

すま家でもまたお昼寝タイムで、別室で寝るちみつこ達その他、リビングにはマルスとアイク、ロイにリンク、ピットが床に寝転がり、ゼルダは静かにお茶を飲み、シークは縫い物をしていた。

ピンポーン

その時、インターホンが部屋中に鳴り響いた。

「……………」

だが、誰一人玄関に向かおうとする者はいない。

ピンポーン

「…ちょっと、誰か出なよ。」

「やだよ面倒臭い、そう言うお前が行けよ。」

「では私が……きゃっ!」

「ゼルダ!どうした!?!」

「恥ずかしいながら……足が痺れてしまいました。」

「ゼルダは行かなくていいよ。ってかシーク、お前行けよ。」

「断る。僕はこちらで忙しいんだ。」

「少しくらい中断してもいいじゃないか、早く行けよ。」

「……マルス、僕は今誰の服を直していると思う？」

「ごめんなさい！お願いだから雑巾にするのだけは勘弁して！」

「ふう……いっそのことジャンケンにしようよ。ゼルダさんとシークさん以外。」ピットが言うと、その二人以外全員が寝たまま手を振り上げた。

『ジャンケンポンツ！』

結果は、アイクがパーで彼以外は皆チヨキだった。

「アイクの負け。」

「じゃ、いつてらっしやーい。」

「……仕方ない。」

アイクはまだ眠い目を擦り渋々玄関に向かった。

「……はい、どちら様」

アイクが玄関の戸を開けると、そこには誰もいなかった。

「（……もう帰ったのか……ん？）」

ふと扉の横に目をやると、逆さまになった段ボールが置いてあった。

「（……何だこのゴミ……誰かのいたずらか……下らないことで起こしやがって……！）」

無性に腹が立ったアイクはその段ボールを思いきり蹴り飛ばした。

その時、

「ぐばあっ！！」

ボキリ、と鈍い音を立てて吹っ飛んだ段ボールから声が聞こえ、中からおっさんが現れた。

「！？」

突然現れたおっさんにアイクは目を丸くした。

段ボールと一緒に吹っ飛ばされたおっさんは腰をおさえ、痛みに悶えている。

アイクが呆然としていると『おーい!』と聞き慣れた声が耳に入  
た。

正面を見ると、家の前に止まったブルーファルコンから買い物袋を  
持ったファルコンとサムスが降りてきた。

「父さん、母さん……」

「いや、乱闘が終わった帰りに母さんと会ってな。」

「そのまま一緒に帰ってきたのよ。荷物が多かったから助かったわ。」

「母さんにパワードスーツより重いものは似合わないからな!」

「まっ、あなただったら」

「（……パワードスーツよりって……あれ、かなり重いと思うが……  
……）」

目の前でイチヤつく夫婦にアイクは心の中で突っ込んだ。

「ところでアイク、その倒れている方はどなたかしら?」

「ああ……段ボールに入ってた……」

「段ボールに……?」

ファルコンはそのおっさんに近付くと、『あっ!』と声を上げた。

「何だ、スネークじゃないか!」

「その声は……我が友・ファルコン!」

ガバリとおっさん、もといスネークは起き上がると、ファルコンと  
熱苦しい友情の握手を交わした。

「いや、すまない! ちょっと驚かそうと思ったんだが、まさか蹴ら  
れるとはな!」

ガハハと盛大に笑うスネークの腰には湿布が貼られていた。

「ハッハッハッ! お前も相変わらずだなあ!」

「本当ねえ、ウッフ。」

3人が盛り上がったしているとゼルダがお茶を運んできた。

「お父様、お母様、お茶です。」

「おつすまないなゼルダ!」

「あら、ありがとう。」

「粗茶ですがどうぞ。」

「ありがとう、いやゝお前はいいよなあ、こんな気のきく娘と美人の奥さんがいて。」

「もう、お世辞言っても何も出ませんよ。」

「ハッハッハッゝ!羨ましいだろ!」

ピンポーン

その時、再びインターホンが鳴り響いた。

「おっ?お客さんか…リンク、悪いが出てくれ。」

「はい。」

リンクは急いで玄関へと向かい、扉を開けた。

「どちら様です……か。」

そこに立っていたのは、片手に袋を下げた長身の鼻が高い男・ガノンドロフ。

全身から威圧感のようなものを放つガノンドロフに対し、リンクは特に動じもせず、すんなりと言い放った。

「いらつしやい、今日は何持つてきてくれた?」

するとガノンドロフは持っていた袋をリンクに渡した。袋はずっしりと重く、中にはリングが沢山入っていた。

「余るほど貰ったのでな、お前達にもくれてやるわ。今日はそれでパイでも焼くがいい。」

「ハイハイ、じゃどうぞ上がって。」

リンクに促されるままガノンドロフは家の中へ入った。

リビングの扉を開けると、ファルコンが『おお!』と声を上げた。  
「何だ何だ、今日は客の多い日だな。」

「うわっ、おっさんばかり…部屋換気しよう、加齢臭こもっちゃう!」

「何だと小僧!」

毒を吐くピットにガノンドロフが怒鳴ると、ピットは慌ててシークの後ろに隠れた。

「ガノンドロフ、家のピットをあまりいじめないでくれないか?」

「そ〜だそ〜だ!天使をいじめると天罰が来るんだぞ、バカ!鼻高オヤジ!」

「(こ奴…天使の姿をした悪魔に違い…!!)」

ガノンドロフは怒りのあまりギリギリと歯ぎしりをした。

「まあ落ち着け、たかが子供の戯言じゃないか。」

「…スネーク、貴様も来ていたのか。」

「ああ、ファルコンに話があつてな……。」

「奇遇だな、俺もそうだ……。」

ガノンドロフは不敵な笑みを浮かべると、スネークの隣に座った。

「何だ?二人して俺に話があるなんて。」

「ああ…実はな……。」

二人は真剣な表情になるとファルコンをジッと見つめ、回りにいたマルス達も、何が始まるのかと期待の目でその様子を見ていた。

「……ファルコン、お前に頼みがある。」

「偶然だな……俺もそうなんだ。」

「?いいから早く言わないか、待つのは嫌いだ。」

『俺にお前んこの子供を分けてくれ!』

『……………。』

『ええ~~~~っ!?!』

次の瞬間声を上げたのはファルコンではなく、発言した二人だった。

「お前も同じことを考えていたのか!?!」

「と言つかお前の家には既に子供がいるだろ!!何寝惚けたことを言ってるんだ!?!」

「俺は寝惚けてなどいない!!!」

ギャーギャーとわめく二人を一同はポカンとした顔で見ていた。

『で、どうなんだファルコン!!!』

「ハッハッハッ、ダメに決まってるだろ。」

「ええ〜!?!そんなあつさり否定するなよ〜!」

「当たり前だろ、ポテチを一枚あげると訳が違っんだぞ。」

「何故ポテチで例える!?!」

「まあ皆さん落ち着いてくださいな!」

大人達が騒ぐ中、アイクは無言で窓を開け、マルスはどこからかフア○リーズを取り出すと、それを部屋に撒きながらボソリと呟いた。  
「やっぱりこの部屋、オヤジ臭いや……。」

次に続く。

おっさんだって構って欲しい時もある（後書き）

おっさんだらけの話になってしまいました。ちなみに私はガノンドロフもスネークも好きです。嫌いという訳ではありませんよ。

最後にさりげなくマルスに毒を吐かせてみせました。さて、次の話はこの物語に珍しい少しシリアス的な部分があります。どうぞご期待ください。



## 本物じゃなくたって別にいい

部屋の空気を完全に入れ換えた頃、騒いでいたおっさん二人はようやく静かになり、ファルコンの向かいに大人しく座っていた。

「さて、落ち着いたところで話を再会するが……なぜ家の子供達を欲しがるんだ？」

「よくぞ聞いてくれた！」

「理由も聞かずに家の子をお渡しすることは出来ません。」

サムスの鋭い突っ込みにガノンドロフはぐう、と少したじろいだ。

「まあな……いいか！俺は今デデデとクツパ、この二人と同じ場所で生活している。こいつらに共通するものとは何だ？　そう、どちらもムサイオヤジであるということだ！！」

「はあ………だから？」

「分からん奴らだな！俺が言いたいことは　そう、我が家には子供が一人もいない！！良いか！？子供というのはな、その存在だけですさんだ心を癒してくれる素晴らしいものなのだ！」

「はあ………で、スネーク。お前は何故なんだ？」

「いやあ、俺は家に華が無いと思って、お前んとこから娘を一人

「ダメだ。」

「え~~~~~っ！！」

スネークの言い分をファルコンは0.5秒で却下した。

「何でだよ！？二人もいるじゃないか！」

「ハッハッハッ。ナナはポポとセットでなければいかんし、それにゼルダなんてもつての他だ。」

そう言つて茶をすすするファルコンの背後で、リンクが敵意剥き出しの目でスネークを睨んでいた。

「じゃあ奥さん」

「死にたいのか？」

「ファルコンは0.05秒で断ると、炎を纏う拳を笑顔でこちらに構えた。」

「ひいつ！！…仕方ない、諦めるか……。」

「俺は娘でなくとも構わん、むしろ息子が良い！」

「ガツクリと肩を落としたスネークの隣でガノンドロフはフン、と鼻を鳴らした。」

「ガノンドロフ……なぜそんなに必死なんだ？」

「だから言ったであろう！？我が家に癒しが必要」

「それってつまり、子供に自分のこと『お父さん』って呼んでもらいたいんじゃないのかい？」

「！！！」

縫い物をやり終えたシークの静かな発言に、ガノンドロフはギクリと反応した。

「……………」

ガノンドロフを除く一同は彼を軽蔑の目で見ていた。

「な…何だ貴様ら！俺は、そそそそんなこと、これっぽっちも考えてなんか…うん、考えてないぞ！！」

図星を突かれたガノンドロフは必死に否定しながらも激しく動揺していた。

「…最低だな…。」

「変態だよね…。」

「どうせ僕みたいな美青年に、『お父様』とか呼ばせる気だったんだろ？」

「そんなこと………ちよつといいかも。」

ボソリと密かに発せられた言葉が耳に届き、マルス達の顔は一気に青ざめた。

「やっぱりかこの変態……！！！」

「皆、半径3 m以内に近付いたらダメだよ!!」

「コラ! 汚いものを見る目で俺を見るな!!」

「ハッハッハッ、とにかくそんな理由じゃあ家の子達はやれんな。」

「何だと!!?」

大きく口を開けて笑うファルコンにガノンドロフは苛立つと、思わず彼に向かって怒鳴った。

「ケチケチせずともよいではないか!! 所詮皆『仮の家族』であるう!!?」

その途端、ファルコンの顔から笑顔が消えた。

「.....あなた?」

「...父さん...?」

ファルコンはしばらく黙りこんでいたが、ふと静かに口を開いた。

「お前達、父さんと母さんは大事な話があるから、他の部屋に行つてなさい。」

「えっ...でも」

「他の部屋に行きなさい。」

「.....分かった...」

いつもと違うファルコンの様子を感じとり、マルス達は素直に立ち上がりリビングを後にした。

「...ガノンドロフ。」

名前を呼ばれ顔を上げると目の前のファルコンは特に怒りもせず、いつになく真剣な顔でこちらを見ていた。

「……ふん、俺は間違ったことは言っていないはずだ。」

「おいお前！」

「スネーク、ここは俺に話しをさせてくれ。」

ファルコンに言われ、スネークは渋々口を閉ざした。

「……確かにお前の言う通り、俺達はマスターハンドにより構成された仮の家族だ……無論、それは俺達だけではない。スネークの家だって、もちろんお前の所だって、全部マスターハンドが勝手に決めたことなんだ。」

「ああ、オヤジだらけで本当に迷惑だ。」

「アハハ……でもなガノンドロフ、俺は勝手に決められたこの家族の父親であるということを、一切苦痛になど思ったことはない……皆思い出してみろ、俺達が『家族になれ』と命令された、あの日のことを……。」

『……………』

ファルコンを含めた4人の脳裏に、タブーとの戦いの後の光景が蘇った。

皆で協力し、タブーを倒したあの日。

ファルコン達大人は体格のせいでもあり怪我はさほどひどくはなかったが、スマブラスタジアムに備え付けられている病室には、深手を負った子供達が皆ベッドに横たわっていた。特に酷い者は吐血し、意識が戻らないこともあった。

その光景を、ファルコン達は悔しさのあまり唇を噛んで見ていた。

「……あの時、俺は悔しかった……自分はこの程度なのに、何故あの子

達があんなに酷い怪我で苦しまなければならぬのかと思ったよ……」

「代わってあげたい、とも思ったわ……あなたはどう感じたの？」

「……………」

サムスの問いに答えず、ガノンドロフは黙ったままだった。ファルコンは冷めた茶を一口飲むと、穏やかな笑みを浮かべて言った。

「例え仮であろうと、俺はこの一家の父親でありたい……もしまたあのような事が起こったなら、今度は子供達に怪我などさせやしない。俺が皆を……守ってみせる……。」

「……ファルコン。」

「うふふ……あなた、カッコイイわよ。」

「そうか、フフ……。」

ボタン！

「おはよ……！」

沈黙が続いたその時、扉が勢いよく開き昼寝から目覚めたちみっこ達が現れた。

「あら、皆おはよう。」

「ママおはよ……。」

「あっ！ガノンおじさんと段ボールおじさんだ！」

「だっ、段ボール……！？」ポポとナナ、カービィは二人のおじさんに抱きついた。

「ポヨ！ガノンおじさん、遊ぼう！」

「いっただだ！俺の残り少ない貴重な髪を引っ張るな！」

「はいはいイタズラしない！ガノンさん困ってるでしょう？」

サムスがたしなめると、カービィは『はい』と素直に返事をし、手を放した。

「失礼します。」

リンクの声と共に扉が開き、数枚の皿とフォークを持ったロイとテイ・ポットを持ったゼルダ、そして盆に焼きたてのアップルパイを乗せたリンクが部屋に入ってきた。

「お茶菓子持ってきました。」

「おっ？この匂いはアップルパイだな！」

「ガノンドロフから貰ったリングで早速作ってみたよ。結構大きいから皆で食べられるよ。」

「わーいおやつだおやつだ！」

ちみつこ達がフォークを持って喜んだその時、ドドドドッ！と階段を凄まじい勢いで走る音が聞こえたかと思うと、『おやつだ！』

と叫んだマルスとピットが現れた。二人に続きアイクとシークも部屋に入ってくる。

「お前ら、手伝いに来ないで食いにくるだけってのは何かずるくないか？僕達3人で頑張ったんだぞ！」

「ご苦労であつた。さ、アップルパイちよーだい！」

「馬鹿しか取り柄のないお前がよくやったじゃん。で、アップルパイちよーだい！」

笑顔で皿を差し出す二人にロイは怒りを通り越して呆れていた。

「……ああ、もう。」

ギャーギャーと騒がしい光景を無言で見ているガノンドロフに『失礼します』と声が掛けられた。

隣を見ると、ティーポットを持ったゼルダが空になったガノンドロフのカップに茶をつぎ足していた。

「……なあ、ゼルダ姫よ。」

「はい？何でしょう。」

「……お前は、この家族の一員でいられることが嬉しいか？」

ゼルダはキョトンとしていたが、ニツコリと笑みを浮かべて答えた。

「はい！優しいお父様やお母様、それにリンク達皆と暮らす一日一日が、私にとって何よりの宝物なんです。」

「……………」

ガノンドロフはゼルダの言葉に目を丸くしていたが、フツと穏やかに笑った。

「そうか……」

「はい、では失礼します。」

ゼルダは丁寧な頭を下げ、向かいのサムスの所へと移動した。

「（……………宝物、か…………）」

ガノンドロフはゼルダの言葉を頭の中で反芻すると、つぎ足されいた茶を一口飲んだ。

おまけ。

「なあ、でも『一日だけすま家の父親』ってのをいつかやらせてくれんか？」

「おおっ！それはいいなあ！」

「ハッハッハッ！お前達も粘るなあ。」

終わり。



## 本物じゃなくなつて別にいい（後書き）

今回の話はファルコンパパとガノンドロフ中心で書きました。すま  
家誕生の理由を本編と少し結び付けてみました。不自然だったらど  
うしよう……。さて、私も出したいキャラクターは沢山  
いますので、どんどん書いていこうと思いますので、応援よろしく  
お願いします。

## 甘いものには饗がある

すま家のリビング。

3時のおやつの時間、リンクは今日のおやつ・レモンチーズタルトを切り分け、その様子をちみつこ達は期待の目で見ていた。

「わ〜いおやつだ〜！」

「へえ〜先輩、今日はずいぶん凝ったもの作りましたね。」

「なかなか難しかったけどね、味の保証は出来るよ。」

切り終えたタルトを皿に乗せ、それを次々と配った。

『いただきま〜す！』

早速一口食べると、皆の表情がパアツと輝いた。

「おいし〜！」

「はう〜！リンクさん、すっごくおいしいです！」

「うん、なかなか……。」

「さすがリンク、とても美味しいです。」

それぞれが口々に感想を言つと、リンクは満足げにニツコリと微笑んだ。

「……………？」

ふと黙々と食べていたアイクがチラリと横に目をやると、一番はしやぐはずであるマルスが右手にフォークを持ち、険しい顔でタルトを見ていた。

「……………腹でも痛いのか？」

「えっ！？そ、そんなことないよ！」

ハツと気付いたマルスは笑顔で否定したが、やはりいつもとどこか様子がおかしい。

「あれ？どうしたマルス、君の好きなチーズケーキ系統のやつなの

に、すぐ食べないなんて珍しいね。」

「僕だってたまにはゆっくり食べたい時もあるんだよ!」

「ポヨ、マルス兄ちゃんが食べないなら、僕が貰っちゃおう!」

そう言うとかービィはマルスの皿を手に取り、タルトを口に入れようとした。

「あつ…ダメー!! いらなくないからー!!」

マルスは慌てて皿を取り上げると、フォークをつかみタルトを一口食べた。

「~~~~~っ!!」

その途端マルスは声にならない叫びを上げ、片手で右頬を押さえた。

「マルス、どうした?」

「……っ何でもないよ!」

強気に答えるものの、彼の表情はかなり辛そうであった。

「(もしかして……) マルス、ちよっと口を開けてくれないか?」

マルスの容態に何かを感じとったシークが口を開けるよう指示すると、彼は両手で口を塞ぎフルフルと頭を振った。

「……アイク、ちよっとこっちに来てくれないか。」

「……………」

シークはアイクを近くに呼ぶと何やらヒソヒソと話をし、戻ってきたアイクがマルスと向かい合わせになる位置へと移動した。

「?」

マルスが何事かと思っていると、シークが一枚の紙をこちらに見せてきた。

そこには平仮名の『あ』という字が大きく書かれている。

「マルス、これ何て読む?」

「えっ？『あ』」

あがつ！？」

マルスが口を開いたその時、アイクは口を閉ざさせないように手でおさえこんだ。

「はがはっはは〜！（たばかったな〜！）」

シークはマルスの口内を覗きこむと、彼の右奥歯に大きな黒い穴があるのに気付いた。

「…………… やっぱり虫歯だ、しかも結構大きいね。」

アイクが手を放すとマルスはヒリヒリと痛む箇所をさすりながらシークを睨んだ。

「ったく、何するんだよ！？だいたいこの僕に虫歯なんかあるわけないだろ！見間違えたんじゃないの？」

「僕は見間違いなんてしないよ…しかしそれだけ大きいと、歯医者に行ったほうがいいと思うよ。」

「ふん！…… 由緒正しき王子であるこの僕が虫歯なんて……………！」

マルスはブイツとそっぽを向くともう一度タルトを口に入れた。

「！！痛っつ~~~~…！」

だがやはり痛いものは痛いらしく、マルスはその場にうずくまった。

「マルス、タルトだったらちゃんととっておくから、歯医者に行つてきなよ。」

「そうそう、このままだとこれから美味しいものとか何も食べれなくなるよ？」

「……………」

マルスは起き上がると涙目になりながらシーク……を通り過ぎアイクに抱きついた。

「…生意気言つてすみませんでした。歯医者連れてってください。」

マルスはアイクの服に顔をつけたまま謝ると、アイクはよしよしと頭を撫でた。

「…彼が謝るべきはずは僕なんじゃないのかな？」

「あれがマルスの謝り方なんだよ。本人に言わないってところが変な意地張ってるよね。」

ロイは茶をすすりながら抑揚のない声言い方で答えた。

歯を治すべくマルスとアイクがやってきたのは近所のマリオさん家。インターホンを一度押すと『はい』と声が聞こえ、扉が開くとピーチ姫が現れた。

「あらいらっしやい、どうしたの？」

「…マルスが虫歯になって…マリオさんはいるか？」

「あらあら大変ねえ、マリオならいるわよ、まず上がってちょうだい。」

ピーチに促され二人は家の中に上がった。

「やあ二人共！いらっしやい！」

奥の部屋からマリオが現れると、二人は頭を下げた。

「それで何だい？マルス君の虫歯を治してほしいとな？」

「そうなんです、お願いしま………イテテッ！」

「うっむ……よし分かった！ちょっと待っていなさい。」

そう言うマリオは再び奥の部屋へと戻っていった。

数分後。

「おまたせ〜！」

明るい声と共に現れたのは、白衣を着込み様々な医療器具を身につ

けたマリオ…… もとい、Dr・マリオだった。

「さあ、このDr・マリオが来たからにはもう安心だ！…… 普段はスマッシュブラザーズを代表するMr・Nintendo、しかし、その裏の顔は無料で村の皆の病気や怪我を何でも治す天才ドクター！その名は」

「いいから早く治して……！」

マルスの必死の声によりDr・マリオは我に返った。

「いやあスマンスマン、じゃあマルス君、こちらの診療所に……」

Dr・マリオに言われマルスが誘導された部屋の扉には赤い文字で『立ち入り禁止』と書かれていた。

二人がその部屋に入ると、付き添いで来たアイクにはすることがなく、ボーっとしていた。

（……『立ち入り禁止』…… 何が行われているんだ……？）

その時、アイクの目の前に皿に乗った紅茶の入ったカップが現れた。顔を上げると、ニッコリと微笑んだピーチが自分に紅茶を差し出していた。

「まだかかるそうだから、よかつたら一緒にお茶しない？」

「……いただきます。」

アイクは頭を下げると紅茶を受け取った。

「ただいま！」

元気に挨拶をしてドタドタとリビングに入ってきたのは、虫歯が完治して上機嫌のマルスだった。彼の後にアイクが無言で部屋に入ってきた。

「おかえり、どうだった？」

「もうすっかり治ったよ！さすがDr・マリオだね！」

マルスが嬉しそうに話していると、リンクがラップのついた皿とフォークを持ってリビングに入ってきた。

「あっリンクただいま、もうすっかり治ったよ！」

「よかった……はいこれ、マルスのおやつ之余り。」リンクが皿を置くと、マルスは顔を輝かせた。

「ああ、やっとともに食べられる……頂きます！」

早速ラップを剥がし食べかけのタルトの角をフォークで少量崩し、それを口の中に入れるとマルスの顔が綻んだ。

「ん〜！やっぱり美味しい！」

エヘヘ、と嬉しそうに笑うマルスにリンクはニコリと微笑み返した。その光景を見ているアイクもまた、口元に微かな笑みを浮かべた。

「（…それにしても、Dr・マリオは一体どんな治療をしたんだ…  
……？後でマルスに聞いてみるか。）」

終わり。

## 甘いものには罖がある（後書き）

国後さんのリクエストその2です。楽しんでいただけたでしょうか？

他の方もリクエストがあればどんどんください。

さて、次回はソニックを出演してみたいと思います。ご期待ください。



## 運動会って開始前テンション上がる

早朝、すま家の台所。

「あら大変、お米が無いわ。」

サムスが食品庫を見ると、いつも米を入れている大きな袋の中に米が一粒も入っていないかった。

「金曜日の朝はお米って決めてるのに……仕方ないわね。」

「という訳で、今日はパンで我慢してちょうだい。」サムスの言葉に茶碗を突き出していたマルス達は固まった。

「そんな……!!」

「金曜の朝は米を食べないと、力がでないよ!!」

「お米食べた〜い!」

「この混ぜてしまった納豆はどうすればいいんだ!？」

ギヤーギヤーと騒ぐ一同を『うるさ〜い!』とサムスが一喝した。

「そんなこと言っても、もうお米は一粒も無いんだから文句言わないの!ほら、パパとこの二人を見習いなさい!」

サムスが指差したその先にはモサモサと二枚同時に食パンを食べるアイクと、ジャムを塗ったパンに噛じりつくリユカ、そして彼もまた誤って混ぜてしまった納豆を何とパンに挟んで食べているファルコンがいた。

「お米は明日買うから、とりあえず今はこれで我慢して。」

『……………はい。』

一同は返事をするとはたパンを食べ始めた。

その時、新聞を取りに行ったシークが食堂に戻ってきた。

「はい父さん、新聞取ってきたよ。」

「おお、スマンな。」

ファルコンはそれらを受け取ると早速新聞を読み始めた。

シークは席に着くと、新聞と一緒に持っていた紙を見ていた。

「……それにしても困ったわねえ。この人数だとお米なんてすぐに無くなっちゃうし、かといって一遍に沢山買ってお金もないし……。」

ハア……とサムスはこめかみを押さえ溜め息をついた。

するとシークは顔を上げ、その紙をサムスの前に差し出した。

「？どうしたのシーク。」

「……これ、見てみなよ。」

「明日すま村にて、『大乱闘スマブラレース大会』を開催致します。

誰でも参加自由。スタート場所はスマブラスタジアム。主催・司会はマスターハンド＆クレイジーハンド……。」

「へえ、あの手共も面白いこと考えるね。」

「なお、優勝者にはトロフィーと、その副賞に………米5年分とすま村産特製野菜・果物を差し上げますですって!？」

『米5年分!？』

米、という言葉に反応した一同はガタガタと音を立てながら次々に椅子から立ち上がった。

「……これはチャンスだわ! あんた達、もし優勝したらお米は食べ放題よ!」

「食べ放題!? ペポ! 幸せ!」

「でも優勝かあ………誰が出るの?」

「あら、それは愚問よロイ。」

「へ?」

ロイだけでなく一同もポカンとしていると、サムスはズバシと言い放った。

「すま家の食料難なんだから、皆で解決しなきゃいけないでしょ？」

翌日。

天気は恵まれ、雲一つ無い空がこのスマブラスタジアムを見下ろしていた。

観客席は多くの人々で埋まり、スタジアムの中央には参加選手が集まっている。

その中にトレパンを着込んだすま家一同が、各自準備体操をしていた。

「まさか家族全員参加とは…母さんも必死だなあ。」

「当たり前よ！今日からの食卓はこのレースにかかってるんだから！」

体操を終えたサムスが気合い十分に言うと、『おーい！』と後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

振り返ると、同じくトレパンを着込んだスネーク一家がこちらに歩いてきた。

「ピッカー！」

その中の1匹・ピカチュウは勢いよくサムスの腕に飛び込んだ。

「ピカチュウじゃない、久しぶりねえ。」

サムスが優しく頭を撫でると、ピカチュウは『チャア〜』と気持ちよさそうに鳴いた。

「ファルコン、お前も一家総出で参加するんだな。」

「ああ、我が家の今後の食事がかかっているからな！」

二人が話していると、『あー！』と声を上げたリュカが走ってきた。

「トレーナーさん！」

「やありユカ、君も参加するんだね。」

駆け寄ってきたリユカにトレーナーはニコリと微笑んだ。

「トレーナーさんも…皆さん参加するんですね。」

リユカは恐る恐るトレーナーの後ろにいる、フォックス・ファルコ・ウルフを見た。

「…まったく面倒臭え、何でこんなもんに出なきゃなんねえんだよ。」

「ま、いい暇潰しにはなるだろう。」

「乱闘ほどじゃないが、なかなか楽しめそうだ。」

苛立つウルフをファルコがたしなめ、フォックスはどこか楽しそうに言った。

「…まあ、今日はお互い頑張ろう。」

「はい！頑張りましょう！」

「あれ？シークは今日ゼルダとしてレースに出るんだ。」

「ええ。何かあったときすぐに対応できるように、だそうです。今日は私も精一杯頑張りますので。」

「でもゼルダ、危険なことがあったらすぐに俺の所に来るんだぞ？」

リンクが心配そうに言うとゼルダは『はい』と優しく返事をした。

「やあ君達！」

声をかけられ振り返ると、そこにはやはりトレパンを着たマリオ一家がいた。

「ゼルダ、今日は頑張りましょう。」

「ええ、そうですね。」

ピーチとゼルダが仲良く話しているその横でマリオはリンクに声をかけた。

「乱闘ではないけどこれも勝負だ。お互いベストを尽そう！」

「はい、そうですね。」

マリオが差し出した手をリンクは握り返した。

「カービィ。」

「ポヨ?……あつ!メタナイトだ〜!」

カービィが駆け寄ると、彼の近くにルカリオとミュウツーが立っていた。

「紹介する、私の友人のルカリオとミュウツーだ。この二人もレーズに参加する。」

「ポヨ……でも僕、食べ放題のために負けないよ!」

やる気に燃えるカービィの隣で、ルカリオとミュウツーが『食べ放題って何だ?』とメタナイトに問いかけた。

「……何か、こうしてみるとスマッシュキャラ全員いない?」

「そうだねえ、ライバルが多いと苦戦するし、なるべくスムーズに勝って米と食料をいただこう。」

「……そうだな。」

3人が体操を終えたその時、『アイク様〜!』と可愛い聞き覚えのある声が耳に入ってきた。

「この声は……もしかして!!」

ロイが気付いたのと同時に隣にいたアイクが突然仰向けに倒れ、彼の胸の所にハートオーラを出したプリンがいた。

「やっぱりプリンちゃんだ〜!久しぶり〜!」

「こんにちではしゅ……アイク様、お久しぶりでしゅ」

「あ……ああ……。」

「こんにちはプリンちゃん……ところで、もしかしてプリンちゃんも参加するのかい?」

「そうでしゅ、それに……プリンがピンチになったら、アイク様が助けてくれるって信じてましゅから……。」

プリンはそう言うとアイクに抱きついたままポツと顔を赤らめた。

「Hey!お二人さん熱いねえ。」

突然話し掛けられその方を向くと、見慣れない人物が近くに立っていた。

「あの…どなたですか？」

「Oh,sorry.名も名乗らずに失敬した 俺の名はソニ

ック、このレースの参加者だ……実はこの村には昨日来ただけでね、まあレースが終わっても仲良くしようや。」

「うん、お互い頑張ろう!」

スッと差し出された手をマルスは力強く握り返した。

このソニックの登場が、後に彼等を苦しめていくなど誰も知らない。

次に続く。

## 運動会って開始前テンション上がる（後書き）

この物語はオールスター全員出ます。

d e sさんリ

クエストのソニックを出しました。まだまだ出番があるので、今後の展開にご期待ください。

## 足下に気を付けていこう

『えゝ皆さん、お静かに!』

スタジアムにマイク音声that響き、一同は耳を傾けた。  
どうやら音声は放送室から流しているらしい。

「あれ?この声って……。」

『只今より、大乱闘スマブラレース大会・開会式を行います。式の進行は私マスターハンドと……』

『俺様、クレイジーハンドがやるぜ!』

「あ、やっぱりコイツらだ。」

「そう言えば司会やるって紙に書いてあったっけ……。」

『ではこれからルールを説明します。ルールと言ってもいたって簡単、自分の足で精一杯走ってください。なので飛行することは禁止とします。』

『乗り物を使うなんて持つての他、武器やアイテムを使うのも禁止だぜ、破ったらその場で即失格だ!』

『コースは3つあり、それらをクリアしゴールした者が優勝とします。また他の仲間と協力しても構いません。ただ、優勝者は一人だと言っことをお忘れなく。皆さん力いっぱい頑張ってください!』  
マスターハンドが言うと、一同は『おゝ!』と拳を上げた。

『では皆さん、スタート地点にスタンバイしてください。』

その言葉を合図に皆はゾロゾロと移動を開始した。

「(よゝし!絶対優勝して、お米とその他もろもろ頂くわよ!)」

「(愛する段ボ　じゃなくて、愛する息子達のため、俺は勝つ

!-)」

「(優勝したら、ピーチ何作ってくれるかな……頑張ろう!)」



「（…もし優勝したら…賞品の一部をすま家に分けて、飯を馳走させてもらおう。）」

それぞれの思いを胸に、一同はスタートラインに立った。

「それじゃ行くぜ！

レディー……………」

パン！

乾いたピストルの音が響くと、選手達は一斉に走り出す。

観客の声援を聞きながら、選手達は快調に飛ばし次々とスタジアムから外へと向かっていった。

最後の一人・ワリオが出ていくと、スタジアムの中央に四角い箱型の巨大なスクリーンが現れた。

『えゝここからは選手の活躍をこのスクリーンに映し出し、私とMr・クレイジーの解説と共に皆さんにお伝えしたいと思います。』  
マスターハンドがそう言うと、箱型スクリーンは観客全員に見えるように四方に映像を映し出した。

それぞれが自分のペースで走っている中、トレーナーを見たりユカ

はある事に気付き、走りながら彼に近寄った。

「?どうしたのリュカ。」

「トレーナーさん、今日ポケモン達はどうしたんですか?」

「ああ、彼らだったら観客席にいてレースを見ているよ。」

「一緒に…走らないんですか?」

「さっきマスターハンドが言ったように、もしかしてポケモンも武器のうちに入るんじゃないかと思ってね……それに、今日くらいは皆に頼らず自分の力で頑張りたいんだ。」

「そうなんですか……でも優勝は譲りませんよ!」

「アハハ、僕だって!」

二人が和やかに話す一方で、マルスとロイは火花を散らせていた。

「マルス、僕ね君だけには負けたくないな!」

「偶然だねえ、僕もそう思っていたところだよ!」

「……………」

仲介に入るのが面倒なアイクが黙って見ていると、ポス、と背中に何かが乗ったことに気付いた。

「…………?」

見てみると、目をハートマークにしたプリンが自分の背中につかまっている。

「アイク様……走る姿も素敵でしゅ!」

「…何をしている…?」

「プリ! プリンはアイク様のお側にいたいんでしゅ!」

「…優勝者は一人だけだ……。」

「プリンは賞品なんて欲しくありません! だから…アイク様と一緒にいましゅ」

「……………」

呆れて何も言えないアイクの横で、先程までマルスと睨みあっていたロイが嫉妬の目で今度はこちらを睨んでいた。

ブウウウウンッ！！

突然けたたましいエンジン音が響いたと思うと、彼らのすぐ横を何かが通過していった。

「！何だ！？」

驚いて前を見ると、ビリだったはずのワリオがバイクに乗って選手達を次々と追い越していた。

「ガッハハハ！どけどけ！」

「おいワリオ！ルールを聞いていなかったのか！？乗り物は禁止だぞ！」

マリオが注意するとワリオは『フン！』と鼻で笑った。

「これだけスタジアムから離れていれは、あの手共も分かるまい！優勝は俺様のものだ！ガッハッハッハ！！」

チュビーーーーッ！

「ぐはあっ！？」

突然、林の中からの光線がワリオを直撃し、彼はバイクごと倒れた。一同が何事かと足を止めると、茂みから3体のロボットの姿を現した。そのうちの一体の目から煙が出ていることから、おそらく彼が光線を放ったのだろう。

残る二体はそれぞれスピーカーとテレビカメラを持っている。

『ハーイ！ワリオ選手、失格だぜ！』

スピーカーから聞こえた軽快な声はクレイジーハンドのものだとすぐに分かった。

『言うのを忘れていましたが、コースには中継と監視のためのロボ

ットを配置しています。なので皆さんがいつどこで反則行為しても、こちらのスクリーンですぐに分かるのです。』

『反則なんてしたら……今みてえにこうなるわけだ!』

一同は白目剥き出しのワリオを見て血の気が引いていくのを感じた。

『それではレース再開! 頑張ってくださいね。』

『お、おお……。』

弱々しく返事をし、一同は再び走り出した。

「……つと、何だここ?」

『第1コース』と書かれた看板の所で足を止め、前方を見た。

バナナ畑に挟まれたコースの20m先まで、地面の所々に乱闘でよく使用するセンサー爆弾が埋まっている。

「要するに、爆弾を避けていけばいいのだな、簡単だ。」

「やほゝい! 最初は楽で良かったゝ!」

ファルコとルイージが前へ進み、続けて行こうとしたロイの肩をアイクがつかんだ。

「何? どうかした?」

「…待て、迂濶に進むな…きっと何かある…。」

「『何か』……?」

ロイが首を傾げたその時、

チユドーーーーン!!

「!?!」

驚いて前を見ると、黒焦げになったファルコとルイージがピク、ピクと微かに動いていた。

『ハーイ! ファルコ選手にルイージ選手、両者失格ゝ!』

先程の3体のロボットが再び現れ、クレイジーハンドの声が失格を告げた。

「な、何が起こったんだ　あ！」

マルスの疑問はすぐに解決した。

両脇のバナナ畑から、ドンキーコングとディディーコングがバナナの皮を立て続けに投げているからだ。おそらく先程の二人はバナナの皮を踏んで転倒し、その拍子に爆弾を踏んでしまったらしい。

「あいつら、今日見ないなと思ったたらこんな所で雇われてたんだ……。」

「これは……なかなか難しいね。」

一同が頭を抱えていると、勇敢にもその危険地帯を一人走り抜ける者がいた。

「……！！母さん！？」

「こんな畏なんかに、怖じけづいてたまるもんですか！」

華麗な身のこなしで爆弾とバナナの皮を避け、サムスは第1コースをクリアし、そのまま走っていった。

「おいサムスー！待ってくれー！」

投げつけられるバナナの皮を拳で払い、ファルコンも突破していった。

「す、凄い……。」

「Oh！How about that！だが、俺も負けねえぜ！」

そう言うところニックは勢いよく走り出した。風のようなスピードで爆弾とバナナの皮を避け、あっという間に向こう側へと走って見えなくなっていた。

「あの人……速い……。」

「よし、俺だつて！」

「僕もー！」

選手達が次々と挑んでいく中、リンクとゼルダはどうすれば良いか立ち止まっていた。



「キャア~~~~~!」

『クツパ選手、ポポ選手、ナナ選手、ピーチ選手、4人連続失格だぜ!』

「ふ、哀れな奴らめ…。」

つるっ

「うおっ!しまっ」

カチッ

ドオーーーーーン!

『ルカリオ選手も失格だ〜!皆さん頭上と足下にはご注意を』

「む…無念……。」

バタリと倒れたルカリオに、既にクリアしたメタナイトは心の中で手を合わせた。

(我が友よ……後は私とミュウツーに任せろ……。)

つるっ

「うわあっ!」

うつかり皮を踏んで滑ったロイは、近くにいたピットの羽根を思わずつかんだ。

「いった~~~~い!!」

ピットは振り返り涙目でロイを睨みつけた。

「痛いじゃないか！天使の命の羽根に何するんだよ！！」

「ゴメンゴメン、転びそうになったからさ。」

「……あゝ、久々に走ったら足疲れちゃったな……罰としておぶつてよ。」

「はあ！？何で僕がそんなこと」

「クスン……痛いよゝ、ロイがつかんだ羽根が痛いよ……。」

「なっ！……ああもう、早く乗れ！」

ロイが背を向けてしゃがむと、ピットは『そうこなくっちゃ』とその背中に飛び付いた。

「つかまつてろよ……うおおお……っ！」

遠くでヨッシーが爆発に巻き込まれる中で、ロイは雄叫びを上げながら何とか罨を避けコースを突破し、先に行っていたマルスとアイクに追い付いた。

「あ、ロイだ。それにピットも。」

「やつほ。」

ヒラヒラと笑顔で手を振るピットの下で、ロイは死にそうな顔で必死に走っている。

「何でピットおぶってるか知らないけど、まあ頑張つてね。」

「し……死んじゃうよ……。」

その時、アイクの背中にいたプリンがロイの方を向いた。

「は……っ！！プリンちゃん……！」

「ロイしゃん、頑張つてくだしい！」

ニコツとプリンが微笑むと、ロイの顔は徐々に生氣を取り戻していった。

「もちろんさプリンちゃ……ん！！」

グンツとロイのスピードが急激に速くなったかと思うと、その勢いで二人を追い越していつてしまった。

「……すごいな……。」



「あいつ、プリンちゃんいたら何でもやりそうだよね……。」「  
二人は苦笑いをしながら次のコースに向かって走り続けた。

第1コース 失格者

ルイージ ファルコ

クッパ ポポ ナナ

ピーチ ルカリオ

次に続く。

## 足下に気を付けていこう（後書き）

続きます。運動会ものは書くとかかなりハードなので大変です。その中のギャグシーンに少しでも笑って頂ければ嬉しいです。ではまた次に。

## バランス感覚って難しい

「次はここかあ……。」

『第2コース』の看板の後ろには、5 m程の長さで幅の狭い丸太の橋が6本並んでいた。その下にある川には水が流れておらず、代わりに沢山のボム兵が置かれている。

「よし！まずは俺が渡って見せるぞ！」

スネークは気合い十分に言うと、橋を普通に歩いて渡るのではなく、橋の上で匍匐前進をした。

「さあ！父さんに続け、息子達！」

「……………親父。」

「…父さん……それ、凄く格好悪いよ。」

フォックスとウルフ、そしてトレーナーは冷ややかな目でスネークを見ていた。

「なっ！！薄情な息子達だな！いいか？この渡り方は俺のこれまでの経験上で最も安全な橋の渡り方なん」

つるつ

ドカーーン！！

『スネーク選手、第2コース最初の失格者だぜー！』

『（…何をやってるんだ、あの人は……………。）』

3人の息子達はスネークの失態にただ呆然としていた。

「フン、スネークの間抜けが落ちたか。」

「ライバルが減ってちょうどいいデ。」

と、後ろから現れたガノンドロフとデデデ大王は鼻で笑い、嘲るように言った。

「さて、俺達はとっとと渡ってしまおうとするか。」

そう言うときガノンドロフは丸太に乗り、デデデ大王も彼に続いた。

「ぬっ……なかなかバランスがとれんな……。」

「気を付けんと落ちるデ。」

ミシッ……

ギギギギ……

『……ん?』

バキィッ!

『うおっ!?!』

チュドーーーーン!

突然丸太が二つに割れ、二人はボム兵の川に落ちた。

『ガノンドロフ選手、デデデ選手失格!』

『ああそうそう、言い忘れていましたが、この丸太の中にはハズレが2本混じっています。今1本壊れたのであと1本ですね。』

『それを早く言え!!!』

何の悪びれもなく言うマスターハンドに黒焦げになった二人は突っ

込んだ。

その時、頭上の丸太の上をサムスとファルコンが通過していった。

「お気の毒、失礼します。」

「ハッハッハッ！格好悪いな、ガノンドロフ！」

「んなっ……ぐうっ！」

二人は悔しさのあまり歯をくいしばり、小さくなっていく二人をただ見ることに出来なかった。

「あゝ…あの二人落ちちゃった。」

「いいじゃないか、ライバルは減った方が得だよ……それにしてもハズレか、慎重に選ばないとね。」

シークの言葉にリンクは頷き、どの丸太を渡るか選んでいると、二人のすぐ横を何かが勢いよく過ぎていった。

「！」

驚いて顔を上げると、向こう側に小さくなっていくソニックの背中が見えた。

「あの人速いなあ……。」

「あまり呑気なこと言つてられないよ。これはレースだからね、先にゴールした者が勝ちだ。」

「そっか、じゃあ少しでも急がなきゃな！」

「そうだね……この丸太だったら大丈夫そうだ。さ、渡ろうか。」

二人はバランスをとりながら慎重に渡っていき、無事向こう側に着いた。

「つと……結構ムズいな……。」

「ピカア……。」

ウルフは真剣な顔で丸太の上に立ち、ピカチュウはウルフの背につ

かまっていた。

「ピカ〜、ピカチュ〜？」

「ああ、大丈夫だ……この調子なら何とか渡れ」

ゴロゴロゴロ……！

「ん？」

ウルフが振り返ると、ボールのように転がってきたカービィがどんどんこちらに向かってきていた。

「んな……っ！！」

「ペポ〜どいてどいて〜！！」

どいて、と言われてもこの狭い幅の丸太のどこにどければ良いのか。そんなことを考えているうちに、ウルフとカービィは丸太の上で衝突した。

ドオンッ！

「うわっ！」

「ピツカア！」

「ポヨッ！」

ドゴォーーン！

『ウルフ選手、ピカチュウ選手、そしてカービィ選手！3人まとめて失格〜！』

「……ッゲホー！おいピンク丸！何で転がってきてんだよ！？巻き込まれちゃったじゃねえか！」

「ポヨッゴメンね、途中で走るの面倒臭くなって。」

エヘヘ、とカービィは申し訳なさそうに笑った。

「ここで失格とは……ふがないぞ、カービィ。」

「?……あー！メタナイト！」

カービィが上を見ると、自分達が渡っていた隣の丸太にメタナイトが立っていた。

「落ちちゃった……てへへ。」

「修業が足りないからだ。どうだ？このレースが終わったら、私が鍛えてやっても。」

「おい、何が無駄口叩いている。」

「!……ミュウツーカー……。」

メタナイトが向いた先に、腕を組んで無愛想な顔をしたミュウツーカーが立っていた。

「呑気なものだな……これはレース、つまり戦いだ。つまらない余興など要らぬ。」

ミュウツーカーは不機嫌そうに言いながら、メタナイトの乗っている丸太に足を乗せ、バランスをとることなくそのまま水平に歩いてくる。

「前から思っていたが、お前には最近甘さが。」

バキッ！

ドオーーーーーン！

『残念！メタナイト選手、ミュウツーカー選手も失格だっ！』

乗っていた丸太はハズレだったらしく、二人は落ちてボム兵の爆発に巻き込まれた。

「……………」

悔しさのあまり何も言えないミュウツーに苦笑いを浮かべたメタナイトは、ポン、と優しく肩を叩いた。

一方、リュカとトレーナーは何とかバランスを保ちながら進んでいたが、途中で足を踏み外した。

つるっ

「わあっ！」

「うわっ……！」

ドガーーン！

『リュカ選手ポケモントレーナー選手失格！このコースは失格者続出だ！』

「ケホッ……はっ！トレーナーさん！？大丈夫ですか！？」

リュカはトレーナーに呼び掛けた。彼は自ら乱闘では戦わない、つまりただの人間なのだから爆弾のダメージは自分より相当酷いのではないかという不安が頭をよぎる。

「あゝビックリした！」

だが起き上がったトレーナーは爆発のため全身が真っ黒になった以外特に目立った外傷はないようだ。

「平気ですか？どこか痛い所とか無いですか？」

「うん、僕は大丈夫……それにしても、いつもポケモン達や皆がくらってる爆弾ってこんな威力だったんだね……。」

「へ？」

予想外の発言にリュカは目を丸くした。



「いつも遠くから見てるだけだから分かんなかったんだよねえ、結構痛いねー!」

「はい、結構痛いんです!」

「……スタジアム、行こっか。」

「はい、皆で試合の行方見ましよう。」

そう言う二人は立ち上がり、トレパンの汚れをはたいた。

「わわわわわっ! 危な……っ!」

「うわわわわ! 落ちる、落ちちゃうよ!」

落ちそうになりわたたと腕を振るロイとピットを、渡り終えたマルスとアイクが応援していた。

「ロイ! ピット! 頑張れ! もうちょつとだよ!」

「……まあ、頑張れ……。」

「あゝん! 頑張れって言われても、これはちょつと厳しいよー!」

「お前が進まないとピットも進めないんだよ! 僕だけには負けたくないんだろ!? だったらさっさと歩けよ!」

「そうだよ、後ろがつかえてんだから早く行けよ!」

「……このまま進むのやめようかな……。」

「ロイしゃゝん! 頑張るでしゅ!」

「プリンちゃん……よーし! やってやる!」

プリンの声援によりやる気を出したロイは、少しずつではあるが前へと進んでいった。

「あと少し……!」

ガタッ

その時ピットは足を踏み外し、バランスを崩した。

「うわあっ!」

ガシッ

「へ?」

咄嗟にピットがつかんだものは、前にいたロイの衣服だった。

バランスを失った二人はそのまま下へと倒れこみ

チュドーーーーン!!

「あ~~~~っ!」

『惜しかったな〜! ロイ選手とピット選手、失格だぜえ〜!』

「……ピット〜!! お前なあ〜!」

「だって本当に落ちそうだったし…それにロイだって、さっき僕の羽根つかんだんだからこれでおあいこだね。」

「そういう問題じゃないだろ~~~~!!」

真っ黒になってギャーギャーと口喧嘩をする二人にマルスは苦笑いを浮かべながら『じゃあね…』と小さく言うと、アイクと共に再びコースを走っていった。

第2コース 失格者

スネーク	ガノンドロフ	デデデ大王	ウルフ
ピカチュウ	カービィ		
メタナイト	ミュウツー		
ポケモントレーナー			
リユカ	ロイ	ピット	

次に続く。

## バランス感覚って難しい（後書き）

また続きます。

キャラを沢山だすっていうのは本当に難しいですね。早くソニックを目立たせたい…………。

優勝は誰のものになるでしょう？それは次の話まで想像してみてください。では。

たまにはこんな時もある

「んぐ……プッハー！」

ポ○リスエットを飲み干したマルスは腕で口元をぐいっと拭った。

「あゝ助かったよ。お二人さん、ありがとうね。」

「いえいえ、レースに参加出来ない僕達に出来ることはこれくらいしかないのです。」

「コノ調子デ、頑張ツテグタサイ。」

給水係のオリマーとMr.ゲーム&ウォッチは深々と頭を下げた。

「さて…そろそろ行くぞ……。」

「そうだね…次はどんなコースなのかな？」

期待と不安の混ざった気持ちで二人（+プリン）は再び走り出した。

「ここが第3コース…？」

マリオは頭を傾けてもう一度看板を見る。

「『第3コース』…間違い無いよな……？」

そう言った彼の隣でフォックスは改めて前方を確認した。

そこには罠を仕掛けているどころか、何もないまっさらな地が広がっているだけであつた。

「何があるか分からんが……とりあえず行ってみるか。」

マリオがそう言うతోフォックスは頷き、コースに足を踏み入れた。

「（何もないように見えるが、気を抜かないようにしよう……。）

」

ボコッ

「!!」

その時、突然フォックスの足場が崩れた。

「うおおっ!？」

「フォックス!」

咄嗟にマリオが彼の手をつかみ、フォックスは何とか難を逃れた。

「な、何だったんだ一体……?」

二人が下を見ると、そこには深い穴が出来ていて、底の方に水が張っていた。

「落とし穴……落ちたらビショ濡れということか。」

「これは慎重にいかないとな……。」

それから二人は足下に気を配りながら、何とか第3コースを通過することが出来た。

「落とし穴か、気を付けていかんとな。」

「ここまで来たのはいいけど……あの子達、大丈夫かしら?」

サムスは後ろを向き、心配そうに言ったその時、後方からソニックと遅れてネスが走ってきた。

「Hey、お二人さん。何を立ち止まってるんだい?」

「父さん母さん、どうしたの?」

「ああ……どうやらこの先に落とし穴があるらしいんだが……どう進んでいけばいいのか。」

「……落とし穴、ねえ……。」

ソニックは顎に手を当て少し考え、ふと何かひらめいたような顔を見ると、3m程後ろに下がった。

「どいてな!」

突然彼はこちらに向かって猛然と走ってきた。

そして充分に助走をつけると、彼は勢いよく跳躍した。

落とし穴の地帯を軽々と越え、ソニックは向こう側に華麗に着地した。そして彼は振り返るとポカンと口を開けて驚いている3人にチツチツと指を振り、背を向け走り出した。

「はっ！……このままだとあの人が優勝しちゃう！」

我にかえったネスは勢いよく駆け出した。

「待ちなさいネス」

ボコッ！

「わあっ！」

ドッポーン！

『ネス選手、失格だ！』

「ネス！大丈夫か！？」

ファルコンとサムスが慌てて駆け寄り穴を覗きこむと、ビシヨ濡れになったネスが二人を見上げていた。

「へへ…何とかね…それより二人共、早く行って！」

「でも、あなたを置いていくなんて」

「今日からの食卓がかかってるんでしょ！？二人が頑張らなくてどうするの！」

ネスの気迫に圧倒され、二人は互いに頷きあい立ち上がると、コースを駆け抜けた。

「（父さん、母さん…頑張って！）」

「このコースは落とし穴か……厄介だな。」

「ここも僕でいった方がいいかな？」

シークが呟いたその時、頭の中にゼルダの声が響いた。

『シーク……ここからは私がいきます。』

「え……でも、危険じゃないか？」

『構いません、最後まで貴方にはかり頼っていられますから……』

「君がそう言うなら……ただし、あまり無茶するなよ。」

『はい』とゼルダが返事をする、シークはその姿をゼルダへと変えた。

「ゼルダ……！？」

「リンク、私も頑張りますので、エスコートよろしくお願いしますね。」

ニツコリとゼルダが微笑むと、リンクは顔を赤らめ小さく頷いた。

「じ、じゃあ行こうか……ゼルダ、俺からなるべく離れないでくれないよ。」

「はい、頼りにしています。」

リンクはゼルダの手を取ると、コース内に足を踏み入れた。

爪先で前方をつつき、土が脆くないか確かめながらリンクは慎重に進んでいく。

「順調ですね、リンク。」

「ああ、あと少し……！」

コースクリアまであと数歩の位置まで来た二人が足を踏み出した。が、その時、

ズボオッ！



「え……っ!？」

「キャアッ                   !！」

ドポーン！

迂濶にも落とし穴にはまってしまった二人は落下により跳ねた水しぶきを頭から被ってしまった。

『リンク選手、ゼルダ選手』！二人揃って落とし穴行きにより失格  
」！』

「…あゝあ…ゴメン、ゼルダ…。」

「いえ。失格と言えど、リンクは立派に頑張りました…………クシュン！」

「ゼルダ！寒いのか？」

「いえ…………大丈夫です…………。」

そう言ってみせるゼルダだが、彼女の肩は微かに震えている。それに気付いたリンクは咄嗟に自分の着ている上着を脱ぎ、ゼルダの肩に掛けた。

「リンク…………？」

「…寒いだろうと思って…………あぁっ！でも俺の服も濡れてるんだ…………ゴメン、余計なことだったね。」

そう言っ上着を取ろうとするリンクの手に、ゼルダは自分の手を優しく重ねた。

「…ゼルダ？」

「…………濡れてても…暖かいです…………。」

フワリ、と柔らかく微笑むゼルダを前に、リンクは顔を真っ赤に染め、小さくなった。

「プリゅ！第3コースに着きまちた！」

「後ろから誰も来ないってことは……残りの皆は失格したってことか。」

「……そうらしいな……。」

「……ねえアイク、どっちが先に落とし穴に落ちるか、明日のおやつを賭けない？」

「……明日は何だ……？」

「どら焼きだよ……先に落ちた人が負けで、勝者におやつを譲るの！いいかい！？」

「……とにかく……早く行くぞ……。」

アイクが呟くように言うのとマルスは『じゃ、約束ね！』と上機嫌に言い、二人同時に駆け出した。

「アイク様頑張ってください！プリンは貴方の傍らで応援していましゅゅ！」

「……出来れば、静かにしてくれ……。」

「ハイでしゅ！」

プリンは元気よく返事をする、口を閉ざした。

「（……ふう……ようやく走ることに集中できる………ん？）」

ふとアイクは視線を感じ、プリンの方を向いた。

彼女は喋りはしないものの、目をハートにして自分の方を穴が空かんなばかりに凝視している。

「（アイク様……やっぱり走る姿も最高に素敵でしゅゅー！）」

「（………集中………出来ん……）」

何とか集中したいアイクはプリンから目を反らしたまま走り続けた。が、その時、

ボコッ！

「何……っ!？」

「プリ！アイク様！」

突然足場が崩れ、アイクはプリンもろとも落とし穴の中へと落ちていった。

ザッパーーーン！

『アイク選手、プリン選手、残念ながら失格！』

「……くそ……失格か……。」

「……アイク様、ゴメンなさいでしゅ……。」

アイクがうなだれていると、プリンが泣きそうな表情で言った。

「……何故謝る……？」

「プリ……だってプリン、アイク様のためになること何にもちてないでしゅ……これじゃあプリン、ただのお邪魔虫でしゅ……。」

「……………」

不意にシュン、と落ち込むプリンの頭を、アイクの大きな手が撫でた。

「プリ……アイク様……？」

「……お前が気にすることなど何もない……俺がまだ未熟だったただ……。」

「……！……アイク様あ……！」

プリンの顔がみるみるうちに明るくなると、彼女はアイクに抱きついた。

「アイク様、やっぱり優しいお方でしゅー！それと、水で濡れたそのお姿……………キヤアゝ！色っぱいでしゅー！」

プリンが一人で勝手に暴走している一方で、アイクは溜め息をつく  
と穴の中から空を見上げた。

「（…どら焼き…食いたかったかも……。）」

「え…！アイク落ちたの？」

放送を聞いたマルスは驚くと同時にニヤリと笑った。

「ふっふっふっ！これで明日のおやつが増えた！後は僕自身がこの  
レースを優勝し、すま家一同をひれ伏させるだけ」

ズボツ！

ドッポーーーーン！

『マルス選手、最後の最後に失格だぜー！』

頭から水しぶきを被り、全身ズブ濡れになったマルスは額に幾筋もの  
青筋を立て、悔し紛れに叫んだ。

「もお~~~~~何でだよ~~~~っ!!」

第3コース 失格者

ネス リンク ゼルダ  
アイク プリン マルス

次が続く。

## たまにはこんな時もある（後書き）

レースは次の話で終わりです。その次からはまたボチボチ短編なぞやっつけていこうかと思っています。ストーリーの希望があれば評価かメツセージをご利用ください。では。

## ネバーギブアップって素晴らしい

ゴールであるスタジアムまでの道のりを走っているファルコンとサムの耳に、先程のマルス失格の放送が届いた。

「あなた…今の放送…！」

「ああ、どうやら家の子供達は全滅したらしい…すま家で残っているのは俺達だけだ。」

「そう……なら、あの子達のためにも必ず優勝しなきゃね！あなた、スパートかけるわよ！」

ファルコンは頷き、サムスと共に足の速度を上げ、スタジアムに向かって一直線に走っていく。

「よし！この調子なら」

だが、その時

ガツッ

「キャッ                   ！！！」

突然サムスが短い悲鳴を上げ、勢いよく転倒した。

「サムスー！！」

ファルコンは足を止め、サムスの元に駆け寄った。

「いたた……転んじやつたわ。」

「大丈夫か！？」

「ええ……痛っ！！」

サムスが立ち上がるうとした途端、右の足首に鈍い痛みが走った。

「…ごめんなさい、足をくじいたみたい…あなた、悪いけど私はも

う走れないから、先に行つてちょうだい……。」

「な、何を言つてるんだ!？」

「だってこのまま行つてもあなたの足手まといにしかないわ!だからあなただけでも走つて!じゃないと……失格になつたあの子達に、見せる顔がないもの……。」

俯いたサムスの肩が微かに震え、彼女はギュツと拳を握つた。

「……分かつたよ、サムス。」

ファルコンは真剣な顔付きでサムスに言うと、立ち上がった。

「……ありがとう、あなた」

「ただし、ゴールする時は二人一緒だ。」

「……え?」

突然の発言とその意味が分からないので、サムスは目をパチクリさせた。

「ぶえーくしょいつ!!」

スタジアムの観客席にマルスのくしゃみが響いた。

あの後失格になつた彼らは客席で試合を観戦することを許され、皆この場所にいるのだ。

落とし穴でズブ濡れになつた者は着替え、渡されたタオルで濡れた髪などを拭いている。

「マルス、上品の欠片もないくしゃみだね。」

ゼルダと分離したシークが静かに言った。彼は今、すま家以外の物も含まれた、ボロボロになつた大量のトレパンを直している。

「放つてよ!」ってゆーか皆ボロボロなのに何で君だけそんな涼



しい顔してるわけ!？」

「僕だってちゃんとレースには参加したよ。もしあそこでゼルダが僕と代わっていなかったら、僕だってズブ濡れになってたんだ。」

「ふゝん…何か納得出来ないけど、一応納得したってことにしておくよ。」

そう言つてマルスが隣にいるロイから盗ったポケットティッシュで鼻をかんだその時、スタジアムの歓声が大きくなった。

何事かとスクリーンを見ると、懸命に走っているマリオとフォックスが映し出されていた。

『さあ、スマブラレースもクライマックスとなりました!最後のコースはグラウンドを1000m、つまり1周したのちゴールした者が優勝となります!最初にこのスタジアムに入ってくるのは一体誰でしょうか!？』

「あつ!マリオゝ!」

「兄さゝん頑張れゝ!」

「おお!我が息子フォックス!俺のためにも頑張ってくれ!」

各自が選手に声援を送るなかで、すま家一同は画面の中にファルコンとサムスがいないことに焦りを感じていた。

「父さん…母さん…!!」

スタジアムまであと数mの地点。ここをマリオとフォックスが息を少し乱しながらもペースを落とさずに走っていた。

「ハア…ハア…もう少してスタジアムだ…!」

「ああ…マリオさん、こっからはお互い敵同士だ。言っとくが勝ち譲らねえよ!」

「こっちこそ!」

一方、二人の数m後方にはソニックが走っていた。

「（いい頃合いだ…一気に決めるか！）」

と、ソニックがスパートを掛けると、二人との距離はみるみるうちに縮まっていき、しまいには二人に追い付いた。

『何っ！？』

突然加速したソニックに驚いた彼らにソニックはチッチッと指を振ると、そのまま追い越していった。

「くそっ！……何だあいつ…滅茶苦茶速え！！」

スタジアムのグラウンドにソニックが現れると、観客の歓声がさらに大きくなった。

『おゝ！？どうやらスタジアム一番入りはソニック選手のような！』

遅れてマリオとフォックスがやって来たが、ソニックとの距離はかなり離れていた。

「どうしよう……父さんと母さんがいないよ……。」

ロイが不安そうな顔でこちらを向く。今の彼らは賞品のことより、ファルコンとサムの安否が気になっていた。

「失格の放送は流れてないし……何かあったのかな……？」

「パパとママ…お怪我でもしたのかな……。」

「…大丈夫だろ……。」

心配そうな一同に、アイクは腕を組みながら静かに言い放った。

「アイク……？」

「…二人を、信じろ。」

「！……そっか、そうだよーね！」

アイクの言葉に一同は不安そうだった表情を変え、頷いた。

「……………おおー！」

「ん？」

その時、雄叫びのような微かな声が人々の耳に入った。

「……………おおおー！」

やがてそれは段々と大きくなっていき、すま家一同は聞き覚えのあるその声に反応した。

「この声……！」

慌ててグランドの出入り口の方を見ると、待ち望んでいた存在が勢いよく入ってきた。

『……………父さん（パパ）……！』

「うおおおおーっ！！！」

凄まじい勢いでグランドを駆ける彼は、何とその背中にサムスをおぶっていた。

『おおーっと！ファルコン選手、背中にサムス選手をおぶっているにも関わらねえで何て勢いだ！速え、速すぎんぞ……！』

「うおおお～～！サムス～いるか～～！？」

「心配しないで！ちゃんとあなたの背中につかまってるわ！」

「そうか！サムスは軽いから気が付いたら落としてるなんてことがあるかも知れんと思つてな～～！！」

「まっ、あなたつたら……頑張つて！」

サムスが応援するとファルコンの速度はみるうちに上がり、烈火の勢いで前方のマリオとフォックスを追い越した。

「ええっ！？」

「俺らに追い付くだけじゃなく、そのまま追い越すとは……！！」

「~~~~~っ！！」

ロイはたまらず客席のフェンスから身を乗り出し、大きな声で叫んだ。

「父さん頑張れ～～っ！！」

彼に続きマルス達やちみっこもファルコンに向かって精一杯の声援を贈った。

「パパ～頑張つて～～！！」

「お父様、その調子です！！」

「父さん行け～～っ！！」

「むっ……うおおお！！」

ついにファルコンはトップのソニックと並んだ。

「(Wow…俺のこの足についてこれるとは……… but , It ' s i n t e r e s t i n g ! ! ) 」

ソニックはフツと微笑むとファルコンに抜かれまいと速度を落とさずに走り続けた。

『さあ、あと数mでゴールだ！優勝は一体どちらの手に！？』

「むおおおおおっ！！」

「うおおおおおっ!!」

互いに譲らない攻防が続き、観客の声援もヒートアップする。

『ファルコン!ファルコン!』

『ソニック!ソニック!』

『父さ〜〜〜ん!!』

『パパ〜〜〜〜!!』

ゴールまであとわずか。

二人は猛然と走っていく。

そして、

パン!

ゴールテープが切れたと同時に、ピストルの音が鳴り響いた。

『優勝……………』

ソニック選手〜〜!!』

『ワアア〜!』と観客席から凄まじい歓声が沸き上がった。  
ファルコンはサムスを降ろすとその場に膝をついた。

「あなた…お疲れ様。」

「父さん母さん!!」

「パパママ〜！」

と、客席から降りてきたすま家の子供達が二人に駆け寄った。ファルコンが顔を上げると、その表情はスツキリとした爽やかな笑顔だった。

「ハッハッハッ。ゴメンな、父さん負けてしまったよ。」

「……………父さ〜ん!!」

不意に、泣きべそをかいいたロイがファルコンに抱きついた。

『パパ〜!!』

彼に続きポポとナナ、そしてカービィもファルコンに飛び付いた。

「ハッハッハッ、よしよし……………どうしたロイ！お兄ちゃんが泣いたらカッコ悪いだろ!？」

「ひつぐ……………だつて、父さん頑張っただのに……………!!」

泣きじゃくるロイの頭を、ファルコンはあやすように優しく撫でた。

「…母さん。足、怪我したの？」

ふとシークがサムスの足を見て言った。

「ええ、ちよつとくじいちゃって……………」

「そこに座つて、救急箱あるから今手当てするよ。」

「…お願いするわ。」

サムスが地面に座ると、シークは手当てを始めた。

「……………父さん、怪我した母さんを放っておけなくて、おぶってきたんだろ？」

「!……………どうして分かるの？」

「分かるよ、父さんのことだもの。」

シークの言葉に、サムスは『ふふっ』と小さく笑った。

「…ファルコンと一緒にゴールしようって言ってくれた時、本当嬉しかった……………本物の夫婦じゃないけど、私のことをこんなに思ってくれてるなんてね……………」

「……………はい、終わったよ。」

シックが包帯を救急箱にしまうと、サムスは『ありがとう』と言って微笑んだ。

「Hey、そのFamily!」

一同が顔を上げると、首からタオルを下げたソニックがこちらに歩いてきた。

ファルコンは立ち上がると彼に近付いた。

「やあソニックさん!」

「Oh、『さん』はやめてくれよ。」

「失礼!ではソニック、優勝おめでとう!」

「Thanks!……ところで俺は今、You達familyに話があつてきたんだ。」

「話……?」

「Yes……俺はこのレースで優勝し、トロフィーと副賞をもらう……but、俺はその副賞をYouに差し上げたいと思う!」

『え~~~~~っ!?』

あまりのことにすま家全員が驚きの声を上げた。

「副賞つて、米5年分とその他もろもろだよ!そんな簡単に僕達にあげちゃつていいの!?」

「Of course、俺を久々に熱くさせてくれた、Mr・キャプテンファルコンだからこそ捧げたいんだ……ただし、1つ条件がある。」

「条件?」

「…今日のdinner、そちらでご馳走させてくれ。」

「…ああ、いいとも！サムスの料理は美味いぞ〜！」

「Oh！そいつは楽しみだ！」

「…副賞の米5年分をもらった…。」

「…と言うことは…。」

「これから毎朝お米が食べられる！」

『いやったあ〜〜っ！！！』

その日の夕飯はソニックさんも交えてとっても楽しい夕飯になりました。

By カービィ

終わり。



ネバーギブアップって素晴らしい（後書き）

5話にわたる長編がようやく終わりました。次からはまた何かない限り平凡（？）な日常に戻ります。では。

物を持っていくときはひと声かけて

外で時折強い風が吹く午後1時過ぎ。

いつもは絶好のお昼寝タイムであるこの時間帯だが、この日はなぜか皆、リビングに集まっていた。

しかもその中の数人がいつも身に付けているはずのものが無い。

「ねえアイク：本当に無かったの？」

マルスが尋ねると、アイクは無言で頷いた。彼の頭には鉢巻きが無く、マルスの頭にはカチューシャが無かった。

「僕とアイクが庭に出た時には、もういくつも無くなってたよ。」

そう言ったシークの顔にはいつも巻いている布が無く、トレードマーカーの帽子を被っていないネスは隣で泣いているリユカを慰めていた。

「とりあえず、それぞれ無くなったものを上げていきましょ。」

サムスは紙とペンを用意し、皆に言った。

「発表します。」

『無くなった洗濯物リスト・パパのトランクス

・ママのパワードスーツと ブラジャー

・マルスのカチューシャ

・ロイのくつ下（片方）

・アイクの鉢巻き

・ネスの帽子

・リユカの蛇のオモチャ

・シークの覆面

・ゼルダの下着、上下』……以上です。」

「こんなに物がなくなるなんて……もしかして泥棒じゃない？」

「泥棒って……まさか下着泥棒!？」

「そういえば昨日、村中の下着が盗まれる事件があったとピーチから聞きました……。」

「やっぱり！絶対その下着泥棒だよ！」

「……本当にそうかな、だったら何で下着以外の物も無くなってるんだい？」

自信満々の発言をネスに一蹴され、ロイは『ぐう……』と小さく唸った。

「そうだね、父さんのトランクスまで消えてるあたりで違うと思う

……それは別にマルス、君何でカチューシャ干してるの？普通干さないでしょ？」

「今日の朝、顔洗ってる時にすっかり水の張ってた洗面台に落としちゃって……それより！」

マルスはパンツとテーブルを叩き、身を乗り出した。

「下着泥棒だろうが何だろうが知らないけど、我が家の大事な衣類が盗まれたんだよ!？特に女性は下着を盗まれるという屈辱極まりない思いをしている！」

「……そうだ、ゼルダだって被害にあってるんだ!！」

「母さんの下着（+パワードスーツ）を盗むなんて……そんな破廉恥な奴は俺が取っ捕まえて懲らしめてやる!！」

燃え盛る炎をバツクに怒りとやる気に燃えるリンクとファルコンにサムスは『まあ、頼もしいわ。』と笑顔で言った。

「でも、泥棒を捕まえるってどうやって……?？」

「……僕にいい考えがあるよ。」

キラーンと、マルスの目が一瞬怪しく光ったのをアイクは見逃さなかった。

「……よし、トラップ完成！」

ふう、とマルスは額を伝う汗を腕で拭う。

彼の目線の先には洗濯物を干す物干しがあり、その周りを囲むようにセンサー爆弾が地面に埋められていた。

「あとは泥棒を誘いこむ餌だね……母さん！」

マルスがサムスと呼ぶと、『ハイハイ』と返事をした彼女は家から持ってきたある物を洗濯バサミに挟み、吊した。

『ある物』。それは何と、一枚のサムスのパンティだった。

「こんなの餌にして、泥棒来るかしら……？」

「大丈夫！母さんナイスバティだし。」

「そうだぞ！母さんは村でも評判の美人だからな！そんな母さんの下着だ、泥棒だって寄ってくるさ！」

「まっ、あな た っ たら」

「ハハ……じゃ、後は家の中に入って、そこから見張ろう。」

リンクが言つと、一同はゾロゾロと家の中へ戻った。

「さて……監視してるこの時間って結構ヒマだね。」

「そうだねえ……」

一同が床に寝転んでうだうだしていると、『おやつだよ』とリンクが桜もちを乗せた盆を持ってリビングに入ってきた。

「今日は道明寺にしてみたから、いつもと少し違うよ。」

「わーい美味しそー！」

マルス達は桜もちを早速手に取り、口に入れる。

「……ん、美味しい。」

「はうー！このあんこの控えめな甘さがちょうど良くておいしーで

す」

「そう？よかった……ところで泥棒いつ来るかな？」

「ああそうだった、桜もちの旨さで忘れかけてたよ。」

「案外すぐに来たりしてね。」

「すぐって、例えばどのくらい？」

「……5秒後……。」

ボソリと呟いたアイクの発言を一同は声を立てて笑った。

「アイク、それは無茶だろう？」

「そうだよ、それはいくら何でも早すぎ」

」

チュドーーーーンッ！！

その時、トラップの場所から大きな爆音が響いた。

「えっ！？な、何！？」

驚いて外を見ると、物干しの下にサムスのパワードスーツがあり、その隣に黒焦げになった誰かが倒れている。

「すごいねアイク！本当に5秒後に来たよ、君って予言出来るの！？」

「馬鹿……いいから庭に出るぞ……！！」

一同は慌てて庭に出ると、強い風の吹くなか物干しの方へと近付いていく。

「！……ねえ、この人！」

「え？　　ああっ！！」

一同は見覚えのあるその顔に驚きの声を上げた。

『ス…スネークさん!?!』

「…何でこの人、ここにいるの…?」

「しかも、側には盗まれたはずのパワードスーツ……。」

『……………。』

皆が啞然としていると、黒焦げのスネークが唸りながら身を起こした。

「うゝん…イタタ…何が起こったんだ…お?」

スネークは今自分が周囲に軽蔑の眼差しを受けていることに気付いた。

「や、やあ皆さんこんにちは…どうしたんだ?」

「どうしたもこうしたも無えよこの下着泥棒!!」

「は!?!下着泥棒!?!誰が!?!」

「お前の事だよこの下着泥棒!!人ん家の庭でコソコソして、怪しさ100%だよ!!」

「スネーク…俺はお前の友として恥ずかしいぞ!!」

「見損なったわスネークさん、あなたがそんな人だったなんて…

!!」

「いや違う!!俺は何も盗んでいない!!」

「じゃあそのパワードスーツはどう説明するんだよ!?!」

「これはだな…その…不発弾を取り除こうと思って少々拝借したんだ!」

「不発弾……?」

スネークを責めたてるのを休止すると、彼は事の成り立ちを説明し始めた。

「実は昨日の乱闘でサムスの腰にチューインボムをつけたんだ。しかしそれはいつまで経っても爆発しないで、試合終了後もサムスにくつついたままだった。本人も気付かないし、仕方なく取るうと手を伸ばしたら、誤って彼女のナイスなヒップに手が触れてしまった……。」

『痴漢!!』

「サムスもそう叫んだよ、そして俺は彼女の右ストレートを見事に喰らった……わざとじゃないのに……。」

「あ……そういうことだったんですか……殴っちゃってごめんなさい。」

「いや、分かってくればいいんだ……それで心配になって来てみたらちょうどスーツが干してあつて、爆弾を確認しようとしたら人の気配を感じ、思わずスーツを持って隠れてしまったよ。」

「……なぜ隠れる必要がある？」

「いやあ、軍人としての本能が働いてしまつてね……。」

「爆弾つて……母さん気付かなかつたの？」

「やけに落ちない染みだと思つたら、爆弾だったのね。」

「安心してくれ、爆弾はもう取つたよ。」

「まあ、ありがとう。」

「ちょっと待つて！スネークさんはママのスーツしか持つていつてないんだよね？」

「ああ、俺が見たときにはスーツしか干していなかったぞ？」

「じゃあさ……僕らの衣類はどこにいったんだ？」

『……………!!』

ロイの発言により全員の顔が強ばり、その場に張りつめた空気が流れる。

その時、

「こんにちは。」

「？」

穏やかな声が沈黙を破り、一同が振り返ると、大きめの紙袋を片手に持ったポケモントレーナーがこちらに歩いてきた。

「あつ！トレーナーさん！」

リユカが駆け足で近付くとトレーナーは笑顔で彼の頭を撫でる。

「おおっ！我が息子よ！」

「父さん……って、何で黒焦げなの？」

「まあ、その……いろいろあつたんだよ。」

ハハハ、と乾いた声で笑うスネークにトレーナーは不思議そうな顔をした。

「変な父さん……そうだ、今日は皆さんにこれを届けに来たんです。」

「  
そう言うとトレーナーは持っていた紙袋を差し出した。

「？何これ？」

受け取ったマルスが袋の中をあさると、パアツと表情が明るくなった。

「どしたの？マルス。」

「あつた！僕のカチューシャあつた！！！」

袋からカチューシャを取り出し、マルスはそれを見せつけるように掲げて見せる。

「他には何が……あつ！僕のくつした！」

「俺の鉢巻き……。」



「僕のおもちゃ〜！」

「おおっ！俺の愛用トランクス！」

それぞれが歓喜の声を上げる中、覆面を取り出したシークがトレーナーに尋ねた。

「これは一体、どういうことかな？」

「それがさつき庭を見たら皆さんの衣類が散らばってたんです。ほら、今日風強いじゃないですか？もしかして家まで飛ばされたんじゃないでしょうか？」

「……………成程、そういうことか。」

「あら？でも私のブラが無いわ。」

「私の下着もです……………」

「そうなんですか？庭にあつたものは全部拾ったんですけど……………」  
その時『あ。』とネスが声を上げ、ある方向を指差した。

その先には、大きなリュックサックを背負ったワリオがスキップですま家の前を通過していった。彼のリュックは見るからにパンパンで、開いたチャックの隙間から女性もの下着がはみ出ている。

「……………どうやら本当の敵はあいつみたいだな……………」

「ゼルダに恥ずかしい思いさせやがって……………！！！」

怒りのオーラを纏うファルコンとリンクはポキポキと拳を鳴らすと、  
ダッ！とワリオの向かった方へ猛然と走っていった。

「…さ、後はあの二人に任せておいて、スネークさんとトレーナー

君、よかつたら上がっていかない？」

「え？いいんですか？」

「もちろん、おいしい桜もちあるからさ。」

「おおっ！それは是非！」

「父さんつたら…少しは遠慮しないと…。」

スネークをたしなめるトレーナーの服の裾をリュカが引つ張った。

「トレーナーさん、上がってってください！」

「……うん、分かった。じゃあ邪魔します。」

「ハ―イ2名様ご案内」

マルスが二人を連れて玄関に向かうと、少し遅れて残りの皆も玄関まで歩いていった。

1時間後、ファルコンとリンクがおそらくワリオのものであろう返り血を浴びた顔でサムスとゼルダの下着を持って戻ってきた。

「ハイ母さん。」

「ありがとう、あなた！」

「ハイ、ゼルダ。」

「……リンク、なぜ私の下着だけ袋に入っているんですか？」

「え！？それは……その…。」

（ゼルダの下着……俺さっき見ただけで鼻血吹き出したからな……それを触るだなんて、昇天しちゃうよー！！）

体は大人なのにまだまだ青いリンクでした。

終わり。

物を持っていくときはひと声かけて（後書き）

かなり爆発したストーリーになりました。

ところで皆さん

んからお預かりしたアイデアは今、構図を練っています。答えられるものは答えるので、どしどしリクエストください。では。

## 男と女は根本的にいろいろ違う

すま家のリビング。

アイクの寝息が響く中、煎餅をかじるピットの隣で床に寝そべって雑誌を読んでいたロイはふと顔を起こし、壁に掛けてある時計を見た。

「あ、もうこんな時間なんだ。」

「もうすぐで歌番はいるよね。」

「おおそうだ！今日はプリンちゃんが出るんだよね。」

ロイは起き上がると寝ているアイクを跨ぎ、テーブルに乗っているリモコンを手にとるとテレビをつけ、チャンネルを替えてしばらく待つと、歌番のオープニング曲が流れ司会者とアーティスト達が現れた。

「ああっプリンちゃんだ！！はうっやっぱいつ見ても可愛いな。」

「…アイドルオタク…。」

「…ピットくん、今何が言ってた？」

「な〜んにも。」

ガチャ

「ただいま。」

「ただいま帰りました。」

「ただいま……。」

その時、乱闘から帰ってきたゼルダとマルス、シークの声が玄関から聞こえた。

「おかえりなさ……ん？」

二人の声を聞いた途端、ピットは自分の耳を疑った。

「（あれ…？今、ゼルダさんが『ただいま』って…んでマルスが『ただいま帰りました』……………？）」

三人はリビングに入るとテーブルの前に腰掛けた。

「あゝ今日の乱闘疲れたゝ、この僕がボロ負けするなんて…。」

「やはりマリオさんはお強いですからね、私も敵いませんでした。」

「！？　！？」

ゼルダなのに口調はマルス、マルスなのに口調はゼルダ。

やはりいつもと口調が違う二人にピットは目を丸くし、テレビに夢中だったロイもマルスとゼルダの様子の変化に気付き驚愕の表情で二人を見た。

「…ねえ…………君達、どうしたの…………！？」

「…………分かりやすく言うところ…中身が入れ替わったんだよ。」

ロイの問いに答えたシークは近くの煎餅を取り、それを小さく割って口の中に入れた。

「成程…………乱闘でモンスターボールを投げたらマナフィが出て、それで入れ替わっちゃったわけ…。」

ピットに起こされ眠たげに目を擦るアイクの隣で、ロイは説明されたことを繰り返すと、二人はコクリと頷いた。

「でもさ、それって一定の時間に戻るもんじゃないの？」

「それがさあ、いつまでたっても戻らないんだよ。んでマリ…Dr・マリオに聞いてみたら、『明日になれば治るでしょう』だってさ。本当かな？」

そう言っであぐらをかいたゼルダ（マルス）は煎餅を一枚取り、大口を開けてかじりつく。

「おいマルス…君は今ゼルダの姿なんだからさ、もう少しおしとや

かにしてよ……でないと僕の中のゼルダのイメージが壊れる…。」

「はあ？何でさ？今の僕は体がゼルダだけで中身は高貴なマルス様なんだから。それにロイ、君いつから僕に命令できる立場になったの？」

ゼルダ（マルス）は見下すような目でロイを見るとフン、と鼻を鳴らした。

「（…中身がマルスとはいえ、こんな偉そうなゼルダ初めて見た…。）」

そんな彼（彼女？）の隣ではマルス（ゼルダ）がにこやかに紅茶を飲んでいる。

「フフ…鏡を見ずに自分の姿を見るとするのは、何だか不思議ですね。」

普段見ることのないマルスのふんわりとした笑顔に、一同は目を丸くした。

「（…何か…こっちはこっちですごく新鮮…。）」

「でもどうする？母さん達に何て言おうか。」

「明日で治るんだったら別に言う必要無いと思うな。僕面倒事嫌いだし。」

ゼルダ（マルス）はそう言うのと片手で湯のみを持ち、ぬるくなった茶を一気に煽った。

「…いい加減だな、お前…。」

「あゝ！！だからイメージが壊れるって…！」

「…こんなゼルダの姿、リンクが見たら何て言うかな…？」

その時、『ただいまー！』と玄関から元気なちみっこ達の声と足音が聞こえた。

「コラあんた達！帰ったら靴は揃える決まりでしょー！」

続いてサムスの声とちみっこ達の『後でやるー！』と言う声が廊下に響き、しばらくするとリビングの扉から買い物袋を持ったリンクとサムスが顔を出した。

「ただいまー。」

「おかえり〜。ねえママ、今日のご飯何？」

「今日はねえ、ひき肉が安かったからハンバーグよ。」

『わ〜いハンバーグだ〜!』

ロイとピットが喜ぶ隣で、アイクがボソリと『肉…』と言ったのを  
シークは聞いたとか。

「他にも付け合わせのポテトサラダ作るから……ねえゼルダ、お夕  
飯の支度手伝ってちょうだい。」

「えゝ!?! 無理だよ料理なんて出来ないし!!」

ゼルダ（マルス）が声を上げると、サムスとリンクは驚いた顔にな  
った。

「（え? しまった!!今の僕はゼルダなのに……!!）」

「どうしたのゼルダ……料理出来ないって、いつも手伝ってるじゃ  
ない……?」

「え……ええと……。」

「じゃあ私 僕が手伝います。」

マルス（ゼルダ）が二人に言うと、サムスとリンクは更に驚いた顔  
になった。

「珍しいわね…マルスが自分から手伝うなんて…。」

「今日ゼルダは体調が悪いんです。だから僕が代わりにやります。」

「ええっ!!ゼルダ、大丈夫なのか!?!」

リンクが心配そうに問うとゼルダ（マルス）は『ええ、大丈夫だわ  
よ…』とおかしな女言葉で返した。

「では、早速台所に行きましょう。」

「う…うん、そうだね……（何かマルスの喋り方、ゼルダみたい…  
……。）」

「あらそう……じゃあゼルダ、具合が悪いなら先にお風呂入っちゃ  
いなさい。もう沸いてるから。」

「は、はい母さ……お母様。」

マルス（ゼルダ）は立ち上がると、二人と共に台所へと向かってい  
った。



「……………はあ~~~~」。」

静かになったリビングに、アイクとシークを除く全員の溜め息が響く。

「一時はどうなるかと思ったよ…………。」

「マルス、やっぱり正直に言った方が…………。」

「大丈夫だって！明日には治るんだからさ、じゃあ僕お風呂行ってくるね。」

そう言っているとゼルダ（マルス）は立ち上がり、風呂場へと向かった。

次に続く。

## 男と女は根本的にいろいろ違う（後書き）

かなり暴走した話になりました。次からはリンクが暴走します。ご期待ください。

## 入る時はノックして

「……何か、面倒なことになったよねえ。」

「それはそうとロイ、今の時間始まるバラエティ番組にプリンちゃん出るよ。」

「え！マジ！？」

ロイは急いでテレビのチャンネルを変えると、ちょうど今始まった番組のゲストの中でプリンが司会者に笑顔を向けている所であった。「プリンちゃん！やっぱいつ見てもプリティーだよー！」

テレビの前で再び騒ぎだすロイの後ろでアイクは大きく欠伸し、もう一眠りするべく床に寝転んだ。ピットは先程までロイが読んでいた雑誌をソファーに寝そべって読んでいる。

「（さて…僕は夕飯まで縫い物でもしようかな……。）」

裁縫道具を取りにいくこうとシークが立ち上がった瞬間、『シークー！』と自分と呼ぶゼルダ（マルス）の声が耳に入った。

「……………」

シークはリビングを出て風呂場の前に立つと、ガラリと引き戸が開けられた。

そこにはまだドレスを着たままのゼルダ（マルス）が立っている。

「マルス、何か用」

「ちょっと来て。」

ゼルダ（マルス）はシークの腕をつかみ、引き入れると戸を閉めた。

「どうかしたの？」

「シーク……………」

僕の服、脱がして。」

「……………は？」

突然のことに驚いたシークは思わず聞き返す。

「あつ誤解しないで、変な意味じゃないから…今から僕は風呂に入ろうと思うのだが、このドレスの脱ぎ方が分からない。だから被服に詳しい君なら脱がせ方くらい分かるだろうと思つてね。だから脱がして。」

「…却下、自分で努力して。それじゃ。」

冷たく言い放ち脱衣所から出ようとするシークを『ちょっと待てえ！』とゼルダ（マルス）は彼の腕をつかんで引き止める。

「マルス…放してくれないかな？」

「マジで脱ぎ方分かんないんだよ！このままじゃ一生風呂入れないよ！」

「君、分かつてるだろ…その体はゼルダなんだぞ。女性の服を脱がすだなんて、僕は変態じゃないからそんなことしたくないね。」

「……………うっ！じゃあどうすりゃいいのさ！？」

「あ、手っ取り早い方法があるよ、ちよつと待つてて。」

そう言うときシークは脱衣所を出て食堂に向かい、皿を並べているリンクとマルス（ゼルダ）を見つけ、声をかける。

「いた、ねえぜ…………マルス。」

「?…………シーク、どうかしました？」

「ゼルダが呼んでる、至急脱衣所まで来てだつてさ。」

ピクリ、とゼルダの名前に反応したリンクの隣でマルス（ゼルダ）は不思議そうな顔をした。

「何でしょう……？ 今行きます。リンク、すぐ戻ってきますね。」

「あ……ああ……。」

少し駆け足で脱衣所に向かうマルス（ゼルダ）を見送り、リビングに戻るうとするシークの腕をガシリとリンクにつかまれた。

「（……今日はよく引き止められる日だな……）……何？ リンク。」

「……ゼルダの用事って、何？」

「……どうしてそんなこと聞くんだい？」

「いや……マルスに脱衣所で用事って何かな……って思っただけ……ねえ、用事って何なの？」

「……今、君の想像しているようなこと。」

「っ！？」

その途端リンクの顔は真っ赤になり、シークの腕をつかむ手に力がかもる。

「……リンク、痛いよ。」

「え……あっ！ ゴメン……！」

慌ててリンクは手を放すと、シークは顔色一つ変えずにリンクを見据える。

「全く……冗談だったのに……。」

「え……？」

「そんなに必死になるなんて……君一体どんな想像してたんだい？」

「ええっ……！！ 別に、やらしい事なんか想像してないから……！」

真っ赤になりながらあたふたとするリンクをシークはクスクスと笑いながら見ている。

「ま、あの二人が何してるか気になるなら自分で見てきなよ。僕はリビングに戻るから。」

背を向けリビングへと戻るシークを、リンクは呆然とした表情で見

送っていた。

「（ハッ……！ほ、本当にやらしい想像なんか……でも、何してるかは少し気になるな……よし！）」

リンクは意を決すると、風呂場に向かって歩き出した。

風呂場に近付くにつれ足音を立てないように忍び足になり、戸の前で聞き耳を立てると、中からマルスとゼルダの会話が聞こえる。

『キャハハ！くすぐつたいよ！』

『ああっ！動かないで……！』

「！？（な……何をしてるんだ……！？）」

『んー……脱ぎにくい……。』

『もう、ジッとしててください……。』

「（……まさか、本当にやらしい事を……！？）」

こらえきれなくなったリンクは引き戸に手をかけ、勢いよく開けた。

『……！』

その時リンクの目に飛び込んできたのは、マルスがゼルダのドレスの上部分を脱がしている光景だった。

ゼルダのはだけた服の間からは彼女の白い肌とふくよかな胸を包むブラジャーが覗いている。

「な……なな……！？」

「げっ……リンク……！！」

「あっリンク、これはですね……………」

「っいやああああ………っ！！！！！！」

「どうしたリンク……」

「リンクさん……どうしたんですか……」

「リンク兄ちゃん……どしたの……」

「どうしたの！？何かあったの……」

リンクの悲鳴は家中に響き、何事かと皆が風呂場に集まってきた。

「………キャアッ！！アンタ達何やってるの……」

リンクと同様顔を赤く染めたサムスは両手で目を覆った。

「あっ！あのね母さんこれは……」

「マルス……何してるんだよ……」

「うひゃああ……っ！！破廉恥です……！！」

唖然とするネスの後ろで、リュカが真っ赤な顔で隠れている。

「ああっ！ーネスとリュカまで！」

「皆さんどうか落ち着いてください！」

「うわああ~~~~んっ！！ゼルダが~~~~！！！」

号泣するリンクの声をバックに一同が騒然とする中、二人が入れ替わったことを知る4人は呆然としていた。

「ど……どうしよう……？」

「……だから言えと言ったのに……。」

「あわわ、リンクさんが……。」

「こうなった以上、何も出来ないね……。」

ギヤーギヤーと喧騒に混じり、玄関から帰ってきたファルコンの『ただいまー！』という声が聞こえた。

「全く……そういうことなら早く言いなさい！変な勘違いしちゃったでしょ！」

入れ替わったことを話した後、サムスの説教にゼルダ（マルス）はシユン、とうなだれる。

「ごめんなさいリンク……貴方にも言うておくべきでしたね……。」

「いや、俺はもう立ち直ったから……それよりゼルダ、早く治ってくれよ。」

ポン、とリンクがマルス（ゼルダ）の頭に優しく手を乗せると、マルス（ゼルダ）は『はい……』と小さく返事をした。

「それにしても母さん、やけに過敏に反応してたよね、どうして？」



「当たり前でしょ！あんな事、私だってまだファルコンとやってな

」

そこまで言っているとサムスはハッと自分が何を言おうとしていたかに気づき、頬を赤くして小さくなった。

「……………とにかく、次からは何かあったらお父さんかお母さんに言うこと。分かった？」

サムスが言っていると、一同は『はい！』と元気よく返事をした。

次の日、二人はちゃんと元に戻ったそうなの。

終わり。

入る時はノックして（後書き）

前に続きさらに暴走させました。リンクが可哀想…（汗）  
さて、次もこの調子で頑張っていきます。

## 兄弟っていいもんだ

午後10時。

すっかり暗くなったすま村を月の光が照らす中、すま家では寝間着姿の一同がリビングに集まり、テレビを見ている。

『始めは気のせいだと思っていました……でも、ガタガタと風もないのに窓が動いたり、人の気配を感じたり……そしてある日……私が金縛りにあつて、思いきつて目を開けたらそこには  
！！』

『ぎいやあああ~~~~っ!!』

突然上がった悲鳴に一同は驚き、ビクリと跳ね上がった。

「おいロイ驚かすなよ！心臓に悪いだろ！！」

「だって怖かったんだもん！ピットは怖くないのかよ！！？」

「僕は別に何ともないよ。」

「全く、ロイってばあの程度で怖がるなんて本当に子供なんだから。」

「

「……マルス、君さっき一緒になつて悲鳴上げてたよね？」

「え！？し……知らないよ！ねえアイク！？」

「……すまん、今まで寝てたから分かん……。」

「ちよつとおっつ！！」

ギャーギャーと騒ぐマルス達に『夜なんだから静かにしなさい！』とサムスが怒鳴った。

「ハッハッハッ！家の子達はいつでも元気だな……お？もうこんな時間か。お前達、もうそろそろ寝なさい。」

ファルコンが言々と子供達は『はい』と返事をした。

「さて…俺達も寝るか。」

「そうね……ん？」

ファルコンがテレビを消したのと同時にポポとナナ、カービイが困った表情で二人の所に来た。

「どうしたの？」

「パパ…ママ…、怖いから一緒に寝て…！」

「ナナ怖くて真夜中おトイレ一人で行けない…！」

「ポヨ…僕も…！」

ちみつこ3人にせがまれ、ファルコンは『分かった分かった』と頷く。

「ネス達はいいの？」

「僕達なら大丈夫だよ。」

「僕も大丈夫です。」

「僕も全然怖くなかったよ。」

「そう…でも怖くなったら私達の部屋に来てもいいのよ？」

サムスが優しく言々とネス、リユカ、ピットの3人は『ハイ』と返事をした。

「リンク……ちょっとよろしいですか…？」

「ゼルダ、どうしたの？」

「あの……私の部屋の前まで付いてきてほしいんです……ちょっと怖くて。」

ゼルダが恥ずかしそうに言々とリンクは目を丸くした後、ニコリと微笑んだ。

「分かったよ。」

「…ついでにゼルダが寝るまで、添い寝でもするかい？」

「んなっ…!!……シーク…!!」

頬を染め両腕を振り上げて怒るリンクをシークはクスクスと笑いながら見ている。

「マルス、怖かったら部屋まで付いて行ってあげようか？」

「それはこっちの台詞だよ？」

「…部屋に戻る…」

睨みあう二人の間をすり抜けようとすると、ガシッと両腕をつかまれる。

「……………」

アイクが見ると、自分の右腕をマルスに、左腕をロイにガツシリとつかまれているではないか。

「…何をしている…？」

「え？…あぁっゴメンね僕ったらつい…！」

そう言いつつもマルスは手を放す様子もない。

「やっぱりマルス怖いんじゃない！アイクに付いてきてもらおうって魂胆だね？」

「なっ！そう言うロイだって放したらどうなのさ！アイクが困ってるだろ！？」

「…いいから放せ…！」

アイクは二人の手を振りほどき、スタスタと階段へと歩いていった。

11時過ぎ、アイクの部屋。

ベッドに備え付けてある小さなライトの明かりがボンヤリと部屋を照らし、カチカチと時計の針の音が響く。

アイクが腹から下を布団に潜らせ雑誌を読んでいると、コンコンと

扉を叩く音が聞こえた。

「……誰だ？」

ガチャリとドアが開くと、そこには自分用の枕を持ったロイが立っている。

「……ロイ……？」

「へへっ、こんばんわ……。」

ロイは部屋に入るとドアを閉め、アイクのいるベッドに歩み寄り腰掛ける。

「……どうした……？」

「いやあ、非常に恥ずかしいんだけど……一緒に寝させて」

手を合わせてウインクするロイに、ハア……とアイクは溜め息をつきロイに向かって言い放った。

「………悪いが、先客がいるぞ。」

「え？」

その瞬間、突然アイクの布団がモゴモゴと動いたかと思うと、ヒョコリとマルスが亀の様に頭を出した。

「ふう、苦しかった。」

「あゝっ……マルス……！」

「やあロイ。」

「何してんの……？」

「アイクの部屋にお泊まり」

「……やっぱり怖くて来たんだ。」

「君だって同じだろ。ま、とにかく先に来たのは僕だ。ベッドが狭くなるから君は帰りなよ。」

「な、何だよそれ……！」

「この僕に文句を言うのかい？」

ロイが身を乗り出すとマルスも起き上がり、アイクの目の前でバチ

バチと火花を散らせる。

「……………」

その間にアイクはベッドにボスンと寝転がり、電気を消した。

「あれ？アイクもう寝ちゃうの？」

「……もう寝る時間だ、お前らも寝ろ……。」

『……はい。』

マルスとロイは渋々頷くと枕を置いて布団に入る。

「狭い……………」

「狭いね……ロイ、もう少しそっち行つてよ。」

「無理、落ちちゃうよ。これで精一杯。」

大した大きさもないベッドに3人はギウギウ詰め状態で、特に真ん中のアイクは左右に挟まれ窮屈な思いをしている。

不意に左側のマルスがピトリとアイクにくっついた。

「……………何だ……？」

「エへへ……アイク、温かい……………」

「どれどれ……………おお！温けえ！」

「……お前ら……俺は湯たんぼではない……………」

「ん、もう少しこうさせて……………」

左右から引っ付かれ眠れないアイクが途方に暮れていると、右側からロイの寝息が聞こえてきた。

「ロイ、寝たみたいだね……………」

「……………お前も早く寝ろ……………」

「……ねえアイク……………兄弟っていいよね……………」

「……何を唐突に……………」

「僕ね……元いた世界で男の兄弟いなかったんだ……………でね、こっちに来てからロイとアイクに会って、こうして皆一緒に暮らしてさ……………」

すごく楽しいんだ……」

「……………」

アイクは返事を返さなかったがマルスはそのまま話し続ける。

「正直な気持ちね……このままこの世界にいたいって思ってるんだ

……元の世界に帰りたくないって言うって嘘になるけど……この毎日の楽しい時間を、もっと過ごしたいんだ……」

「……………」

「……もう寝ちゃったかな、じゃあ僕も寝るね……………おやすみ

……………」

しばらくしてマルスの寝息が聴こえた頃、アイクはまだ起きていた。

「（…馬鹿王子があんなことを考えているとは…………『兄弟』か…

…。）」

二人と出会ったあの日、妹がいる自分にとっても男兄弟は初めてであり、無表情を装いつつも内心はマルスと同じく、嬉しい気持ちが強かった。

アイクは自分の左右隣で眠る二人の弟の顔を見ると、フツと穏やかな笑みを浮かべた。

「（…このクセのある奴らとの生活も、なかなかいいものだな……

…。）」

ボスンと枕に頭を寄せ、アイクは瞼を閉じた。



おまけ。

バキッ

「……………！」

ドカツ

「……………！！」

ロイに腹を蹴られマルスに頬を殴られ、痛む箇所を押さえたアイクは起き上がり健やかに寝ている二人を憤怒の形相で睨みつけた。

「（やっぱり…良くない……！！）」

終わり。

## 兄弟っていいもんだ（後書き）

メインのFE3兄弟の話を書きました。この3人は人気があるので今後も活躍させていきたいと思っています。

それはまるで若夫婦のようで

よく晴れた今日のすま村。

買い物客で賑わう市場をゼルダは買い物かごを片手に歩いている。

彼女が八百屋の前で足を止めると、店主は『いらっしやい!』と笑顔を向けた。

「やあゼルダちゃん、相変わらずべっぴんさんだねえ〜!」

「いえそんな……。」

「ハハハ!で、今日は何にするんだい?いい品が沢山入ってるよ?」

「そうですねえ……では、そのほうれん草と手前のレタスをくださいます?」

「……ほお?さすがだねえ、一番新鮮なこの2つを選んだよ……はい、特別大サービスで250円にしとくよ!」

「え……っ!?」

あまりの値段の安さにゼルダは目を丸くする。

「それでは安すぎて何だか申し訳ないです……。」

「そんなこたあない!すまさん家はいつもうちの野菜を買ってってくれるからね。あとはゼルダちゃんの可愛さに免じて」

「そんな……でも、ありがとうございます。」

ゼルダは店主にお金を払い品物を受け取ると、会釈をして店を後にした。

「(さて、次は……。)」

「ゼルダー!」

「……?」

不意に名前を呼ばれ振り向くと、日傘をさしたピーチと買い物袋を

持ったマリオがこちらに歩いてきた。

「あらピーチ、それにマリオさんも。」

「やあゼルダ！」

「こんにちは、あなたも買い物？」

「ええ、ピーチはマリオさんと二人で？」

「そうよ、今日のお夕飯の買い出し」

「今日は僕の大好きなキノコ料理だ」

『ヒャッホウ！』と子供のようににはしゃぐマリオをピーチはクスクスと笑いながら見ている。

「マリオったら…じゃあゼルダ、私達はこれで。近いうちにお茶しましょう？」

「ええ、ではまた。」

ピーチとマリオは背を向けると何か楽しそうに話しながら歩いていった。

「（…あの二人、とっても仲がいいですね…。）」

その幸せそうな後ろ姿を見送りながらゼルダは心の中で呟くと、買い物を再会した。

「（ふう…少し買い過ぎました…。）」

重くなった買い物袋を両手で持ち、ゼルダは一人夕暮れの道を歩いていると、『ゼルダー！』と聞き慣れた声に呼び止められた。

振り返ると、リンクがこちらに手を振りながら走ってくる。

「リンク…今日の乱闘、どうでしたか？」

「聞いてくれよゼルダ！俺1位になったんだ！」

「まあ、すごい！見に行きたかったです！」

「ゼルダにも見せたかったよ！まず俺がフォックスと戦って……」

「  
熱の冷めないリンクが試合の状況を熱弁している時、ゼルダは彼の頬に小さな傷があることに気付いた。その箇所からは微かに血が流れている。」

ゼルダはハンカチを取り出すと、リンクに接近する。

「それでねえ　　って、うわあっ！」

突然ゼルダとの距離が狭まったことにリンクは驚き声を上げた。

「ぜ、ゼルダ……どうしたの？」

「……血が、出てます。」

そう言っているとゼルダはそのハンカチでリンクの頬を優しく撫で、血を拭った。

ピリッとした小さな痛みの後に、撫でられる心地よさを感じる。

「あ……ありがとう。」

「……リンク。」

「……？」

「貴方が試合で勝つのは嬉しいですけど、怪我するのは悲しいです。だから……気を付けてくださいね。」

ゼルダが優しく言っていると、リンクは薄く頬を染め『うん……』と頷いた。

「さ、帰りましょうか。」

「……そうだね。」

二人は互いの顔を見て笑うと、再び歩き出した。

夕日に染まった二人の後ろ姿はあの時のピーチとマリオにも負けな

い、幸せそうな後ろ姿であった。

終わり。

それはまるで若夫婦のようで（後書き）

サイトから移転してきた作品です。この二人を書くのは本当に楽しいです。

## 花見といえば団子と酒

すま村の中心部にある、その名も『すま公園』。

ポカポカ陽気の中、公園に植えられている沢山の桜の木が一斉に花を咲かせ、薄紅色の花びらを雪のように舞い散らせている。

そんな今日、すま家を始め多くの人々がビニールシートの上に各自弁当や飲み物を広げ、花見に来ていた。

「綺麗だなあ……。」

「本当だね……。」

「ハイラルに桜はありませんからね……この淡い桃色の花がとても可愛らしいです……。」

ヒラリ、と舞い落ちてきた花びらを手に乗せ、それを慈しむように見つめるゼルダの表情にリンクの胸はドキリと跳ねた。

「……ゼルダは桜より綺麗だ、とか思っただろ？」

「んな……っ!!」

「君って単純だからね、何を考えてるかなんてすぐ分かるよ。」

「~~~~~~~~っ!!」

シークにからかわれ何も言い返せないリンクは顔を真っ赤にし、そんな二人の様子をゼルダは不思議そうな顔で見ていた。

ちみっこ達が向こうにある遊具で遊び、大人達が酒を飲みながら時折上げる大きな笑い声をバックに、マルス達は桜の木を見上げてい



た。

「綺麗だねえ〜…。」

「そうだねえ〜…。」

「……………」

マルスとロイはリンクお手製の花見団子を食べ、アイクはというと団子は団子でも肉団子をむさぼっている。

「このポカポカ陽気も、美しい桜も、向こうで赤くなってるリンクも、春を感じさせる風物詩だねえ〜……………」

「そうだねえ〜……………」

「(…三つ目はどうだろう…というかロイは否定すらないのか…?)」

その時クーラーボックスの中を見ていたサムスが『あっ!』と声を上げた。

「どしたの? 母さん。」

「それがね、パパ達のお酒ばかり持ってきてて、子供達が飲むジュース買ってくるの忘れてたのよ〜!」

「ありゃ、母さんうつかりしてたね。」

「そうなのよ〜! で今から買いに行くからリンクにシーク、ゼルダも3人でちょっと付いてきてちょうだい。荷物が多くなりそうだから。」

「うん、分かったよ。」

リンク達は立ち上がると履物を履きサムスと共にその場を後にした。

「母さんも大変だね〜……………ん?」

ふとロイは後ろを向くと、先程サムスがあさっていたクーラーボックスから今度はマルスがゴソゴソと何かを取り出している姿が目に入った。

「マルス、何してんの?」

するとマルスは『トロピカルチューハイ』と書かれた缶を取り出し、その口を開けようとプルタブに指を引っ掛ける。

「！……おい、それお酒だよ……！？」

「うん、知ってるよ。」

「お酒は二十歳までダメなんだぞ！昔親に教えてもらわなかったの！？」

「いいだろ別に、それに僕四捨五入したら二十歳だし。あ、君らも飲む？」

マルスは持っている缶を置きボックスからさらに2本取り出すと、それらを1本ずつロイとアイクに投げ渡した。

「おっととと！……とにかく四捨五入してもダメなものはダメだった！ねえアイク」

カシユツ

「！！！」

「ング………っふう。」

缶の中身を半分以上飲み干したアイクは口元を拭い、ポカンと口を開けて驚いているロイをいつもの無表情で見る。

「……の、飲んだの……！？」

「……結構旨いな……。」

「でしょでしょ！ほらね、やっぱり大人はこの美味しさを子供に分けたくないからあんな決まりをつくったんだよ。」

ケラケラと笑うマルスの近くには空になった缶が2・3個転がり、

彼の頬はうつすらと赤くなっているのが分かった。

「（こいつ…この短時間でもうこんなに飲んじやったよ……………！！）」

「…お前も飲め……………」

「えゝ！？」

「そつだよゝこの空気は君も飲まなきゃゝほら飲んで飲んでゝ」

「うつ……………ああもう分かったよ、飲めばいいんだろ？」

マルスとアイクに勧められロイは洪々チューハイの缶に口をつけた。

「…何があつたのかしら、これは……………」

買い物から帰ってきた4人は目の前に広がる光景にただ呆然としていた。

ゴチャゴチャと物が散乱し、酔っぱらっていたオッサン達も皆地面に倒れ伏し、遊んでいたちみつこ達は怯えた形相で遊具の中に隠れている。

リンクが何があつたのか尋ると『マルス兄ちゃんが…………』 『ロイが…………』

『アイク兄ちゃんが…………』 とそれぞれが口々に震える声で彼らの名を呟いていた。

「……………？」

ふとシークがその彼らを目で探すと、3人はシートの上で川の字になって寝そべリスヤスヤと健やかな寝息をたてていた。ほんのり赤く染まった頬や衣服には謎の返り血が付着しており、彼らの周りに

はチューハイなどのアルコール飲料の空き缶が大量に転がっている。

「母さん、これって……」

「……3人が起きたらまず、私のげんこつを受けてもらおうかしらね……。」

額に青筋を浮かべたサムスはポキポキと拳を鳴らしていた。

数十分後、頭にたんこぶをつくった3人はサムスのお説教をみつちり聞かされました。

ちなみに酔っぱらっていた時のことは一切覚えていないそうなの。

終わり。

## 花見といえば団子と酒（後書き）

FE3兄弟メインのお話でした。この3人は本当に動かしやすいです。……お酒を飲んだ後何が

起こったかは、皆さんの想像にお任せします。

## お泊まりって何かワクワクする

「ポヨ！これでOK！」

パンパンに膨らんだリュックのふたを閉め、カービィは満足気に頷く。

「カービィ、メタナイトさん達に迷惑かけちゃダメだよ？」

「ペポ、分かってる〜！」

## ピンポーン

「あら、もう来ちゃったかしら？リンク、出てちょうだい。」

「はい。」

リンクが足早に玄関へ向かい戸を開けると、メタナイトとルカリオが立っていた。

「あっどうもこんにちは。」

「どうも…。」

「リンク殿、先のレース以来だな。」

「そうですね。今カービィ呼んできますから待っててください。」  
ドタドタとリンクはリビングの方に向かっていく。

「カービィ、メタナイトさん達来た　　って、うわあ！何せっ

かく詰めた荷物ぶちまけてんの！？」

「ポヨ〜！歯ブラシどこ〜！？」

「カービィ何このお菓子の量は！？泊まりにいくのに足りないから置いていきなさい！」

「い〜や〜！！」

「……いつもながら騒々しいな、この家族は。」  
「まあ、これが彼らの日常茶飯事なのだろう。」  
ポツリと呟いたルカリオの隣では、メタナイトが仮面の下で笑いな  
がらすま家の喧騒を聞いていた。

20分後。

「ペポ！お待たせ！！」

先程よりいくらか小さくなったリュックをしょったカービィがサム  
スと共にようやく姿を現した。

「すみません！カービィったら絶対お菓子を持っていくなだつてき  
かなくて……。」

「ハハハ。カービィ、お菓子だったら私達の家にもあるぞ。」

「ポヨ！やった！！」

「もう、カービィったら……ではよろしくお願いします。」

「うむ、ではお宅のカービィ1日こちらで預からせていただく。」

「ママ、いつてきま！す！」

ウキウキした足取りで玄関から離れていくカービィの背中を見なが  
らサムスはポツリと呟いた。

「心配だわ……。」

「ただいま帰った。」

「ただいま……。」

「お邪魔しまゝす……わあゝ広いお家！」

家上がり込んだカービィは自分の家よりもいくらか長い廊下を走り回る。

「こちらカービィ、廊下は走ってはいけないという決まりがあるのを忘れたのか？」

「メタナイト、ここは学校ではないぞ。」

ナチュラルに呆けるメタナイトに的確に突っ込むルカリオ。

「ねえねえ、キッチンどこ？」

「ああ、その左　　って待て待て待て……！」

カービィの魂胆を見抜いたルカリオは早速向かおうとする彼を慌てて引き止める。

「ポヨ！？べ、別に僕、冷蔵庫の中の物食べようだなんて考えてないよ……！」

「嘘つくな！その冷や汗と口端から垂れているよだれが全てを語っているぞ！夕飯旨いもの作ってやるから、それまで辛抱してくれ……！」

「本当！？」

カービィが目を輝かすとルカリオは頷いた。

「……騒々しいぞ、一体何だ……？」

ガラリとリビングの戸が開けられ、ミュウツーがいつもの不機嫌そうな顔で現れた。

「ポヨ！こんにちは！」

カービィはミュウツーを見上げて頭を下げる。

「……………」

だがミュウツーはフイ、とそっぽを向きリビングに戻ろうと背を向けた。

「ポペツ……！むう……！！」

その態度に腹を立て頬を膨らましたカービィは、突然ミュウツーの背中に飛び付いた。



「！……おい離れる！！」

「カービィ、何をしている？」

引き剥がそうと体を大きく動かすミュウツールの背中をカービィは器用によじ登り、彼の頭に辿り着くと大きく息を吸いこみ、そして

「こんにちは~~~~っ！！」

『~~~~~~~~っ！！（み…耳が…！！）』

あまりの声の大きさに3人は耳を塞ぐ。特にミュウツールは超近距離で声を上げられたため、危うく鼓膜が破れるところであった。

「こんにちは~~~~！！こんにちは~~~~っ！！」

ビリビリと空気が震え、窓ガラスにひびが入ったその時、ついに観念したようにミュウツールが声を上げた。

「ああ分かった！！『こんにちは』！！」

それを聞いたカービィは『ペポ』とニッコリ笑い、ミュウツールの背中から降りた。

「カービィ…どうしたんだいきなり……。」

「ポヨ。挨拶されたら返さなきゃいけないんだよ、ママが言ってた！！」

「……成程。じゃあ今のは挨拶を返さなかったミュウツールが悪いな。」

「フン……。」

プイ、とミュウツールはまたそっぽを向く。

「……さて、じゃあそろそろ夕飯作るとするか。」

「ポヨ！僕手伝う〜！」

「そうか、じゃあ頼む。」

カービィは『お願いね』とメタナイトに荷物を託し、ルカリオと共に台所へ向かった。

「さて……私達は夕飯が出来るまでチェスでもやろうか？」  
「いいだろう、どうせ勝つのは私だな……。」  
フツとミュウツは不敵に笑い、メタナイトとリビングに入っていた。

「ペポ〜！美味し〜い！」  
カービィはガツガツとルカリオ作のビーフシチューを無我夢中で食べている。

「口に合って良かった。まだあるからどんどんおかわりしていいぞ。」

「おかわりい！」

「は……早いな……。」

ルカリオはカービィから皿を受け取りビーフシチューを盛ると、それをカービィに渡す。

「しかしすまないな、せつかくの客人にもっと豪勢なものを出そうと思ったのだが」

「おかわりい！」

「またか？……ほら。」

「ペポ！……おかわりい！」

「ええっ！？……ほら。」

「ポヨ！……おかわりい！」

「……はい。」

「ポペ……おかわりい！」

「……。」

「おかわりい！」

「……………」

「おかわりい！」

「……………」

「おかわりい！」

「（…………こいつの胃は底無しか…………！？）」

まるでわんこそばの如く何度もおかわりを要求され、その食欲にルカリオの他メタナイトとミュウツーも開いた口が塞がらなかった。

合計 46杯

「…………さて、そろそろ我々も寝る時間だな。」

時計を見たメタナイトがそう言うのとルカリオはテレビを消し、ミュウツーもソファーから立ち上がる。

「ねえねえ！お願いがあるの！」

と、カービーが手を合わせて言う。

「何だ？」

「せっかくだからさあ…………皆で寝よう？ここに布団敷いて。」  
「…………面倒だ。」

ミュウツーは顔をしかめたが、メタナイトとルカリオは『まあ、たまにはいいな』とあっさり頷いた。

「ペポ〜イ！やった〜！」

「よし、じゃあ各自部屋から布団を持ってくるぞ。」

二人がリビングを出ていった後、ミュウツォもブツブツと何か言いながらリビングを後にした。

時刻は午前2時過ぎ。

時計の針の音と皆の寝息が響く中、ミュウツォは今だ目が冴えて眠れず横になりながら天井を見ている。

ズリュズリュ……

ゴクン

「（ん……………？）」

ふと何やら妙な音が聞こえミュウツォが隣を見ると、寝ていたはずのメタナイトの姿がない。

「（…トイレにでも行ったか……………。）」

再び天井に目をやると、またあの音が耳に入った。

ズリュズリュ……………

「！                    んなっ！？」

咄嗟に隣を向いたミュウツーの目に飛び込んだのは、寝惚けたカービーが熟睡しているルカリオを頭から飲み込んでいる光景だった。

「（まさかメタナイトも……）っこら、吐き出せ！」

かろうじて口からはみ出ているルカリオの足を引っ張り救助を試みるが、カービーの吸引力のせいもありなかなか抜けない。

「ムニヤムニヤ……お肉おいしいペポ……。」

「お前、食べるならちゃんと調理済みのものを食せ……！！」

そのままミュウツーとカービーの攻防は朝まで続き

朝食時、スッキリ目覚めたカービーと彼のよだれを拭き取り終えたメタナイトとルカリオ、そして目の下に隈ができたミュウツーがさらにムスツとした顔で食卓に着きましたとさ。

終わり。

お泊まりって何かワクワクする（後書き）

もっと慌ただしいイメージにしたかったんですが…（汗）カービィのおかわりはもう少し多くてもよかったなと後悔しています（泣）

## 嵐の夜に

午後9時、リンクの部屋。

「雨、止まないなあ…。」

真っ黒に染まった空からシトシトと降る雨をリンクは窓越しに眺める。

「（このまま朝まで降り続いたら洗濯物干せないな…どうしよう…。）」

リンクがそんなことを考えていたその時、

ピカッ！

ゴロゴロゴロ…！！

「…雷か…。」

リンクはカーテンを閉め、ベッドに寝転がり読みかけの本を読む。

ガラガラ…！！

稲光はカーテンと室内の明かりで見えないため、雷の音だけがリンクの耳に届く。

「（大分近くなってきたな…明日晴れるといいけど…。）」

コン、コン。

と、不意に外側からドアを叩く音が聞こえた。

「誰…?」

リンクが体を起こし話しかけると、ドアの向こうから声が返ってくる。

「リンク……私です。」

「ゼルダ……いいよ、入って。」

ガチャリとドアが開くと、寝間着用の柔らかいワンピースを着たゼルダが部屋の中に入ってきた。

「お邪魔します……。」

「いえいえ。とりあえず、ここでよかったら座って。」

ポンポンとベッドを軽く叩き場所を示すと、ゼルダはトコトコと歩み寄りそこに腰掛ける。

「どうしたの？ゼルダからわざわざ俺の部屋に来るなんて。」

「いえ……あの……。」

それだけ言うとゼルダは口を閉ざし、不安げな顔でリンクから目を反らした。

「?」

その動作にリンクが首を傾げていたその時、

ガラガラガラッ!!

「キヤアッ!!」

「へ?                      んなっ!?!」



リンクは驚いた。

雷ではなく、突然ゼルダが抱きついてきたことである。

「ゼ……ゼゼゼゼルダ!？」

顔を真っ赤にしてあたふたしていると、彼女が微かに震えているのが伝わってきた。

「……………ゼルダ?」

「リンク……………私、雷恐いんです!!……………小さい時からずっと……………!!」  
所々途切れながら喋ると、ゼルダはリンクの胸板に顔を押し付ける。  
「だから……………あの…雷が止むまで、どうか一緒にいさせてください

……………!!」  
「……………。」

ポン、とゼルダの頭に大きな温かいものが乗った。

「……………?」

ゼルダが顔を上げると、それはリンクの手であることが分かった。

「リンク……………。」

「……………分かったよ。ずっと側にいてあげるから、安心して……………。」

穏やかに微笑んだ彼は、そのままゼルダを抱き寄せる。

「……………ありがとう。」

嬉しさと少しの恥ずかしさに頬を染め、ゼルダはリンクの温かさに身を委ねた。

ドォーーーーーン!!

ブツッ!!

「へっ!?!」

二人の間に流れていた甘いムードは、突然の停電によりぶち壊しとなった。

「ウソッ!! 雷落ちた!?!」

「まあ、どうでしょう…?」

ピカアッ!!

ガラガラガラアッ!!

「キャアアッ!!」

「うわあっ!! そんな勢いよく抱きつかない」

パッ

ガチャッ

その直後、電気がついたのと同時にシークが部屋に入ってきた。

「リンク大丈夫? 停電今直ったみた」

あ。」

「へ?」

驚いた顔の彼と目が合ったその瞬間、リンクは自分の今の状態に気

付いた。

目の前にゼルダの顔があり、彼女の腕は今自分の首に回され、自分の手は彼女の腰に回されている。

つまり傍から見れば、抱きついてきたゼルダとベッドの上でイチヤついているようにしか見えないのだ。

「あ……あのね、シーク……。」

「……………」

シークは無表情でしばらくこちらを見ていたが、一歩下がるとバタン、とドアを閉めた。

「ちよっ！！待ってシーク~~~~~~~~っ！！」

リンクは慌ててベッドから飛び下り、ドアを開けて早足で立ち去るシークを追い掛けた。

「あっリンク！一人にしないでください〜！」

その彼の後を、ゼルダは慌てて追い掛ける。

その後3人は家中を走り回り、『夜は静かにしなさい！』とサムスに怒られました。

おまけ。

あのためのリンクとシーク。

「　　という訳だから、全部誤解だよ！」

「何だつまらない…ようやくリンクが一步成長したと思ったのに…

…。」

「何？成長つて。」

「……夜遅くに男が女を自室に呼んですることは、1つしかないだろう？」

「な、なななななななっ！？」

（　凄まじい程の湯気）

「フフ……じゃあ僕は今日のこの出来事を『リンクとゼルダ・愛の育み日記』に早速書こうかな。」

「えゝゝっ！？そんな日記あるの！？」

「無いよ。嘘。」

「~~~~シーク~~~~ッ!!」

「フフフ……。」

終わり。

## 嵐の夜に（後書き）

私の中のシークはリンクをからかうのが好きです。からかいつつもゼルダとの恋を応援しています。そんなシークは私の大好きキャラです。〇（　　）〇（　　）　　どうでもイイヨ　　そういえ  
ば「学校は無いのか」と質問された方がいました。私も一度考えたことがあるので、近々作ってみようかなと思います。

## 有効利用という言葉がある

すま村の市場。

買い物をする人々が行き交う中、買い物かごを持ったシークとメモを持ったピットが歩いている。

「ピット、後は何を買いえばいいんだ？」

「はい！えーと白菜と……人参は×がしてありますからいらないんですよね？」

「いや、人参は買うよ。」

「えっ？でも……」

「その×はさつき買い物に行く前、ロイがこっそりと書き換えていたのを見たよ。」

「そうなんですか！？全く何やってんだあのバカ……しかもよく見るとその下に『チーズケーキ』って書いてある……」

「ロイが書き換えた後にマルスが何か書き足していたな。」

「もーあのバカ共は……」

ピットは怒りながらチラリと横目でシークを見た。

「（……シークさんはあいつらと同じ年位なのにこの落ち着きよう……」

「……やっぱり兄は大人な人がいいよねえ……。そして今日はシークさんと二人で買い物！はう……幸せ……」

隣で一人興奮するピットをシークは不思議そうな顔で見ていた。

「……ま、とにかく早く家に帰って、お茶でも飲みながらゆっくりした……」

「見つけたぞ……！シーク……！」

『ん？』

不意の謎の声に二人が立ち止まり振り返ると、シュタツと目の前に何かが降り立つ。

その人物はすま家の近所のスネークさん家の息子・フォックスであった。

「よお、お前ら。」

「何だフォックスか、何か用？」

「そつだよ狐野郎、何か用かよ……？」

シークは特に驚きもせず、ピットは突然の乱入者を睨みつけている。  
「何か用、だと……？俺がお前にある用事といえば1つしかないだろ！？」

今日こそあの時のアーウインの修理代を払ってもらう……！

『あの時のアーウイン』

それはまだ彼らが亜空軍と戦っている時の事。

ハルバートにいたシークとピーチ姫を急襲したフォックスを、敵と思い込んだシークが彼の戦闘機に飛び乗り、拳でフロントガラスを粉々に割ったのである。

「すごいですシークさん！素手でフロントガラス割るなんて！」

「感心するな……まだ80年ローン残ってんだぞ……！」

「あと80年以上も生きるつもり？図太い神経してるね。」

「何だと……！！今日こそ修理代〇万円払え……！！」

真つ赤になつて怒るフォックスをシークは無表情で見ていたが、ふと何か思い付いたような顔をした。

「フォックス……お金払つてもいいよ。」

「ええっ！？シークさん！」

「何っ！？マジか！？」

「ああ……ただし、僕と勝負して君が勝つたらね。」

「勝負……乱闘か？」

「いや、ここは簡単に僕の家で済まそう。でも僕はまだ買い物を終えていないから、先に行つててくれないかな？」

「何か疑わしいな……逃げる気だろ？」

「そんな真似しないよ、ほら行つてて。」

「お……おう。」

フォックスは体を反転させすま家のある方角へと向かつていった。その小さくなつていく背中を見送るシークにピットは不安そうに問い掛ける。

「シークさん……大丈夫なんですか？」

「当たり前。僕が負けるとでも思つてたの？」

「いえ、でも……。」

「……ちようど大変だと思つてたから助かつたよ。」

「え？」

ピットが不思議そうな顔で見上げると、シークは黒い笑みを浮かべていた。



「ただいまー。」

『おかえりなさい!』

帰ってきた二人を迎えたのは、期待の目を向けるマルスと不安そうな顔のロイ。

「シーク! チーズケーキ買ってきてくれた!？」

「ああ……ハイ、今日安かったから特別に買ってきたよ。」

差し出された小さい箱を受け取ったマルスは、満点の笑顔で『ありがとう!』と言いいビングに走っていった。

「シーク、その……人参は？」

「ああ……ほら、ちゃんと買ってきたよ。」

「……!! 何で買ってくるんだよ!!? xつけただろ!! ピットからも何か言ってくれよ!!」

「好き嫌いの前が悪いんだよ、大バカ。」

「~~~~うわん!! バカってゆ~~~~な~~~~!!」

半泣きになるロイに見かねたシークはやれやれと頭を振ると、買い物かごから先程買ったプリンを取り出しロイに差し出す。

「ほら、コレあげるから静かにしなよ。」

「……う~~~~ちきしょ~~~~。」

プリンを受け取ったロイもまたリビングへと歩いていき、その後にシークとピットも続く。

リビングに入ると、ソファーに寝そべり寝息を立てるアイクと満悦の表情でチーズケーキを食べるマルス、そして静かにお茶を飲んでいるフォックスの姿があった。

「お待たせフォックス。」

「遅いぞ……さっさと始めて決着をつけようぜ。」

「そうだね、じゃあまず準備といこうか……ピット、悪いけどこの荷物台所に置いてきてくれない？」

「はい! 分かりました。」

ピットが台所へ向かうと、シークは隣の部屋に何かを取りに行った。

「……………何だこれは？」

自分とシークの後ろに置かれた大量の古タオルにフォックスは目を丸くする。

「これが今日の勝負に使うものだよ。」

そう言っているとシークは『ハイ』と、糸を通した縫い針をフォックスに渡した。

「は？」

「今日は『雑巾大縫い競争』というこ。ルールは名前の通り、多く雑巾を縫い終えた方の勝ち。分かったかい？」

「はあ……………勝手に競技を決められたのは腹が立ったが、まあいい。どうせ勝つのは俺だ、そして修理代ももらっていく！」

「フフ…僕は負ける気なんてしないけどね……………」

「行くよ。レディー……………GO!!」

審判のロイの掛け声と共に二人は早速雑巾縫いを開始した。

「（よし！快調な出だしだ！これならシークの野郎も付いてこれなん？）」

雑巾を縫いながらチラリとシークの方を見たフォックスは自分の目を疑った。

彼の前には既に縫い終えた雑巾が積み重なっている。

「（なつ……………何！？もう6枚も出来てやがる！！くそっ！負けるかよ！！！）」

焦りを感じたフォックスはペースを上げ、所々詰まりながらも何とか縫い上げていく。

そんな必死の彼の隣では、シークが涼しい顔でいつものペースで縫っていた。

一方、マルスは寝ていたアイクを叩き起こし、彼とロイ・ピットと共にソファアーに座って試合を観戦していた。

「…なぜ俺が起こさなければならぬ……？」

「だってソファアー座れないもの。それより君も見なよ、面白いよ。」  
「どっち勝つかなあ？」

「お前バカか？裁縫でシークさんに勝てる人、他にいると思う？」

「しっかしシークもズルイよね、自分の得意分野を競技に選ぶなんてさ。」

「…いや、それだけではない……。」

「？どういうこと？」

マルスが首を傾げるとアイクは彼ら二人の後ろにある、段々と雑巾に変えられていく古タオルの束を指差した。

「…お前ら…あのタオルに見覚えは無いのか…？」

「見覚え……ん？そういえば確かアレって……。」

ロイが思い出したその時、

「出来たー！！」

フォックスが縫い終えた一枚を最後に、古タオルは全部雑巾に変わっていた。

「おゝスゴイ！全部雑巾になってるよ。」

「へっ！どうだシーク！これなら俺もお前に負けず劣らずだろ！？」

「そうだねえ……。」

シークはフォックスの縫った雑巾を一枚持ち、縫い目を確かめる。

「……うん、少し縫い目が粗いけどよく出来てる。」そう言つとシ

ークはフォックスの方を向きニコリと微笑んだ。

「ありがとう、助かったよ。」

「……へ？」

突然礼を言われ、わけが分からず混乱していると、玄関から『ただいまー』と声が聞こえた。

「あ、母さんが帰ってきた。」

一同がリビングの出入り口を見ると、廊下からサムスが入ってきた。

「母さんおかえり〜。」

「ただいま。あら、フォックス君じゃない、いらっしやい。」

「あ、ど…どうも…。」

「……あら！シークもう終わったの！？この量全部！！」

大量に積み上げられた雑巾を見たサムスは感嘆の声を上げる。

「こんなに大変だったでしょう？」

「いや、彼が手伝ってくれたからね、すぐに終わったよ。」

そう言いながらシークは隣のフォックスを指差した。

「……………え？」

当の本人はわけが分からず困惑している。

「まあ、そうなの。ありがとうフォックス君。」

「いや、その」

「本当に助かったよ」

ありがとう、フォックス君。」

「んな……………っ！！」

『利用された!』ということに気付いたその瞬間、シークがこちらに向かつてニヤリと黒い笑みを浮かべた。

「くっそお~~~~っ!! 覚えてるよ~~~~っ!!」

フォックスは立ち上がり、悔し涙を流しながら玄関に向かい、出ていった。

「……フォックス君、どうしたの?」

「彼にもいろいろあるんだよ。それより母さん、夕飯の支度手伝うよ。」

「そう? ありがとう。」

サムスと共に台所に向かうシークの背中をピットは尊敬の目で、マールス・アイク・ロイは畏怖の目で見ていた。

『(…やっぱり……こいつには逆らえない……!!)(…』

終わり。

## 有効利用という言葉がある（後書き）

フォックスが可哀想な話になりました（笑）とりあえずシークの最強っぷりを書きたかったのです。

## シリアスな空気は案外壊れやすい（前書き）

今回の話は擬人化があります。 擬人化するのには ・マスター  
ハンド ・クレイジーハンド の二人（両手）です。  
擬人化が好きではない、または嫌いだという方はどうぞお戻  
りくださいまし。

## シリアスな空気は案外壊れやすい

すま家、リビング。

マルスとロイ、ゼルダの3人が他愛もないことを話しながら茶を飲んでいると、『ただいま…』と玄関からリンクの声が聞こえた。

リビングに現れたリンクの表情は元気が無く、頭を押さえてドサリとソファーに腰掛けた。

「おかえりなさい……………リンク、どうしたんです？」

「いや……………何か頭痛くて…朝は気にならなかったんだけど、乱闘が終わってすぐに酷くなつてさ……………」

「風邪でも引いたんじゃない？」

「大変だ！先輩、俺バ○アリン取ってきますよ。」

ロイは立ち上がり、薬を探すべくリビングを出ていった。

「大丈夫ですか…………？」

ズズキと鈍い痛みで頭を押さえ顔をしかめるリンクの隣にゼルダが腰掛ける。

「大丈夫……………じゃないかも、すつごく痛い……………」

「まあ大変……………本当に何なのでしょう？」

その時、薬の箱と水の入ったコップを持ったロイが戻ってきた。

「はい、バ アリンと水ですよ。」

「ありがとう、ロイ……………」

それらを受け取ったリンクは薬を2、3錠口に入れ、水で押し流し飲み込む。

「これで少しでも落ち着くといいけど……………」

「どうだろう……………何か、普通の頭痛じゃないんだよ……………」

「どうということですか？」



「……頭の中で声がするんだ…『早く出せ』『そっちに行かせろ』  
って何度も……。」

リンクの言葉にゼルダの顔が険しくなる。

「…それは一体……。」

『ただいまー!』

玄関から明るい声が響き、リビングに袋を持ったりリュカとバットを  
担いだネスが現れた。

「あ、おかえり二人共。」

「ただいまです。」

「あれ?……リンク顔色悪いね。」

「うん……頭痛くて……。」

「それならちようどよかったです、バ アリン買ったので飲んでく  
ださい。」

「え?バ アリンだったら薬箱の中にあつたやつを今しがた飲んだ  
よ。」

『え~~~~~~~~っ!~!』

ロイの言葉にネスとリュカは目を見開いて驚いた。

「な、何!?!」

「ロイ、君使用期限見た！？あのバ　アリンもう半年近く過ぎてたんだよ！！」

「ええっ！？薬に期限なんてあるの！？」

「ありますよ！！」

「何やってんだよバカ！！箱の表示をちゃんと読め！！」

「バカって言うな！！マルスのバカ！！」

「何で僕がバカなんだよ！？バカは君だけで十分さ！」

「何だよそれ！！！」

「リンク…どうです？」

「うん、今は何とも　痛っっ！！」

不意に激しい頭の痛みが彼を襲い、リンクは顔をしかめ両手で頭を押さえる。

「リンクー！？」

「リンクさん？」

「……う……痛っ……！！」

『…やっと、この時が来たか。』

ズキズキと痛む頭の中に、またあの声が響く。

『ほら……さつさと俺に外の世界を見せろよ！』

「う……ぐ……っ！！」

「！…ねえ、リンクの左手、何か光ってない!?」

マルスが指差すと、頭を押さえているリンクの左手の甲に、3つの三角形が光っている。

「（トライフォース……!!）」

咄嗟にゼルダは自分の右手の甲を見た。しかしそこは光もせずそのままである。頭の痛みは激しくなり、やがてリンクの全身に広がった。

「ぐう……あ……っ!!」

「リンク!!」

『さあ、お前の出番は終わりだ……早く交代しろ!!』

「う……ああああっ!!」

その瞬間、トライフォースの光が強くなり、リンクの全身を包み込んだ。

「先輩……!!」

「うわあっ!!な、何!？」

スマブラスタジアム、放送室。

ここでは司会を務めるマスターハンドとクレイジーハンドが人間の

姿に化け、今日の乱闘（マリオVSクッパ）を眺めながら茶を飲んでいた。

「……………ん？」

「どうした？マスター。」クレイジーが声を掛けると、マスターは持っていたティーカップを置き、フツと笑った。

「…どうやら、『彼』がようやく目覚めたようですね。」

「『彼』って誰だっけ？」

「忘れたのですか？3日程前に貴方にお話したでしょう……………？」

「3日前……………ああ、ハイハイあいつのことか！」

「思い出しましたか……………さてと。」

マスターは立ち上がり、椅子に掛けていた上着を羽織る。

「どこ行くんだよ？」

「今から目覚めた『彼』に会いに行つてきます。貴方はここで役割を果たしててください。」

「あいつに会いに行くつてことは……………え、俺もあの家行きてえ!!」

「残りの試合が全て終わったら来ても構いませんよ。」

「マジか!? あゝ早く終わつてくんねえかな〜!!」

「フフ……………では。」

『早く終われ〜!』と叫ぶクレイジーを残し、マスターは放送室を後にした。

「リ……………リンク……………？」

ようやく光が消え、リンクはソファアに座ったままうなだれている。

「リンク……………大丈夫ですか……………？」

心配するゼルダが彼に手を伸ばした。

その時、

ガシッ

「！！」

突然、リンクが下を向いたまま彼女の手をつかみ、グイッと勢いよく引き寄せた。

「キャ……ッ！」

バランスを崩したゼルダはリンクの元へと倒れこむ。

「リンク、何を」

「……俺はリンクじゃねえよ。」

「……………え？」

その一言にゼルダの他、マルス達も目を丸くした。

するとリンクは顔を上げ、ゼルダの顎を片手でクイと上げると、互いの視線を合わせ、彼女を直視した。

目の前の彼は確かにリンクではあったが似ているのは顔と声だけで、金色だった髪は黒く染まり、青かった瞳は血の様に赤く、いつも穏やかな顔には不敵な笑みを浮かべている。

「！！ 貴方…誰ですか……！？」

「ククッ……あんたは俺と会うのは初めてか。俺はあんたのこと知ってるぜ、いつもコイツを介して見てたからな……会いたかったぜ、ゼルダ姫。」

ニタリと笑ったその顔にゼルダは背中にも悪寒を感じた。

『リンク』は彼女から顔を反らし、呆然としているマルス達の方を向く。

「お前らも俺に会うのは初めてだな……フツ、驚きすぎて何も言えねえか……」

『リンク』が小バカにしたように言うと、ロイが震える唇を開いた。

「……た……。」

「ん？」

「……た……た……。」

「んあ？何だ？」

「大変だ！！リンクがバ アリンのせいでおかしくなった！！」

『……は？』

『リンク』そしてゼルダとネスまでもがポカンとしていると、続けてマルスが叫び出す。

「やっぱり期限切れがまずかったんだよ！！どーしよ目がこんなに充血しちゃってるよー！！」

「お……おい。」

「うわ〜ん！リンクさん元に戻ってください〜！」  
「ありやりや…リユカ、泣かないで。」

それまで流れていたシリアスな空気は一瞬にして入れ替わり、目の前でギヤーギヤーと騒ぐ4人に『リンク』はただ呆然とするしかなかった。

「（リンクを通して見てたはいえ……何だこの連中は………！？）」

その時、『ただいま』と買い物を終えたサムスがフライパンを片手にリビングに現れた。

「あつ母さん！」

「ネス、これ見て！このフライパンすつごく性能が良くてね、それに安かったからお母さん思わず買っちゃった。」

「わあ、良かったね…って違う違う！母さん大変なんだ！！リンクが………！！」

「へ？リンクがどうかしたの？」

サムスが顔を上げると、自分を呆然とした顔で見る『リンク』がゼルダを抱き寄せているのが目に入った。

「………あんだ達〜っ！！」

するとサムスの目つきが変わり、買い物がごを床に置くとフライパンを構えズンズンと2人の元へ歩み寄っていく。

「な………何だ！？」

「仲良くするのはいいけどネスやリユカみたいなお子様がいる前で、

そういう事しちゃダメって前に言ったでしょっ！っ！」

ガーーーーンッ！！

「ぐわ…………っ！！」

振り降ろされたフライパンが見事に頭にクリーンヒットし、チカチカと『リンク』の目の前に火花が散った。

その隙にゼルダは『リンク』から放れ、サムスの背中に隠れる。

「まあ！さすが高性能フライパンね、今で傷一つ付いてないわ」

「い…痛つてえ…………！！」

『リンク』は殴られた箇所を手で押さえ、痛みに悶えている。

「（本当に何なんだよこの連中…………！！誰か俺の話が分かる奴、頼む来てくれっ！！）」

『リンク』が心の底から悲痛に願っていたその時、

「ただいまー。」

「（！！…………この声…………！！）」入り口に視線を向けると、『あゝ疲れた』と呟きながらシークが入ってきた。

「（こいつなら…………！！）」

咄嗟に『リンク』は彼の元へ駆け寄り、ガシツと肩をつかむ。

シークは何事かと目をパチクリさせていたが、自分がいつものリンクではないことに気付き、表情を変えた。

「君…確かリンクの影だね…何で今ここに」

「詳しい説明は後でする！！だから今はこの状況を何とかしてくれ！！このままだとこの俺様が全然キマらねえんだよ！！」



そう懇願した彼の後方にはまだバ　アリンで自分がおかしくなつたと騒ぐ3人と、ネスとゼルダにフライパンの話をするサムスがリビングの空間を騒然とさせている。

「あらら…相変わらず家の家族は皆騒がしいね…。」思わず苦笑したシークの後ろから、アイクが『疲れた…』と呟きながら入ってきた。

次に続く。

シリアスな空気は案外壊れやすい（後書き）

ダークリンク登場です。今回は少し可哀想になりましたが、次からはリンクのライバルとして悪どい所を書きたいと思います。

## 恋にライバルは付き物

「ただいま。」

乱闘から帰って来たピットは靴を脱ぎ、まっすぐリビングへと向かう。

「あゝ疲れた……あれ？」ピットの目に入っただのは、ゼルダの手を回している黒髪のリリンクと、彼の向かいに座っているすま家一同だった。

「皆どうしたの？リビングに集まっちゃって……あ！リリンクさんイメチェンしたんですか！？似合っててかっこいいです！」

「……ピット、こっちにおいで。」

シークが手招きするとピットはトコトコと歩き、彼の隣に（そこにいたロイを強引に押し退け）座る。

「えーと……さっきの話を繰り返すと……つまり君はリリンクの『影』なんだね？」

「ああそうだ、あいつの心の『闇』の部分が俺ってわけ。」

「へえ。つまりバアリンクはリリンクのいろいろと悪い部分が固まって出来たものなんだ。」

「ああ　　って、何だバアリンクって！？変なあだ名つけんな！」

「だってリンクがバアリン飲んだら君が現れたんだもの、ぴったしだよ。」

「ぴったしじゃねえよ！いいか！？俺にはなあ、ダークリンクって名前があるんだよ！！」

「えゝそうなの？バアリンクの方が絶対いいのに……。」

「泣かすぞ天然赤毛野郎……！！」

ドスの効いた声で脅され、ロイは思わず近くのアイクの背中に隠れ

る。

「あの…ダークさん…。」ゼルダが躊躇いがちに声を掛けるとダークリンクもといダークは『あゝ？』とぶっきらぼうに返事をした。

「『さん』なんて要らねえだろ？で、どうした？ゼルダ。」

「……リンクに…会わせてください……。」

ゼルダは精一杯ダークを睨みつけ震える声で言う。

「はあ？何言つてんだよ、リンクは俺だろ？」

「いいえ違います！……貴方は私の知っているリンクではありませんせん！彼を返してください！」

「……そいつは出来ねえな、お姫様…あいつの『影』だった俺はようやく生身の体を手に入れることが出来たんだ…これからは俺がリンクとして君臨するんだよ……！！！」

ダークはニヤリと笑い、ゼルダの肩をつかむ手に力を込めた。

「あゝ何か大変なことになったね………ところでさ、おやつってまだ？」

「マルス…リンクの体は今乗っ取られてるんだよ……。」

「あ。」

リンクの体に乗っ取られる

その体はダークの物になる

リンクがいらないからおやつが作れない

結論：おやつが食べられな

くなる

「お前……早くリンクにその体を返せ……っ!!」

思考を巡らせた結果、大変なことだと気付いたマルスはダークに向かい物凄い剣幕で訴えた。

「どこでスイツチ入ったんだ……ま、返せと言われて素直に返すわけねえだろ、せつかく手に入れたんだしよ。」

「そんな……!!」

ピンポーン

「?…誰だこんな時に…僕見てくる。」

ロイは玄関に向かい、ガチャリと戸を開けると、そこには人間の姿に化けたマスターとクレイジー（あの後追い付いた）が片手に紙袋を下げて立っていた。

「こんにちは。」

「やつほ。」

「あ、二人共いらっしやい。どうしたの?」

「この家に用事のある方がいまして……少々お邪魔させていただいてもよろしいでしょうか?」

「いいよ、今ちよつと取り込んでるけどね。まあ上がつてよ。」

ロイが促すと二人は『お邪魔します』と言いながら家に上がる。

3人がリビングに入ると、一同は『いらっしやい』『こんにちは』と口々に言う。

「これ、お土産のケーキです。皆さんでどうぞ。」

マスターがそれをテーブルに置いたと同時にマルスが『ケーキ!』勢いよく飛び付いた。

「あつずるいよマルス!僕も……!!」

「二人共意地汚いよ！つてか僕にも選ばせろ！！」

「待ておめえら！正直俺も食いてえんだよ！！」

ロイとピット、そしてクレイジーを足した4人がケーキを取り合っている時に、サムスはお茶を煎れに台所へ向かう。

ダークがその光景を眺めていると、彼の隣にマスターが腰掛けた。

「……何だ？」

「初めまして、私はこの世界の創始者のマスターハンドと申します。以後お見知りおきを。」

「……まあ、あんたのことはリンクを通じて知ってるぜ。で、マスターさんよ……俺に何か用か……？」

ギロリと鋭い眼孔の赤い目に睨まれたがマスターは微動だにせず、ニコリと彼に笑顔を向けた。

「はい、実はですね……リンクの『影』である貴方は、ちゃんとした体は欲しくないかと思ひまして。」

「………？どういうことだ？」

「貴方が今ここに存在しているのはリンクの体を使っている為ですが、しかしこの家には彼にいなくなれると大変困るそうで。」

マスターの言葉にゼルダは大きく何度も頷く。（ダークはムツと顔をしかめた）

「フン！んな事言っても、せつかく手に入ったこの体を易々と返したくなんてねえぜ……。」

「そうですか……まあ、貴方がそう言うことは分かっていましたし、かといってこのままリンクの存在が消えるのは困ります……なので

今からその体を『2つに分けたい』と思います。」

「………え？」

何だそれ？と質問する暇もなく、マスターはテーブルの向かいでピ

ットとシフォンケーキを取り合っているクレイジーを、『ちょっと来なさい』と呼びつける。

「何だよマスター？」

「今から彼の体を分離させるので、貴方も手伝ってください。」

「ええっ！！あれやんのかよ……キツくねえか？」

「まあ、そこは彼の体の耐え様です。さ、準備してください。」

マスターがそう言うのとクレイジーは『よっしゃー！』と腕捲りをし、マスターはすま家一同に『危ないので下がっててください』と注意を呼び掛ける。

「……何が始まるんだ……？」

「え、何？何か面白そうだね。」

すると彼らはそれぞれダークの横に立ち、マスターは彼の右腕を、クレイジーは左腕を持った。

「おい……何する気だよ……？」

「だからお前の体を分離させんだって。」

「多少痛いかもしれませんが、我慢してください……では、行きますよ。」

『せーの！』

ギリギリギリ……！！

掛け声と共に、突然ダークの両腕が左右に引っ張られた。

「痛、だだだだだ！放せヤメロ！！」

「なかなか…頑丈にくつついていますね……。」

「もつと力入れねえと剥がれねえな。」

そう言うのと二人は更に力を込めて腕を引く。

「痛え痛え痛えっ！！体が割れるっ！！」

一方、マルス達傍観者はケーキを食べながらその光景を眺めている。

「うわあ…ありや痛そうだね……。」

「ねえ、本当に2つに分離するのかな？」

「…さあな……。」

「彼も難儀だね……ところで二人共、これってちゃんと分離するのかな？」

「まあな、でも数10%の確率で失敗する時もあるけどよ。」

「失敗するとどうなる？」

「彼の体が真つ二つに裂けます。」

「やめる……解放してくれ……！！」

ダークの悲痛な叫びも虚しく、二人の引っ張る力は更に増していった。

「いぎやあああっ！！」

ベリッ！！

皮が剥がれるような生々しい音がすると、彼の体は見事二人に分かれた。

片方はダークのままで、そしてもう片方は元のリンクの状態である。

「うおっ！本当に分離した……！！」

「リンク……！！」



咄嗟にゼルダはリンクの所へ駆け寄る。

「痛てて……あ、ゼルダ……。」

「大丈夫ですか？どこか痛む所は……？」

「……強いて言うなら、何か左腕が非常に痛いんだよね……ん？」

ふとリンクが顔を上げると、右腕をさすっている黒髪の自分の姿が目に入った。

「え！？お……俺がもう一人！？」

リンクは動揺したものの、すぐに彼が何者かを悟った。

「お前……俺の『影』……！！！」

「ククッ……そうさ、久し振りだな……リンク。」

「……あの頭の中の声はお前だったのか……！！？」

リンクはゼルダを庇うように前に出て身構える。

「お？何だやる気か……相手してやろうじゃねえの……！！！」

「は……いそこまで！」

張り詰めた空気を壊したのは、二人に見兼ねたサムスの一言であった。

「母さん……。」

「何だよアンタ、邪魔すん」

ゴーーーーンッ！！

「痛ってえ……！！！」

再びフライパンで頭を殴られ、ダークは痛む箇所を押さえる。

「お母さんにむかって『アンタ』とは何！？同じリンクでもこつも違うのね！」

「……何すんだこの……！！！」

「『この』じゃなくて、『お母さん』でしょ……？」

「な、何言　　」

「『お母さん』でしょ？」

「……はい…母さん……。　（ダメだ…こいつには逆らえねえ……！）」

凄んだサムスの鬼よりも恐ろしい形相に、ダークは恐れおののいた。  
「ハハハ。さすがはサムス、見事ですな。」

「クセのある子供は毎日取り扱ってるので。」

「成程……ところでサムス、この家で彼の面倒を見ていただけませんか？」

そう言いながらマスターはたんこぶをさするダークを指差した。

『…………え？』

予想外のことに、リンクとそのダーク本人は思わず固まる。

「いいわ。ファルコンも許してくれるだろうし、家族が増えるのは大歓迎よ。」

「ちよつと母さ　　」

「そうですか、ではよろしくお願いしますね。」

「お、おい……」

「さ、クレイジー、帰りますよ。」

「ほ……い。じゃあなお前ら！」

クレイジーは立ち上がり、皿に残っていたロイのシュークリームをヒョイと摘み口に入れた。

「あつ……！僕のシュークリーム……！」

半泣きのロイを無視し、マスターとクレイジーは『お邪魔しました』と言つて見送りのサムスと共にリビングを後にした。

「散々問題残していったな……あいつら……。」

「僕の……シュークリーム……（泣）」

「泣くな……俺のをやる……」

「うアイク~~~~~!!」

がばあつと抱きついたロイの頭をアイクはよしよしと撫でる。

その一方で、リンクとダークは互いに睨みあい火花を散らしていた。

「お前とは絶対分かりあえないと思うな!!」

「奇遇だなあ……俺もそうだよ……!!」

「あの、二人共……一緒に住むことになったのですし、仲違いはよくないです……」

ゼルダがたしなめると、不意にダークは彼女の手をつかみ、自分の方に引き寄せる。

「きゃ……!!」

「ゼルダは優しいな……さすがは俺の惚れた女だぜ……なあ、リンク？」

「……貴様……!!ゼルダから離れろ……!!」

ギヤーギヤーと騒ぐ中、ピットが隣のシークの顔を見ると、覆面で隠れてはいるが、その表情はどこか楽しそうであった。

「シークさん……どうしたんですか？」

「いや……面白くなってきたなと思ってね……」

恋に障害は付き物だよ？  
リンク。

終わり。

## 恋にライバルは付き物（後書き）

新しい家族が増えました。これからもすま家をよろしく願います。

## 青春だねえなんて言ってみる

すま家、リビング。

ゼルダが一人静かに本を読んでいると、リンクが入ってきた。

「ゼルダッ。」

「あら、リンク。」

リンクはテーブルに歩み寄り、ゼルダの隣に座る。

「何してんの？」

「掃除も終えて退屈なので、ピーチから借りた本を読んでいます。とても面白いんですよ。」

ゼルダが言うと、リンクは『ふん』と興味が無さそうに返事をする。

ゼルダは再び本に目を落とす。だが、不意にスッと彼女の手から本が取り除かれた。

「!」

驚いて顔を上げると、笑顔のリンクが片手に自分の読んでいた本を摘むように持っている。

「（いい所でしたのに……）…どうしたんです？リンク……。」

「……なあゼルダ。退屈なら、俺と面白いことしないか？」

「面白い……こと……？」

リンクは本をテーブルに置くと、ゼルダに近付き距離を縮める。

「…リンク……?」

ゼルダがキョトンとしていると、彼女の頬にリンクの手が添えられる。

「いいかゼルダ……面白いことってのは、男女がちゃんとした恋人になれる方法だ……。」

「恋人……ですか?」

「ああそうさ………ちょうどアイツがいねえしな、今のうちに済ませとくか。」

「え?」

その時、突然ゼルダはリンクに抱きすくめられた。

「!!リンク…何を…!?!」

「……ずっと、こうしたかったんだよなあ……。」

自分を見下ろしニヤリと笑ったリンクに鳥肌が立ち、ゼルダは彼の近くから離れようとしたが、抱き締める力が強いため拘束から逃げられない。

「リンク…ッ!!放してください……っ!!」

ゼルダはもがくが力で彼に敵うはずもなく、やがて彼の顔がゆっくりと近付いてくる。

「(違う……この人、リンクじゃないです……!!!)」

ゼルダがそう気付いた時には既に遅く、互いの唇が触れ合うまであと数cmであった

スコーーーーンッ!!

「んがつ!!」

突如リンクの後頭部に勢いよく飛んできたスリッパが当たり、倒れた彼の向こうには、もう一足スリッパを構えたシークがこちらを向いて立っていた。

「全く、油断も隙もあつたもんじゃない。」

「シーク……。」

「……つてめえ!!何しやがる!?!」

「それはこつちのセリフだよ、君は何やってんの?」

ツカツカとシークは歩み寄り、起き上がったリンクの髪をガシリとつかむと、それを上に持ち上げる。

すると彼の頭から金色の髪が剥がれ、その下から黒い髪が現れた。

「!!貴方は……!!」

「こんな下手な変装してさ……。」

「ちえっ、バレたか。せつかくリンクに変装してゼルダをモノにしようと思つたのによ……。」

リンクに変装していたダークは悔しそうに言いながら目に入れていたカラーコンタクトを取る。彼が顔を上げると、先程の青い瞳から赤い瞳に戻っていた。

「ダーク……!貴方、私を騙していたんですか……!?!」

「だってそうでもしねえと、アンタ俺の事怖がつて近寄らねえだろ?」

「そりゃあ君、人相悪いからね。」

「何だところ!?!……ま、とにかく俺は自室に退散するとしますか。」  
「そう言いながらダークは立ち上がり、リビングを出て階段へと向かった。」



「……ゼルダ、大丈夫？何もされなかった？」

「ええ…私は何ともないです…。」

そう言いつつもやはり多少は怖かったのだろう、ゼルダの肩が微かに震えているのが分かった。

「……今、リンクが来ると思う。」

「え……？」

「僕達一緒に帰ってきたから……彼、花壇に水をあげてから来るって。」

その時、『ただいまー』と玄関からリンクの声が聞こえた。

「………！」

「来たみたいだね…。」

咄嗟にゼルダは立ち上がり玄関に早足で向かっていく。

「リンク………！」

「あ、ただいまゼルダ。今日の乱闘は本当に疲れたよ、俺3位だっ

」

ボスッ

「………え？」

言いかけた言葉は、突然抱きついてきたゼルダによって遮られた。

「ぜ、ゼルダ……？どうしたの………？」

リンクが不意のことにオロオロしていると、ゼルダが顔を上げ、潤んだ目でニコリと微笑んだ。

「ゼルダ……？」

「……いくら貴方と同じでも、貴方の匂いと温もりが私を安心させてくれます……貴方が、いいです。」

そう言くとゼルダは再びリンクの胸板に顔を埋める。

リンクはまだ詳しい状況が分からないままだったが、フツと穏やかな笑みを浮かべ、ゼルダの頭を優しく撫でた。

そんな二人をシークはリビングの出入り口から見ている。

「……あら、相変わらず仲の良いことで。」

からかうように言いつつも、彼の顔には穏やかな表情が浮かんでいる。

ゼルダが幸せそうに笑う様子を見ただけで、シークは自分の心が安らいでいくのが分かった。

「やっぱりあの二人には、幸せになってほしいよね……。」

僕は君の分身だから

君の幸せが僕の幸せなんだ

終わり。

## 青春だねえなんて言ってみる（後書き）

またもやシークが友情出演……。リンクとゼルダにはとにかくシークを絡ませたいんですね……。ダークが追加して三角関係（+傍観者）でリンクの恋はまだまだ続きます！ご期待ください！

## 日曜の朝はやっぱりコレ

日曜の朝。

チュン、チュンと鳥の声が耳に心地良い。

カーテンの隙間から朝日が差し込む部屋の中、スネークはまだベッドで眠りにについている。

「フンガ〜……………」

バアン！

「いつまで寝てんだ！！起きろバカ親父！！」

「ピチュ〜！！」

突然、静けさを破るかのように勢いよくドアが開け放たれ、肩にピチューを乗せたウルフが怒鳴りこんできた。

「ゴガ〜……………」

「…………全然起きやしねえ…ピチュー、やっちなえ。」

そう言つとウルフはまだ目の覚めないスネークの上にピチューを乗せる。

「ピ〜…ピチュ〜？」

「ああ、おもいつきりかましてやれ。どうせだったら10万ボルト以上出してもいいぞ。」

「ピチュ〜！！ピイ〜……………」

……チュウウウツ!!」

バリバリバリッ!!

「あべべべべべっ!!」

一方、朝食を作り終えたトレーナーはピカチュウと共に出来上がった朝食をリビング（兼食卓）に運んでいた。

「ピツカ、ピカチュウ?」

「そうだね、じゃあこれで最後だから。」

トレーナーがサラダを渡すと、ピカチュウは小さい両手でしっかりと支えリビングへと運んでいく。

「よし、これでOKかな。」

「よーお、旨そうな匂いがするな。」

「あゝ腹減った。」

と、朝の筋トレを終えたフォックスとファルコがグウと腹を鳴らしてリビングに入ってくる。

「おかえり二人共。」

「ピツカア!!」

「ただいま……あれ？親父と二人は？」

「ウルフとピチューは父さんを起こしに行つたよ。」

「親父まだ寝てんのか……もう8時になるぞ。」

「俺達は7時で、お前とピカチュウは朝飯作るために6時に起きたつてのにな。」

「今日はちよつと寝坊しちゃつた……いつもは5時に起きるのに。」

「ま、日曜くらいゆつくりしてもいいだろう。」

そう言いながらフォックスは自分の席に座り、朝食の乗ったテーブルを一通り見渡した。ファルコはふとあることに気付いた。

「あれ？野菜ジュースはどこ行つた？」

「あ、持つてくるの忘れた！」

「俺取つてくる。」

そう言うところファルコは体を反転させ、台所へ歩いていった。

と、彼と擦れ違いにウルフとピチュー、スネークがリビングに入ってきた。

「おつす。」

「おはようウルフ。」

「ピチュー！」

「おはようピチュー。」

「おはよー……。」

「おはよう父さ　　どうしたの？」

真っ黒に焦げ髪がパンチパーマになったスネークを見た途端、トレーナーは絶句しフォックスはやれやれと呆れたように頭を振る。

「気にするな、いつまでたつても起きねえ親父が悪い。」

「ピチューピチュー。」

そう言いながら二人は席につく。

「父さん大丈夫……？はい、これで顔拭きなよ。」

トレーナーが洗面所から取ってきた濡らしたタオルを差し出すと、スネークはそれを受け取り黒くなった顔を拭く。

「うつ……お前は優しいな……！！父さんをいたわってくれるのはお

前だけだ！」

「俺らにもいたわってほしかったらまず朝くらい早く起きろよ。」

「お前達な、日曜日くらい父さんをゆっくり寝かせるという優しさは無いのか!？」

『無えよ。』

「!.....お前達...何も声を揃えて言わなくても...!!」

「僕も同意見.....早く朝ご飯食べてくれないとテーブル片付かないし.....」

「お...お前まで.....!!」

フォックスとウルフに責められ、そしてトレーナーの言葉にとどめを刺されたスネークはガックリとその場にうなだれる。

「ピチュ〜!」

「ん?おおもう8時か。」

ウルフは近くにあつたりモコンでテレビをつける。

するとオープニングと共にテレビ画面に『仮面ライダー電』の文字が映し出された。

「おお、もう電の時間だったか。」

「やっぱ日曜はこれが無えと始まらねえな。」

「ピチュピチュ〜!」

その時、ファルコが台所から野菜ジュースを持って現れた。

「おっすお前ら。」

「よお、もう電始まってんぞ。」

「そうか。」

ファルコが席につくと同時にトレーナーとスネークも席につく。

「それじゃ、全員揃ったことだし、食べますか。」

トレーナーが言うと同は手を合わせ、彼もまた手を合わせる。

「父さんあいさつよろしく。」

「ん?俺か.....じゃあ背筋を伸ばして

」



「いただきます！」

「ピカチュ！」

「ピチュ！」

スネーク家の日曜の朝。

今日もお隣さん家に負けないドタバタした一日が始まる。

終わり。

## 日曜の朝はやっぱりコレ（後書き）

スネーク一家を書いてみました。彼らの見ている仮面ライダーを電にしたのは私の個人的な事情です…。（更新はかなり遅いですが私は電の作品も書いているので……）

## 時折見せる優しさがキユンとくる

夕食時のすま家の食卓。

『ご飯よー!』とサムスが叫ぶと、ファルコンの後にゾロゾロと子供達が食卓に集まってくる。

「おお、今日は唐揚げか!」

「鶏肉が安かったの。味見してないから美味しいか分からないけど……。」

「何を言ってる、母さんの作る料理はどれも天下一品だ!」

「まっ、あなただったら」

夫婦がイチヤつく一方で、アイクは自分の皿に盛られたキツネ色の衣を纏い神々しく輝く唐揚げに釘付けになっている。

「(……肉……。)」

「ペポ〜イ!唐揚げ唐揚げ〜!」

アイクの隣ではカービーが唐揚げを前に無邪気にはしゃいでいた。

「それじゃあ皆手を合わせて……いただきます!」

『いただきます!』

一同は挨拶を済ませると早速箸を持ち、みそ汁やおかずを手をつける。

「ん!唐揚げおいし〜!」

「旨い!ご飯に合うね!」

「やっぱり母さんの料理は最高だな!」

「ウフフ、良かった……付け合わせのキャベツとトマトも食べるの

よ。」

「えゝ！？」

『はい！』

ロイを除く他の子供達は元気よく返事をした。

「（…やはり…肉は旨い…。）」

肉が大好きなアイクは唐揚げを1個1個味わいながら噛み締め、気が付くと皿に乗っているのは1個だけになっていた。

（「…これで最後か…味わって食わな　ん？」）

ふと隣に目をやると、自分の分の唐揚げを既に食べ終えたカービーがアイクの最後の1個をよだれを垂らしながら見ていることに気付いた。

「！！！」

咄嗟にアイクは唐揚げを守ろうと箸を伸ばす。だが、カービーの様子がいっつもと違うことに気がついた。

いつもは相手の答えも聞かずにすぐ食べてしまうはずなのだが、先程からハツと気付いては頭を振り、またよだれを垂らして唐揚げを見てもハツと気付いて頭を振ることを繰り返しているのだ。

「……………どうした？」

「ポヨッ！？な、何でもないよ！！！」

「…嘘をつけ、いつもなら答えも聞かずに飛び付くお前が…何かあったのか？」

「ペポゝ……………あのね、この間メタナイトとご飯食べた時、僕メタナイトの分も少し食べちゃったの。その時ね、『自分のを食べたら人の中には手を出すな』って怒られちゃって……………だからね、本当はもっ

と食べたかったんだけど、僕はもう自分の分食べちゃったから、アイクは気にしないで食べてて！」

口でそう言いつつも、カービィは唐揚げを名残惜しそうな目で見つめている。

そんな彼を見たアイクがポツリと呟くように言った。

「……カービィ、唐揚げ旨かったか？」

「ポヨ……うん！すっごく美味しかった！」

「……そうか……」

するとアイクは『あ。』と声を上げ、カービィの後方を指差した。

「……カービィ……あれ、何だ？」

「ペポ？何？」

カービィは振り向き後方に何があるのか確かめた。

だがそこにあるのは食器棚だけで、これといって変わったものはない。

「アイク……何があるの？」

ポヨ？」

前に向き直したカービィは何気なく見た自分の皿に乗ってあるものに目を丸くした。

付け合わせの野菜も既に食べ、綺麗になった皿の上に1個の唐揚げが乗っているではないか。

「ペポ！アイク、何で…？」

「唐揚げ、旨かったんだろ？」

「ポヨ…でもアイクだってお肉好きなのに…。」

ポン、とカービイの頭に大きな温かいものが乗った。

「ポヨ…？」

それはアイクの手だと気付いた時、彼は穏やかな表情でこちらを見ていた。

「…いらん遠慮なんてするな…俺はお前らが嬉しそうに笑ってくれば、それでいい…。」

「…アイク…ペポ！ありがとう！」

カービイはその唐揚げをパクリと一口で食べ、よく噛んだ後ゴクリと飲み込む。

「ポヨ！美味しかった！」

「…そうか。」

カービイの満点の笑顔を見たアイクの顔にも、優しい笑みが浮かんだ。

カービィがその時食べた唐揚げは、ほんのりと優しい味がしました。

おまけ。

「あつマルス！あれ何！？」

「えっ何？どこ？」

「（今だ！！）」

シュバツ！！

（超高速で自分の皿からマルスの皿にトマトを箸で移動している）

「何もないじゃな……あれ？僕さっきトマト食べたはずなのに……」。

「

「まだ食べてないじゃないか、まだ若いのにボケるなよ。」

「アハハゝそうだねえゝ……………って、引っ掛かるかこのバカ！！」

「げっ！バレた！！」

「母さゝん！ロイがまたトマト残してるゝ！」

「まあ！ロイ、ちゃんと食べないと明日のおやつ抜きよ！」

「そんなゝゝゝ（泣）！！」

終わり。



## 時折見せる優しさがキュンとくる（後書き）

アイクは無愛想な分皆に優しいお兄ちゃん……という感じを書いてみました。アイクはマルス・ロイに並び書きやすいキャラクターです。（かなり性格オリジナル入ってますが）　　そしてかなり人気があります。まあ、私も気に入っていますが……無愛想な子、結構好きです。

可愛い寝顔にはイタズラをせよ

「ただいま帰りました……………あら？」

買い物から帰ってきたゼルダの目に入ったのは、玄関からリビングへと道しるべのように落ちているマントや肩当てなどだった。

その青いマントと茶色の肩当てを見た途端、これらはすべてアイクの物であることが分かった。

「もう、アイクったら……………脱ぎ散らかさないでといつも言ってるのに……………」

珍しく愚痴をこぼしながらそれらを拾いリビングに入る。すると、ソファで仰向けになりスヤスヤと寝息を立てて眠るアイクの姿があった。

「……………」

ゼルダは買い物かごとアイクの衣類を床に置き、爆睡しているアイクの元に近寄り、しゃがみこむ。

「……………ふふっ。」

彼のあまりにも無防備な寝顔が妙に愛しく感じ、ゼルダの頬が緩む。「戦っている時は勇ましいのに、こうして見ると子供のようなですね……………」

ツン、と指で頬をつつくとアイクは小さく唸る。

その反応が面白かったのか、今度はつついた頬を摘んで引っ張る。

「（あ…柔らかい……………」

ビロ〜ンと伸びたその柔らかさにゼルダは目を丸くする。

「……………ん……………」

アイクはピクリ、と眉を潜め、また小さく唸った。

「フフッ……………」

すっかり調子にのったゼルダは、その15分後にシークがリビングに入ってくるまで、何度もアイクの頬を引っ張り続けていた。

「アイク、ほっぺどうしたの？」

アイクの顔を見るなりロイが驚いたように問いかける。

彼の頬はゼルダが引っ張りすぎたせいで赤くなり、腫れてジンジンと痛んでいた。

「……分からん……昼寝から目覚めたらこうなっていた……。」

「寝惚けて無意識に何かやったんじゃないの？」

「……そうかもしれない……。」

アイクはロイの持つてきた冷え○タを両頬に貼る。

「……どうするのゼルダ、あれ……。」

「……調子に乗りすぎました……。」

「でも珍しいね、ゼルダがあんなイタズラするなんて。」

「ええ……アイクの寝顔がとても可愛らしかったのでつい……。」

「あれ？そっいえば前にもこんなことあったな。確かあの時はリンクが……。」

「……寝顔が、可愛らしかったのでつい……。」

「……………」

寝顔が可愛い人にちょっかいを出すゼルダ。

寝起きが超悪いマルスじゃなくて良かったと、シークは心の中で思いました。

終わり。

可愛い寝顔にはイタズラをせよ（後書き）

ゼルダは以外にイタズラ好き、という一面を書きたかったのです。

ちなみに被害者は、リュカ ロイ ネス ピッ

ト リンク アイクです。皆よく眠っているうちにやられるのでゼルダがやったということは知りません。

## 女の子は結婚とかに憧れるもの

すま家、庭。

ちみつこ達が庭で遊んでいる一方で、ファルコンとサムス、ゼルダは茶を飲んでいる。

「ふう、やっぱりゼルダの煎れた茶は旨いな！」

「そんな…恐れ入ります。」

「本当においしいわ…それにしても、今日は晴れて良かったわ。」

「そうだな。天気予報だと明日から梅雨入りらしいから、子供達は外で遊べないものな。」

「6月かあ……洗濯物も干せないし、陰鬱な月ね……。」

そう呟いたサムスはチラリとゼルダの方に目を向けながら言った。

「ねえゼルダ、今朝テレビでやってたの覚えてる？」

「え？はい…『ジューンブライド』のことですよね？」

「そう、『6月の花嫁』。この月に結婚した夫婦は幸せになれるのよ……私とファルコンが『夫婦』と定められたのは、去年の春だったものね……。」

「しかも式などやっていないから……母さんのドレス姿、見たかった……。」

「もう、あなただったら」

目の前でイチヤつく夫婦をよそに、ゼルダは結婚のことを考えていた。

「（『6月の花嫁』……ちょっと憧れます……相手は……。）」

そんな彼女の視界の端ではロイを鬼にマルス・アイク・リンク・シーク・ダークが缶蹴りをして遊んでいる。

あ、マルスの蹴った缶がロイの顔に直撃した。

その時、『ゼルダお姉ちゃん！』と叫びながらナナが走ってきた。  
「ナナ、どうしました？」

「あのね、あつちでござこ遊びやってるの。ゼルダお姉ちゃんも来て〜。」

ナナにグイグイと腕を引っ張られ、ゼルダは椅子から立ち上がる。

「まあ、何でしょう？」

「行つてきなさい、ゼルダ。」

「はい、じゃあ行きましょうか。」

「うん！」

ゼルダはナナに腕を引かれたまま歩いていった。

「皆お待ちせ〜！」

着いたのは家の裏側で、シロツメ草の花が沢山咲いている場所だった。そこにすま家ちみつこ達とシロツメ草で冠と花束を作っているネスとリュカ、そして失敗した花冠を頭に掛けられたカービイがいる。

「あら、皆さんお揃いで……。」

その時『お待ちせ〜』と向こう側から何やら白い布を持ったピットがリンクの手を引いて歩いてきた。

「リンク、貴方も連れてこられたんですか？」

「ああ、缶蹴りやってる最中にピットに呼ばれてさ…まあ、鬼が再

起不能になったからちようど良かったけど。」

「さあ二人共、ここに座ってください。」

ピットに促され二人は彼が指差した所に隣同士で座る。

「ネス、リユカ、出来た?」

「OK、今出来たところだよ。」

「僕もです。」

「よし、じゃあ始めようか!」

『お〜!』

盛り上がるちみつこ達に着いていけず、『あの…』とゼルダが声を掛ける。

「なあに?」

「今から何をして遊ぶんですか……?」

「あのねあのね……」

『結婚式こつこ!』

『……へ?』

いきなりすることに二人がポカンとしていると、ネスが事の成り行きを説明し始めた。

「ナナが母さんからジューンブライドの話を聞いて、それで『やりたい』って言い出してね。」

「リンク兄ちゃんの次はポポがお婿さんやる〜!」

「ナナはお嫁さんやるの〜!」

「……今つてもしかして、俺とゼルダが結婚するってやつ……?」



リンクが顔を強ばらせて聞くと、ちみつこ達は一斉に笑顔で頷いた。

「えええ〜っ!？」

「あら……。」

途端、リンクは顔を真っ赤にして慌てふためき、ゼルダは落ち着いていながらも頬を赤く染めている。

「そういうことだから、ハイこれ。」

カービィは立ち上がり、先程まで作っていたものを二人に差し出す。それは小さいシロツメ草の花で作った指輪だった。

「まあ、可愛い……。」

「へえ〜器用なもんだなあ。」

二人は早速それを指にはめてみる。

「ゼルダさん、ちよつと失礼します。」

「?」

名を呼ばれピットの方を見ると、不意にバサリと頭に何かを掛けられた。

「!…何ですか?これ。」

それは先程ピットが持ってきた薄い素材の白い布だった。

「シークさんから借りました、ベールの代わりです。」

ネスが『ハイ、仕上げ』と花冠を渡し、ピットはそれを布の上から被せた。

「ゼルダさん、どうぞ。」

そう言つてリュカが差し出したのは、彼が作っていた小さな花束だった。シロツメ草の花の他に忘れな草やナズナなど、様々な花がカラフルに束ねられている。

「まあ…これはリュカが作ったんですか?」

「はい!頑張りました。」

「すごいです、お店で売ってるのよりずっと綺麗……。」

ゼルダが褒め称えると、リュカは『エヘヘ』と照れたように笑った。

「動かないでね……。」「

ネスに蝶ネクタイ（借りた）を結んでもらいながら、リンクは隣のゼルダをチラリと見る。

偶然にも彼女の今日の服は白いワンピースで、白いベールを被り花束を持ったその姿はまるで本当の花嫁のようだった。

「（ゼルダ……すっごく綺麗だ……！！！）」

「ああもう！動かないでってば！！！」

「うわっゴメン！！！」

「ペポ〜！準備完了だね〜！」

『わあ〜！』と盛大に拍手をしたちみっこ達の前には、ごっこ遊びにしては本格的な花嫁と花婿になったゼルダとリンクが互いに顔を合わせ照れくさそうに微笑んでいた。

「じゃあ牧師は僕がやるよ。」

『ハイこれ』とカービィがどこから出したのか牧師の帽子と聖書をピットに渡す。

「かなり本格的だね……では始めます。」

帽子を被ったピットはゴホンと咳払いをすると聖書を開き、二人と向かい合う形に立つ。

他のちみっこ達は期待の眼差しで彼らを見ていた。

「新郎新婦、誓いの言葉……リンク、貴方は新婦・ゼルダを幸せにすると誓いますか？」

「はい、誓います……。」

「ゼルダ、貴方は新郎・リンクと幸せになることを誓いますか？」

「……はい、誓います……。」

「……では、互いに指輪の交換を。」

リンクとゼルダは向かい合い、ニコリと微笑み指輪を外し、相手の左手の薬指にはめこんだ。

「ゼルダお姉ちゃん！ブーケトスやって〜！」

「ええっもう!?」

「分かりました。」

ゼルダはリンクと共に立ち上がり、ちみっこ達の方を向き花束を構える。

「行きますよ………」

それっ！」

掛け声と共に空を舞った花束。

いつかもう一度、今度はぐっこじゃなくて本当に投げてみたいとゼルダは思った。

おまけ。

「……放せシーク!!俺のゼルダが取られちまうだろうが!!」

「いつから君のものになったの?二人の幸せの門出を邪魔しちゃダメだよ。」

「リンクったら……いなくなったと思ったたらあんなことして……。」

「先輩、幸せそうだなあ……。」

「……zzz……。」

「とりあえず、僕を差し置いて何か楽しそうなことした罰として写真撮ってやる。」

パシヤッ

「…カメラ、どこから?」

「気にしない気にしない。」

その後、家族全員に写真を見られ、真っ赤に赤面したリンクとゼルダであった。

終わり。

女の子は結婚とかに憧れるもの（後書き）

リンクとゼルダでジュースブライド風に書いてみました。この二人は書いて楽しいです（＾o＾）

真面目な彼らだってこんなときもある

「今日泊めてください！」

すま家の玄関。

背中に荷物を背負い、後ろにピカチュウとピチューを連れた彼は真剣な様子で出迎えのリンクに頭を下げた。

「……まあ、とりあえず上がって……。」

二人がリビングに入ると、突然の来客にテレビを見ていたマルス・ロイ・アイクの視線が集中し、彼に一番懐いているリュカは『トレーナーさん！』と真っ先に飛び付いた。

「はい、どうぞ。」

リンクにお茶を差し出され、『ありがとうございます』とトレーナーは深々と頭を下げる。

「で、今日はどうしたの？いきなり泊めてだなんて……もしかしてケンカして家出てきたとか？」

「……………！！」

マルスが冗談半分で言うと、トレーナーは元々不機嫌だった顔をさ

らに険しくした。

「あれ…凶星……?」

「……ケンカじゃありません、全部あつちが悪いんですから……。」「  
そう言うトレーナーは事の成り行きを淡々と説明し始めた。」

「おい、お茶くれ。」

「はいはい。」

「おい！リビングのここ汚れてんぞ！ちゃんと掃除したのか!？」  
「あつ！ごめんなさい!！」

「おい息子よ、パンツに穴空いちゃったから縫ってくれ。」  
「……うん……。」

「おい、味噌汁塩辛えぞ！てめえ俺を殺す気か!？」  
「……ごめん……。」

「おいトレーナー!！」

「トレーナー!！」

「トレーナー！しっかりしろよ!！」

「息子よ……。」

「~~~~~~~~っ!!！」

いつもいつも頑張ってるのに文句ばかり!!！僕は召し使いじゃない



いつてのー!!」

「バアンツー!と、テーブルが壊れるのではないかというくらいに拳を叩き付け、向かいのマルス達は驚きのあまりビクリ、と跳ね上がった。」

「ピイ…ピチュ…。」

「い…いつものトレーナーさんじゃない……。」

彼の隣にいたリュカとピチューは普段の優しいトレーナーからは思いもよらない姿に怯えて泣き出しそうになっている。

「…あつ!ごめんなさい……。」

「いや、いいよ…ちょっとびっくりしたけど……。」

「本当にごめんなさい、つい興奮しちゃって……今の話の通り、あの人達にとつて僕の存在がいかに重要か、それを気付かせるために今日一日この家に泊めて欲しいんです!」

「…それはつまり、家事の出来ないあいづらに家事はいかに大変かを思い知らせるということか……?」

「そうです!」

「ピカチュウとピチューはなんで一緒に?」

「ピカ〜ピカチュー!」

「2匹共ついてきちゃったんですよ。ピチューはピカチュウに、ピカチュウは多分サムスさんに会いに来たんだと思います……お願いします、ダメなら他を当たりますけど……正直この家が一番居心地いいんですよ。」

「リンクさん、僕トレーナーさんにお泊まりしてほしいです……。」

「そうだねえ……どうするマルス?」

「うーん、僕は泊まるのOKなんだけど……とりあえず母さんがそろそろ帰って来るはずだからその時に聞いてみよっか。」

その時、『ただいま〜』という明るい声が玄関から響き、それに続き『お邪魔します……』と低い声が聞こえた。

「母さん来たね……あれ?お客さんかな?」

「まさか…父さんがフォックス達が僕を迎えにきたんじゃない？……！？」  
そんな不安もつかの間、リビングに顔を出したのは買い物帰りのサムスと、シヨルダーバッグを肩に掛け両手に買い物袋を持ったルカリオだった。

「あら、トレーナー君来てたの？いらつしゃい。」

「どうも、お邪魔してます。」

「ピカチュウー！」

「ピカチュウ、それにピチューもいらつしゃい。」

「ピチューピチューー！」

「母さん何でルカリオさんと……？まあいいや。あのさ、今日トレーナーが家に一泊させてほしいらしいんだけど、いいかな？」

「いいわよ、ちょうどルカリオさんも一緒になるけどいいかしら？」

「…………へ？」

サムスの言葉に一同は思わず間抜けな声を出す。

「ルカリオさん、しばらくリビングにいてください。リンク、お茶出してあげて。」

「あつ、うん。」

台所に向かうリンクと自室に戻るサムスの背中を見送ったあと、一同は席についたルカリオに視線を移す。

「はい、お茶です。」

リンクがルカリオに茶を差し出すと、『すまない』と彼は小さく言った。

「ルカリオさん…今日はどうしたんですか…？」

マルスが尋ねると、ルカリオはさっきまで平然としていた顔をムスツとさせて答えた。

「……今日は、あの家に帰りたくないだけだ……。」

「帰りたくない、って……もしかして家出？」

ロイの言葉にルカリオはコクリと無言で頷いた。

「本当ですか！？実は僕も家出してきたんです！」

「何！？そうなのか？」

「…今日は家出デーなのか……？」

ボソリ、とアイクの呟きにロイは『アハハ…』と苦笑いを返す。

「ルカリオさん、家出の原因は何なんですか？」

マルスの問いにルカリオは嫌なことを思い出したのか、再び顔をムスツとさせて言った。

「あいつらが全部悪いんだ……！！」

するとルカリオは事のいきさつを説明し始めた。

「ルカリオ、コーヒーを煎れてくれ。」

「分かった。」

「ルカリオ…廊下が汚い、掃除し直せ。」

「は…はあ……。」

「ルカリオ！私のマント、色落ちしているじゃないか……！どうしてくれる……！」

「うわっスマン……！」

「おい……私が帰って来るまで私の部屋を掃除しておいてくれ……」

「な……っ……！」

「ルカリオすまん……お前の大事なプリンを食べてしまった。」

「え……！？」

「お前のモンブランを食べてしまった……まあ、名前を書いておかない奴が悪い。」

「~~~~~っ!!」

「あいつら私が反論しないからといって調子に乗りやがって!!家事の大切さってものを知らないのか!!あとプリンとモンブラン返せ!!」

ダンッ!!とテーブルが割れるのではないかというくらいテーブルを手で叩き、向かいのマルス達(+トレーナー達)は驚きのあまり再びビクリと跳ね上がった。

「……ふう、それで家を出てどうしようかと考えていた所をサムスさんに助けられたというわけだ。」

「何か……家出の理由がトレーナー君と似てるね……。」

「あなたも家族のいい加減さに疲れて!?僕もそうなんです!!」

「何!?そうなのか!!」

「何だか僕達、似た境遇にいるんですね……。」

「そうだな……。」

「ピチュ〜?」

「うん、そうだね。あの二人変な親近感持ってるよね。」

マルスがピチューを膝に乗せて話していると、『あっ』とリンクが

時計を見ながら何やら思い出したように声を上げ、立ち上がった。

「先輩、どうしたんですか？」

「そろそろおやつ作らなきゃ。ガノンドロフから貰った苺がまだ大量にあるから早く食べないと……。」

「あっリンクさん、僕も手伝います。」

「私も手伝おう。」

「ええっ？でもお客に手伝わせるわけにはいかないから……。」

「いえいえ、今日一日お世話になるんですからこれくらいはやらな  
いと！」

「そう……？じゃあ二人にもお願いしようかな？」

「はい！」

「任せてくれ。」

二人は立ち上がると、リンクと共に台所へと向かっていった。

「……そういえば、あの二人って各家の家事係なんだよね？残され  
た人達ってどうなるんだろう……？」

「……さあな……。」

「家事やったこと無いと、何にも出来ないんじゃないですかねえ……  
……？」

「さあね。それより今日のおやつだよ！3人もいれば豪勢なの出  
来そうだよ。」

「……君のそのどんな状況でも決して崩れないマイペースさが羨まし  
いよ、マルス……。」

その後、各家で『家事に疲れました。サヨウナラ。』と書かれた置  
き手紙を見た家族が悲鳴を上げたのは言うまでもない。

次に続く。

**真面目な彼らだってこんなときもある（後書き）**

トレーナーは人気が高い子です。家族とリユカ以外は敬語で話します。ルカリオは基本温厚なとてもいい人です。

さて、家事係に家出をされてしまった各家はどうするのでしょうか……次回にご期待ください。

「ごめんなさい」ですべて解決

『わあ〜!』

リビングのテーブルに並べられた沢山のおやつの数々にすま家一同は感嘆の声を漏らす。

「すっごくいい! おやつがたくさんだよ!」

「わ〜いおやついっぱい!」

「ピチュ〜」

「本当ねえ、こんなに大変だったでしょ?」

「まあね、でも途中からリユカと帰ってきたゼルダとシークにも手伝ってもらったし。」

「全く…乱闘から帰ってやけに人が多いなと思っていたら、いきなり『手伝って』だなんて……。」

「こんなに沢山作れて楽しかったです。」

「そうなんだ〜……それにしても、おいしそ〜。」

ロイは口端のよだれを手の甲で拭いながらもう一度おやつを見渡す。

「え〜と……苺のデコレーションケーキに苺のタルト、苺のシフォンケーキ苺ロールケーキ、苺ムースに苺ババロア、苺プリン、スコーンと苺ジャムと苺大福、そして極めつけは……僕の大好物のシュークリーム! 今回は苺クリーム入り」

「冷凍庫に苺シャーベットがあるよ。」

「…苺三昧だな…。」

「これだけ使ってもガノンドロフの苺、まだ2箱あるよ……。」

「どれだけくれたんだあのおっさんは……。」

呆れるロイの後ろでマルスが堂々と苺大福をつまみ食いをし、シークに頭をこつかれていた。



一方、スネーク家。

「……親父、何だこれ？」

そう言つてウルフが指差したのは、一枚の皿に乗つたスルメである。

「スルメだぞ。」

「スルメくらい分かるよバカ。」

「ファルコ！親に向かってバカはないだろ！」

「それは置いといて、俺が聞きてえのはこのスルメは何なんだつてことだよ。」

「これか？これはな……」

今日の、おやつ……。」

『………………。』

「何で俺らの今日のおやつがスルメなんだよ！？」

ウルフはスルメをつかみスネークへと投げ、顔にスルメが直撃した彼は『おぶうつ！』と声を上げる。

「仕方ないだろウルフ、トレーナーがいないんだからよ。」

「てかさつきホットケーキ焼いてたよな！？あれはどうなったんだよ……！」

「あれか？あれなら親父が火加減を誤つて消し炭になっちまった。」

「どう火加減を誤ればそうなるんだ！！てかなんであいつは家出したんだ！？親父の足が臭えからか！？」

「それは酷いぞファルコ！……しかし、今思えば俺達はあの子に家事の何もかもを押し付けていたな。疲れたという言い分も納得できる……。」

「…そう言えば俺、あいつに何かしてもらって『ありがとう』って言ったこと無かったっけな……。」

スネーク達の表情に段々と反省の色が見えてくる。

そんな彼らに、フォックスが追い討ちの一言。

「……今日の夕飯、どうする？」

『あ。』

ガシャーンッ！

パリーンッ！

洗い物をするメタナイトの手から皿が滑り、次々と床に落ちては派手な音を立てて碎けていく。

「……また割ってしまった……。」

メタナイトは溜め息をつき割った皿を片付ける。

その時、ミュウツーが掃除をしているはずのリビングから、ガシャーンッ！！と派手な音が聞こえた。

「！？」

何事かとメタナイトはリビングまで走ると、割れた窓の前にハタキ

を持ったミュウツーが呆然と立っている。

「ミュウツー……どうした？」

「この使い方が分からず振り回していたら、割ってしまった……」

そう言いながらミュウツーはハタキを持って見せる。

「……やはり家事とは難しいな、こんなことを毎日あいつはやっていたんだな……。」

「そうだな……しかも文句一つ言わずにやっているんだ、文句ばかり言う私達に不満が生じて家出するのも無理はない……。」

二人の脳裏に、テキパキと全ての家事をこなしていくルカリオの姿が映った。

あんなに一生懸命な彼に自分達は『ありがとう』の一言も掛けてやったことがないことに気付き、申し訳ないという気持ちでいっぱいになった。

「……ミュウツー、後でプリンとモンブランを買いに行こう。」

「……そうだな……。」

「ところで、今日の夕飯はどうしようか？」

「あ。」

午後5時。

そろそろ夕飯の支度をしようかとサムスがエプロンをつけていると、『サムスさん』とトレーナーとルカリオ、ピカチュウ、ピチューが台所に入ってきた。

「あら、どうしたの？」

「僕達に夕飯の支度の手伝いをさせてください。」

「ピッカア！」

「ピチュ〜！」

「え？でも、お客さんにそんなことさせるわけにはいかないわ……。」

「

「いえ、私達は今日泊めてもらっているのですから、これくらいはやらないと。」

「そう……？じゃあお願いしようかしら。」

ピンポーン

「あら……？今日はお客さんが多い日ね。」

サムスが入り口から覗くと、リビングから出たシークが玄関へと向かっていた。

「はい、どちら様……………何だフォックスか。」

「何だとは何だ。相変わらず嫌な性格してんなお前は。」

「余計なお世話。で、何の用？また修理代の請求？」

「そつだ！早く修理代よこ」

「違うだろお……！」

スパアンツ！と子気味良い音をたて、ファルコがフォックスの後頭部をファルコは平手で殴った。

「ぐはあつ……！……………痛えなこの野郎……！」

「この家に来た主旨を勝手に変えてんじゃねえよ！」

ギヤーギヤーとケン力をする二人の後ろから、スネークとウルフがずずいと入ってくる。



突然スネークは涙を流し叫びながらトレーナーの元へと走っていき、彼の手前で止まると、ギユウウツとピカチュウ、ピチューと一緒にトレーナーを力いっぱい抱き締める。

その騒ぎにリビングにいたマルス達、台所にいたサムスとルカリオも扉から顔を出し様子を見ている。

「ピイイ……！」

「ピ……ピカ……？」

「と、父さ……苦しいよ……。」

「うおお……っ……！父さんは悪い父さんだった……！お前がこんなに疲れていることに気付けず、迷惑ばかりかけて……本当にすまなかった……！！」

「……父さん。」

オイオイと泣くスネークの後方、トレーナーにとっては正面からフオックス達が神妙な面持ちで近付いてくる。

「え……と……その……今まで苦労かけっぱなしで悪かった……。」

「面倒くせえけど、これからは俺達に出来ることなら何でも手伝うからよ……。」

「もうお前に苦労はかけたくねえからな……。」

「皆…………。」

「……あの……感動的なシーンの最中申し訳ないんだけど……」

靴脱いでから家に上がってくれないかな？」

『へ？』

シークに言われスネーク達が自分の足元を見ると、いつの間にか靴を履いたまま、しかも床に足跡を残していることに気付く。

「おわああつ！！申し訳ない！！」

彼らが慌てて靴を脱いだその時、『ルカリオ！』と玄関から声が響いた。

「？……お前達！！」

ルカリオが玄関を見ると、開いたままのドアから、小さな箱を持ったメタナイトとミュウツーが入っていた。

「ルカリオ……ここにいたのか……。」

「……何だお前達！家事が出来ないからと言って私を探しにきたのか！？」

ルカリオは腕を組み苛立ちを含んだように言いながら玄関へと歩み寄る。

すると、メタナイトは持っていた箱をルカリオに差し出した。

「ん？何だこれは……。」

箱を受け取り中を見ると、そこには以前二人に食べられたプリンとモンブランが入っていた。

「すまない、ルカリオ……！」

メタナイトはその場に手をつき、土下座をする形で頭を下げた。

「私達はお前の苦労も分らずに勝手ばかり言ってしまい……思いやりの心を忘れるとは、騎士として失格だ！！本当にすまない……！！」

「……私からも謝っておこう……すまなかった……。」

「……お前達……。」

何度も頭を下げるメタナイトと、不器用ながらも自責の念に気付き謝ってくれたミュウツーに、いつしかルカリオの中の怒りは治まっていた。

「……顔を上げてくれ、メタナイト……ミュウツー、ありがとう……」

私も家出なんて幼稚すぎた……お前達には迷惑をかけたな。」

「フン……………」

「ルカリオ……………」

ぐうつうつうつ

またもや感動的シーンを壊したのは、スネーク達とメタナイト、ミユウツーの大きな腹の音であつた。

「……すまねえ……おやつがたったのスルメ1枚だったもんだからよ……」

「家は紅茶1杯だ……………」

「この家に来た本来の理由を思い出した……………」

6人は一斉にサムスの方を向き、声を揃えて言った。

『お願いします……！夕飯、恵んでください……！』

その日の夕飯は作り手の人数も多いためか、3家合同の豪華なものになった。



食べ終わった頃にはすっかり外は暗くなり、せつかなので皆すま家に一泊した。

次の日、自分のいない間に起こった家の惨状を目の当たりにしたトレーナーとルカリオが悲鳴を上げたのは言うまでもない。

終わり。

「ごめんなさい」ですべて解決（後書き）

スネーク一家とメタナイト一家中心に書いてみました。本来はこの家出ネタはマルスでいこうと思ったのですが、何だかマンネリになってしまい却下……読者の皆様が楽しんでいただけたら幸いです。

## 人生いつ何があるか分からない

窓から夕日が差し込み、オレンジ色に染まったロイの部屋に二人はいた。

マルスは驚愕の表情で、ロイは辛そうな表情をしている。

「…ねえ…もう一度言って…君、今何て言った？」

「何回も言わせるなよ！だから……………」

アイクが、元の世界に帰るって。」

「…………嘘…………」

「僕もさっき、リンクに聞いて知ったんだ…………信じたくないけど、本当みたい…………。」

「…………確かめてくる……！」

「あつ…………おいマルス……！」

部屋を飛び出したマルスをロイは慌てて追い掛ける。

階段を降りリビングに行くと、ファルコンとサムスが茶を飲んでいた。

「あら、どうしたの？」

「……アイクは…！？」

「アイクか？まだ乱闘から帰ってないぞ。」

「そう……ねえ二人共…！」

「？」

二人はいつもと違う様子のマルスに目を丸くする。

「アイクが帰ること……知ってた……？」

「…？ああ、知っているが…。」

「何で…！？何でアイク帰っちゃうの！？マスターに何か言われたとか……！？」

「いいえ違うわ……」

アイクは自分から帰ると言い出したのよ。」

「え………？」

自分、から………？」

「母さん…それ本当…？」

「ええ、でもすぐ」

「……………っ…！」

サムスが言い終わらないうちにマルスは玄関へと走っていき外に出た。

「あ……っマルス…！母さんゴメン…！」

ロイも後を追って外に出る。その様子を二人はキョトンとした顔で

見ていた。

「どうしたんだ？ マルスの奴……。」

「最後まで話も聞かないでねえ……。」

マルスとロイが着いたのはスマブラスタジアムの放送室だった。

「マスター！ どういうこと！？」

マルスがノックもせずドアを開けると、マスターとクレイジーは驚いた顔でこちらを向いていた。

「な……何だお前らいきなり……。」

「どういうこととは……何のことですか？」

「アイクが帰るってこと、何で僕らに教えてくれなかったんだよ！？」

「ああ……そのことですね……。」

マスターはいつものように笑みを湛えると、放送室の窓から乱闘をしているフォックスとクッパ、そしてアイクを見る。

「……まあ、教えてくれなかったことはもういいや……それより、何で帰るのか理由くらいは君に言っただろ……！？」

「ええ、確かあちらの世界の団員達や仲間の様子が心配だと。あと妹さんがどうしてるか気にかかるそうで……。」

「妹……？？」

「ミストちゃんのことだよ。アイクが前に話したろ？ 両親が死んで、たった一人の妹だけが血の繋がった家族だって……。」

ロイの説明でマルスは以前アイクが自分達に妹のことを嬉しそうに話しているのを思い出した。

「（たった一人の……アイクの『本当の家族』……。）」

「それでマスター……いつ帰っちゃうの……？」

「……明後日ですよ。」

『明後日……！？』

あまりにも早い別れの時にマルスとロイは驚き絶望する。

「引き止めようと考えているのならよしなさい。貴方達のわがままでアイクが帰国を取り止めたら、彼を待っている人達はどんな思いをするか……。」

『………………。』

マスターに強い口調で言われ、二人は返す言葉も見付からず俯き黙りこくる。

その時、窓の向こうで試合の決着がついたようだった。どうやらアイクの勝利で終わったらしい。

「マスター、試合終わったぜ。」

「そのようですね……さあ貴方達、せっかくなのでお兄さんを迎えにいつてあげては？」

「……………行こう、ロイ。」

にこやかに言うマスターと対称的に、マルスは暗い表情のまま背を向けるとガチャリとドアを開け、放送室を後にした。

「あ……うん、じゃあマスター、クレイジー、失礼しました……。」

「ええ。」

「じゃあな。」

ロイはペコリと頭を下げ、部屋を出てドアを閉める。

その様子を見ていたクレイジーが、ポツリと呟くように言った。

「……アンタも性格悪いな、マスター……。」

「え……？何のことでしょうか？」

「一番大事な所、あいつらに話してねえじゃねえか。絶対わざとだろ？」

「フフフ………そうでしたね。」

相変わらず笑みを崩さないマスターに、クレイジーは呆れた表情をする。

スタジアムの休憩所。

自動販売機の近くの椅子にマルスとロイは座っていた。

ブラブラと足を動かして遊んでいたロイは先程買った梅よしを一口飲み、チラリと隣のマルスを見ると、彼は壁に寄りかかり俯いている。

「マルス……控え室にアイク迎えに行かないの？」

「うん……今アイクの顔見たら、泣いちゃいそうだから……。」  
そう言ったマルスの声は既に震えていた。

「そう……実は僕も同じ……。」

そう言って苦笑したロイはペットボトルを持ち上げ、梅よしを一口飲む。

「……………ねえ、ロイ。」

「ん？何？」

「…………『本物』と『偽物』、どっちがいいか、って聞かれたら……君は何て答える…………？」

「…………『本物』の方がいいって答えるね。」

「……そうだね、『偽物』なんかよりも『本物』の方がいいに決まってるもの……」

……………でもさあ……………！」

ポタ、ポタと雫が1、2滴、握った拳と彼のズボンに垂れる。

「……マルス……？」

「僕は『偽物』だとしても、今のすま家がいい……！！父さんがいて、母さんがいて、皆がいて、僕がいて、ロイがいて……」

アイクがいて……！！

でもさ……やっぱり『本物』の家族には敵わないんだよね……良かったじゃない、これでアイクも傭兵団の皆や妹にも会えるんだから……

……でも……明後日で

アイクがいなくなっちゃうよお……！！」

とうとう堪えきれなくなり、マルスは両手で顔を覆い泣き出した。

「……マルス……。」

ロイは慰めるようにマルスの肩にそつと手を置く。  
手の平を伝ってマルスが震えているのが分かった。

「（……いつも偉そうにしてるから……こんなマルス、初めて見た……。）」

泣かないでよ、マルス……君が泣いたら、僕まで泣きたくなるじゃないか……僕が涙線ゆるいの知ってるくせに……！！」



泣きじゃくるマルスの頭を撫でていたロイの両目から雫が次々と溢れ、頬を伝っていった。

別れはいつか来るものと分かっていた

でも 分かっていただけで覚悟なんてしていない

だってそんなの無理に決まっているもの

「ねえロイ………僕決めたよ!」

散々泣いた後、ロイの梅よ しを半ボトル程飲んだマルスが力強い口調で言う。

「何を決めたの? ってかそれ、僕の梅よ し……。」

「当日は笑ってアイクを送る! 明日は絶対泣かない! ……君もそうするよね?」

「当たり前! 最後まで笑って突き通そうぜ!」

「涙腺ゆるい君に出来るのお?」

「何だど? 出来るに決まってるだろお!!」

ケン力越しになりながらも、最後は互いの顔を見合わせ『プツ』と

吹き出し笑い声を上げていた。

「…お前ら、何をしている…?」

『……………!』

待ち望んだ声に顔を上げ、向きを変えると

『アイク……………!』

「…そんなに驚いた顔をしなくても……………どうした?俺の試合でも見にきていたのか……………」

「えっ!?う……………うん!まあね。」

アハハ、とロイが笑う後ろでマルスは立ち上がると、アイクの元に駆け寄りボスツと勢いよく抱きつく。

「…マルス……………」

「えへへ。お疲れ様、アイク。」

「ああっずるいマルス!僕も。」

ロイも負けじと梅よしを持ったまま駆け寄り、ボフツとアイクの背中に抱きつく。

「…何だ?お前ら……………」

「まあ旦那、気にせず。」

「…気になる…いいから一度放れる……………」

『ええ〜!』

「放れる…動けん…!」

アイクに言われ二人は渋々放れる。

「…疲れた…喉が渴いたな……。」

「梅よ しあるよ。マルスに飲まれて半分しか残ってないけど、飲む？」

「…くれ……。」

ロイから梅よ しを受け取り、アイクはそれを一気に飲み干す。

「…ふう、そろそろ帰るか……。」

「そうだね、今日の夕飯何かな？」

「しょうが焼きだって。母さん朝言ってたよ。」

「肉………！！」

「良かったね、アイク」

そんな他愛もない話をしながら、3人は歩き出した。

ずっと続くと思われていたこの時間も、終わりを告げるときだって来る

その時に悔いが残らないように、今出来る限りの思い出作りをしよう。

もうすぐで行ってしまう、大好きな兄のために。

次に続く。

## 人生いつ何があるか分からない（後書き）

最終回一歩手前の話でした。『すまん家』は次の話で最終回を迎えます。しかし『すまん家』はまだ終わり迎えるわけではありません。実は私、『すまん家』のセカンドシリーズを書こうかと考えているのです！新シリーズからはいろいろ新しいことが始まるのでこちらの方はこの次で打ち切りたいと思います。なぜ最終回の時にこのことを報告しないのかと申しますと、この作品を読んでくださっている方々に前もって報告しておこうと思ったからです。では、最終回まで楽しんで読んで下さい。

思い出は多いにこしたことはない

すま村の朝。

寝ぼすけのアイクはまだ自室のベッドでスヤスヤと寝息を立てていた。

バンッ！

だが、そんな平和な時間も突然部屋に入ってきた二人の弟達によって妨げられる。

『起きろ、アイク〜!!』

「あらアイク、今日は早いね。」

眠たそうに目を擦り席につくアイクを見て、サムスは驚いたように言う。

「…お前ら…なぜ起こした…?」

「だって〜今日は徹底的にアイクと遊んでもらうんだもん」

「そうそう、思い出作りと洒落こもっぜ」

「……?」

ロイの言葉に首を傾げ、アイクは皿に乗ったトーストを一枚取り口に入れた。

朝食を済ませた後、3人は外に出るとすま村公園に向かう。

「…なぜ外に出る……?」

「せっかく天気がいいんだしさ、外で何かして遊ぼうよ。」

「…そうか…。」

「あつ、いた!おゝい皆ゝ!」

ふとマルスは前を向くと、遙か前方に集まっているすま家一同とスネーク家の子供達、マリオさん家のヨッシーにプリンの存在に気付き手を振る。

「あつ!プリンちゃ」

「アイク様あつ!」

プリンはアイクを見るなりガバリと抱きつき、それを見たロイは『うっゝ…』と悔し涙を流した。

「アイク様……今日もカツコイイでしゅゝ!」

「そ…そうか……。」

「3人共、おはよう。」

「ピカチュ!」

「遅いよ君達。」

「いやあゴメンゴメン、アイクがなかなかご飯食べ終わらなくて。」

「ふうん…まあいいや、じゃあ始めようか。」

そう言うとしークはどこからか空き缶を取りだし、それを地面に置く。

「…おい、今から何を始めるんだ……?」

「見て分からない?皆で缶蹴りをやるんだよ!」

「…なぜ?」

「いいからいいから!さあ皆、鬼決めるからじゃんけんしよ!」

ロイが右手をかかげると皆も同じように手を上げ、マルスに『早く』と促され、アイクも渋々右手を上げる。

『ジャンケンポンッ！』

「アイク兄ちゃんの負け〜！」

「アイクったら本当じゃんけん弱いね〜。」

「……仕方ない。」

アイクは缶の近くに屈むと『1…2…』と小声で数を数え始めた。その間に他の皆は隠れ場所を探そうと公園内を駆け回る。

「……始まったね、『思い出作り計画』。」

茂みの中、ロイは隣のマルスに期待に上擦ったように話しかける。

「昨日の計画通り、上手くいくなあ………？」

「大丈夫だよ！二人であんなに考えたじゃない。」

「……でもこうして考えると、アイクと遊べるのも、今日で最後なんだよね……。」

「……そう……なんだよね……。」

『最後』。

その言葉が二人の胸に突き刺さる。

ふと二人の脳裏に、昨日の夜の光景が蘇った。



午後11時過ぎ、ロイの部屋。

「……よし！こんなもんかな？」

出来上がった計画表を見直し、ロイが自信満々に言う。

「まずは午前中皆と公園で遊んで、午後は3人で村を散歩。夜は強制的にでも一緒に寝る……完璧な計画だね！」

「どこが完璧なんだよ、かなり大雑把じゃないか……しかも君、字が汚い。」

「ほ、放つといてよ！」

プウ、とロイが頬を膨らましそっぽを向くと、マルスは座っていたベッドにドサリと寝転んだ。

「マルス……眠いんだったら部屋に帰れば？」

「やだよ面倒くさい……今日はここに泊まるよ……。」

「ええっ！？……ったく、しょうがないな……もう遅いし、僕も寝よう。」

ロイは電気を消すと布団に潜り、マルスもロイの布団を引っ張りロイの枕を強奪するとそれに頭を乗せた。

「マルス君……枕返してくれませんか……？」

「嫌です」

「……………」

仕方なくロイは枕無しで眠ろうと目を閉じると、『ねえ、ロイ』とマルスが話しかけてきた。

「……どしたの？」

「……明日になったら、アイクはその次の日にいなくなるってことなんだよね……？」

「……そうだよ。」

「アイクといられるのは……明日で本当に『最後』になるんだよね……。」

「……そうだよ。」  
「……ロイ……。」  
「何……？」

「……『最後』は、笑って見送って、アイクを安心させて国に帰ってもらおう？」  
「……うん……。」

『最後』      『最後』

普段何気なく使っているこの言葉が最も残酷なものに聞こえ、ロイはマルスの言葉にすぐ返事が出来なかった。

「……見つけた。」  
「……！？」

突如頭上から声が聞こえ、二人が驚いて上を向くと、アイクが勝ち誇ったような顔で見下ろしていた。

「ア……アイク……！」  
「……お前から最後だ、後は全員見つけた……。」

「そういえばアイク、じゃんけん弱いけど隠れんぼで見つけるの、すごく上手いもんね……………」

二人は立ち上がり汚れをはたくと、『アイク様〜!』とプリンがアイクめがけて勢いよく突っ込んでくる。

「……………!」

アイクが咄嗟に避けると、ガンッ!と鈍い音を立ててプリンは木に激突した。

「あゝ!プリンちゃん!」

目の前で起こった事故にロイは悲鳴を上げ、慌ててプリンに駆け寄る。

だが彼女は何事もなかったかのようにムクリと起き上がり、改めてアイクに飛び付く。

「んもおアイク様ったら照れ屋しゃんなんだから〜」

「(…タフだな…こいつ……………」

「おゝい何やってんの?早く次の鬼決めようよ!」

「…ああ…今行く…」

アイクはプリンを引っ付かせたままマルスとロイに背を向け、皆の集まっている方へ歩いていく。

『……………』

その後ろ姿を明日見ることになると気付き、チクリと針で刺したように胸が痛くなり、二人は少し沈んだ気持ちのまま皆の元へと歩き出した。

昼食を終え、マルスとロイは予定通りすま村中を散歩していた。しかし散歩と言うのは名ばかりで、実際はマリオの家に遊びに行っ

てピーチお手製のお菓子を貰ったり、偶然乱闘帰りのメタナイトと  
会い剣の手合わせをしたり、オリマーとMr・G & amp; Wの営  
んでいるパン屋・『ピクミンの森』のちよつとした手伝いをしてお  
礼にパンを貰ったり（この時の『唐揚げパン』にはアイクがかなり  
喜んでいた）と、自由きままに村を放浪していた。

気が付くと太陽は西に沈みかけ、夕日が村全体をオレンジ色に染め  
ている。

「あゝ遊んだ遊んだ」

「もうすっかり夕方だねえ……あと他に出来ることは……。」

『うゝん……』とロイが唸っていると、突然二人の後ろにいたアイク  
が『あ』と声を上げた。

「どうしたの？」

するとアイクはガシツと二人の腕をつかみ、歩いてきた方向と逆に  
歩き始める。

「ちよちよ……アイクどしたの!？」

「……お前らに見せたいものがある……今ならまだ間に合うから少  
し急げ……!」

珍しく興奮したような様子のアイクに驚き、二人は大人しく腕を引  
かれたままついていく。

「……な……長い……。」

延々と続いているのではないかというくらい長い石段を登り続け、  
マルスはすっかり疲れきっていた。

「こら休むなよ、僕だって疲れてんだから……。」

「……マルス、休んでいる暇はない。早くしろ……!」

「だって、もう体力の限界だよ……。」

ペタンと座り込むマルスに見兼ねたアイクは彼に近寄り、背を向けて中屈みになり『おぶってやる』と言うと、マルスはピョンと立ち上がりアイクの背中に乗る。

「あっ、マルスずるい。」

「へっへっ 王子様は無駄な体力無いらしやうがないの！」

「……行くぞ。」

二人はまた歩き出し、マルスは『頑張れ』とひたすら応援している。

「着いたあ……！」

石段を登り終えたロイは疲労のあまりドサリと地面に座り込む。

マルスはアイクの背中から降り、辺りを見回している。

「ねえアイク……ここに何かがあるの？」

するとアイクは『こっちだ……』と数十歩前に進んで手招きをし、二人はそれに誘われその位置に移動する。

「うわあ………！！！」

その瞬間、目の前に広がった光景に二人は思わず歓声を上げた。

彼らの眼下には夕日に照らされたすま村があり、中心部にあるスマブラスタジアムは銀色の部分が夕日を反射し、キラキラと光って幻

想的な光景を産み出していた。夕日は山と山の間に挟まれ、段々と沈んでいく。

「凄い……………！」

「よくこんな場所見つけたね？」

「……以前、筋トレのために走っていたら偶然見つけてな……………」  
『夕日の丘』と俺は呼んでいる……………良かった。明日いなくなる前にお前達にこの場所を教えられて……………」

「……………アイク……………」

じわり、とロイの目に涙が浮かび視界がぼやける。

今すぐにでも声を上げ、アイクに抱きついて泣き出したい気持ちでいっぱいだった。

「……………すごいねアイク！こんな場所見つけるなんて！」

「……………」

マルスの声に気付きロイが顔を上げると、彼は笑顔でアイクに話しかけていた。

『笑って見送ろう』

そう誓ったのを思いだし、ロイは腕で目を擦り涙を拭くと、自分もまたアイクに近付いていった。

次に続く。

思い出は多いにこしたことはない（後書き）

この一話で完結させようと思ったら文字数の関係上で2つに分離：  
（汗） いよいよラストです。気合いを入れねば。



「おかえりなさい」は最高の言葉

夜、10時過ぎ。

すま家のリビングではシークがアイクのマントの裾を直しており、その様子をリンク・ゼルダ・ダークが興味津々に見ている。

「……君達、そんなに凝視するなよ。何かやりにくい……。」

「いや、器用なもんだなあと思ってよ……。」

「やはりシークはすごいです。」

「常人には出来ないよね。」

「当たり前……よし、出来た。」

チヨキン、とハサミで糸を切ったのと同時に、アイクがリビングに入ってきた。

「やあアイク、これ仕上がったよ。」

「………すまない。」

アイクはマントを受け取りペコリとシークに頭を下げる。

「明日の朝、だっけ……？君があっちの世界に帰るの……。」

「……ああ。」

「まあ……アイクは朝弱いでしょう？早めに寝た方がよろしいのではないですか……？」

「……そうする……。」

シーク達に背を向け、アイクはリビングを出ると階段へと向かっていった。

その様子をダークはポカンとした顔で見ている。

「どうしたの？ダーク。」

「……あいつ、帰っちまうんだな……。」

「そうだよ。」

「……何かお前ら、冷たくねえか？家族が一人いなくなるんだぞ？」  
「あれ？ダーク知らないの？」

「……？何をだよ？」

「アイクはさあ」

ガチャリとドアを開け最初に目に入っしたのは、自分のベッドに座り  
マイ枕を持つ二人の弟の姿であった。

「よお、遅かったね！」

「……何をしている……？」

「今日は何が何でも一緒に寝てもらうよ！拒否権は無し！」  
ビシッ！と指を差されたアイクはただ呆然としていたが、やがて溜  
め息を一つつくとマントを着替えの上に置き、ボスンとベッドに腰  
掛け、二人の方を向き口を開く。

「……お前ら……今日はどうした……？」

「え！？ど……どうしたって、何が……？」

「……いつもと様子が違う……何かあったのか？」

いつものように振る舞っていたつもりだったが、やはりアイクの目  
は誤魔化せなかった。

ロイがどう答えようか迷っていたその時、マルスが俯いたまま呟く  
ように言った。

「……アイクが、帰るからだよ……。」

「……俺が、帰るからか……？」

「……そうだよ……。」

マルスに便乗し、しかし彼とは正反対にロイは笑顔でアイクに向かって言う。

「よかったねアイク！明日で傭兵団の人達や君の仲間、それにミストちゃんとまた暮らせるんだよ！」

「え……？」

「ミストちゃん寂しかっただろうね、今までお兄さんがいなくてたった一人で……でも、これで彼女もやつと君と暮らせるんだよね！今までいなかった分、目一杯優しくしてあげなよ！」

認めたくない事実を口にする度に、ズキ、ズキとロイの心は傷付き酷く痛み、いつしか彼の目から一筋の雫が流れ落ちた。

「……ロイ……？」

「……僕達なら、大丈夫だから……君を、引き止めたりしないよ……」

……君は、『本当』の家族と……

「……！！」

涙が溢れて止まらない。  
心の痛みも、もう限界だ。

マスターに『止めるな』と言われたが、やはりそんなこと無理に決まっていた。

もう、嘘はつきたくない。

ギリ、と拳を強く握った。その時、

ボスッ

「…………アイク！！  
行っちゃやだあ！！」

「…………！！」

驚いてに顔を上げると、先程まで黙っていたマルスがアイクに抱きつき、子供の様に声を上げて泣いていた。

「…………マルス…？」

「帰るなんていやだ……！！許さないんだから……ずっとここに居てよ……アイク……！！」

「なっ……！？ずるいよマルス……！だって君、『絶対泣かない』って言うて……僕だって……ずっと……我慢して……！！」

……アイクウウッ……！！」

我慢していたものが一気に爆発し、ロイもアイクに抱きつき思いきり泣きじゃくった。

「……っう……ひぐっ……サヨナラなんて、嫌だよお……！！」

「ひっく……行かないでよお……！！ずっと……側にいてよ……！！」

兄さん……！！」

「…………お前ら…………」

一週間で帰ってくるには、反応がオーバー過ぎないか…………？」

317

『…………え？』

アイクの一言で二人は固まり、ギギギと軋んだ音を鳴らせてアイクの顔を見る。

「ど…………どひひひひ…………？」

「…あつちの様子が気にかかってな……マスターに頼んで一週間だけあつちの世界に行かせてもらうことになったんだが……何も聞いていなかったのか…？」

「……あんの右手ええ……っ！！」

怒りと恥ずかしさに震えるマルスの脳裏りに、爽やかな笑顔のマスターの姿が浮かんだ。

「ん！？でもさロイ、君リンクから話聞いたんでしょ！？」

「あ…アイクが帰るって聞いて居ても立ってもいらねず、最後まで聞かないで……。」

「……お前もマスターと同罪だ……！」

怒ったマルスはロイの頭をつかみ、髪をグシャグシャと掻き回す。

「あゝやめてマルス……！」

ギャーギャーと騒いでいると、不意に頭に優しく手を添えられ、ポスンとアイクの寝間着に頭が軽くぶつかる。

「……アイク？」

マルスとロイが顔を上げると、アイクは滅多に見せない穏やかな笑みで二人を見ていた。

「…お前ら……俺のために泣いてくれたんだな……」

「ありがとう……。」

「まあ…誤解から生まれたっていうか…その……。」

「それでも構わん……安心しろ。俺の帰る家は、ここだ……。」

『…エヘ……。』

アイクの言葉に何だかむず痒くなり、マルスとロイは顔を見合わせ  
て笑う。

「…さあ、もう寝るか……。」

「うん、そうだね……。」

「おやすみ。」

3人は布団に入り、カチリとアイクによって明かりが消される。

二人の弟は兄の腕をしっかりと抱き、安堵したような表情で眠りに  
着いた。

一週間後、アイクはすま家に帰ってきた。



玄關に入ったその時、サムスの出迎えよりも早く来たのは、二人の弟のタツクルに近い抱擁だった。

苦笑しながら『ただいま』と言うと、二人は満点の笑顔で言った。

『おかえりなさい!』

すま家は今日も平和です。

おしまい。

「おかえりなさい」は最高の言葉（後書き）

読者の皆様、今回の話で「すまさん家」は最終話となります。今まで愛読してくれた方々、本当にありがとうございます。

セカンドシリーズもよろしく願います。では、このへんで。 また会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0322e/>

---

すま村のすまさん家。

2010年10月11日12時29分発行